

群馬県前橋市

荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡

発掘調査報告書

1990

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団



3号住居跡から出土した銅印

序 文

前橋市は名峰赤城山にいだかれ、坂東太郎で名高い利根川が流れる山栄水明の地であります。

赤城山南麓、前橋台地上には旧石器時代からの人々の生活の営みの跡が見出され、特に古墳時代には大室古墳群、広瀬朝倉古墳群、総社古墳群をはじめ数多くの古墳が作られ、東国を中心として栄えてきました。

荒子小学校校庭遺跡は荒子小学校校庭拡張に伴う発掘調査である。荒子小学校周辺では昭和27年に校庭より住居跡が発見されており、北東300mの荒砥上西原遺跡は勢多の郡衙跡とも考えられています。

本遺跡から発見された銅印「讖」も上西原遺跡との係りが考えられています。

本報告書を刊行するにあたり援助、協力をいただいた関係各課に厚くお礼を申し上げます。

本遺跡の一部が関係各課の御尽力により校庭の縁地帯に保存され、活用されますことは文化財保護においてこの上ない喜びであります。

また、本発掘調査に際し、山武考古学研究所・所長をはじめ、調査担当者・作業員に感謝申し上げます。

本報告書が斯学の発展のため寄与できれば幸いと存じます。

平成2年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 二瓶 益巳

例　　言

- この報告書は、前橋市立荒子小学校校舎増設地内（前橋市荒子町大字川龍寺戸字大久保地内）における埋蔵文化財発掘調査に関するものである。
- 本遺跡の名称は、昭和38・39年に群馬大学によって発掘調査された「荒子小学校校庭遺跡」と同じ台地上に位置する調査区のため、同一名称を用いた。また調査期間の都合上、便宜的にⅡ・Ⅲの名称を付したが、本書では資料を一括して掲載している。
- 現地調査は前橋市教育委員会の指導のもとに前橋市埋蔵文化財発掘調査団を組織し、山武考古学研究所が担当した。
- 本遺跡の現地調査は「荒子小学校校庭Ⅱ遺跡」が平成元年2月20日から同年3月28日、「荒子小学校校庭Ⅲ遺跡」が平成元年6月22日から同年8月23日まで行った。
- 本書の執筆分担は以下の通りである。

I 井野誠一 （前橋市教育委員会 文化財保護課 主任）

II・III 湯原勝美・安藤杜夫 （山武考古学研究所 所員）

IV 石塚三夫 （ “ ” ）

V 千田幸生・武部喜充 （ “ ” ）

9の(1)は国立歴史民俗博物館情報資料研究部の永嶋正春氏に依頼し玉稿を賜った。

VI 千田幸生・武部喜充

- 墨書き器の赤外線テレビカメラによる撮影及び判読、線刻筋鉢車の判読は国立歴史民俗博物館歴史研究部の平川南氏にお願いした。
- 3号住居跡出土の銅印の文字鑑定は文化庁文化財専門審議委員木内武男氏にお願いした。
- 本書の編集は千田・武部が行い、山武考古学研究所所長平岡和夫が総括した。
- 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の方々に御指導、御助言を賜った。記して感謝の意を表す次第であります。

群馬県教育委員会 前沢和之氏、群馬県県史編さん室 松田猛氏。

凡　　例

- 第1図は国土地理院発行2万5千分の1「大湖」を使用した。
- スクリーントーンは灰釉陶器の釉部分 [●]、黒色処理土器 [■] を示す。
- 遺物断面の黒塗りは還元焰焼成による須恵器を示す。
- 挿図中のドットは●で土器、▲で鐵器、■で石製品を示す。
- 遺物の写真横に付した番号は挿図中の番号と一致し、写真を割愛した遺物の番号は欠番となっている。

目 次

本文 目 次

巻頭カラー（3号住居跡から出土した銅印）

序 文
例 言
凡 例

I 調査に至る経緯	1
II 調査の組織	2
III 調査の経過	2
IV 遺跡の位置と環境	5
V 検出された遺構と遺物	9
1 壴穴住居跡	9
2 掘立柱建物跡	57
3 井戸跡	61
4 十塙	65
5 道路状遺構	69
6 溝状遺構	71
7 遺構外出土の遺物	71
8 墨書き器・線刻鉄鍵車について	72
9 銅印について	73
(1) 出土銅印の蛍光X線分析結果	73
(2) 群馬県内出土銅印	74
VI まとめ	75
1 住居跡出土の土器について	75
2 集落の変遷について	78

挿 図 目 次

第1図 荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡と周辺の遺跡	4	第39図 17号住居跡の遺物	38
(2万5千分の1地形図)		第40図 18号住居跡の遺物	38
第2図 荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡の位置	6	第41図 18号住居跡とカマド	39
(千分の1地形図)		第42図 19号住居跡	40
第3図 遺構配置図(折り込み)	7	第43図 19号住居跡のカマド	41
第4図 1号住居跡	9	第44図 19号住居跡の遺物	42
第5図 1号住居跡の遺物	9	第45図 20号住居跡の遺物(1)	42
第6図 2号住居跡とカマド	10	第46図 20号住居跡	43
第7図 2号住居跡の遺物	12	第47図 20号住居跡のカマド	44
第8図 3号住居跡	13	第48図 20号住居跡の遺物(2)	45
第9図 3号住居跡の遺物(1)	14	第49図 20号住居跡の遺物(3)	46
第10図 3号住居跡のカマド	15	第50図 21号住居跡の遺物	47
第11図 3号住居跡の遺物(2)	16	第51図 21号住居跡	48
第12図 4号住居跡	18	第52図 21号住居跡のカマド	49
第13図 4号住居跡の遺物	19	第53図 22号住居跡とカマド	50
第14図 5号住居跡とカマド	20	第54図 23号住居跡とカマド	51
第15図 5号住居跡の遺物	21	第55図 23号住居跡の遺物	52
第16図 6号住居跡	22	第56図 24号住居跡	53
第17図 6号住居跡の遺物	22	第57図 24号住居跡の遺物	54
第18図 7号住居跡の遺物	23	第58図 25号住居跡	54
第19図 7号住居跡とカマド	24	第59図 25号住居跡の遺物	55
第20図 8号住居跡とカマド	25	第60図 26号住居跡とカマド	56
第21図 8号住居跡の遺物	26	第61図 26号住居跡の遺物	56
第22図 9号住居跡	26	第62図 1号掘立柱建物跡	57
第23図 9号住居跡の遺物	26	第63図 2号掘立柱建物跡	58
第24図 10号住居跡の遺物	27	第64図 3号掘立柱建物跡	59
第25図 10号住居跡とカマド	28	第65図 4号掘立柱建物跡	60
第26図 11号住居跡	29	第66図 1・2・4・5号井戸	62
第27図 11号住居跡の遺物	29	第67図 3号井戸	63
第28図 12号住居跡	30	第68図 井戸の遺物	64
第29図 12号住居跡の遺物	30	第69図 土塙(1)	66
第30図 13号住居跡	31	第70図 土塙(2)	67
第31図 13号住居跡の遺物	31	第71図 土塙(3)	68
第32図 14号住居跡	32	第72図 土塙の遺物	69
第33図 14号住居跡のカマド	33	第73図 1号道路状遺構、1・2号溝状遺構	70
第34図 14号住居跡の遺物	34	第74図 遺構外出土の遺物	71
第35図 15号住居跡とカマド	35	第75図 住居跡出土土器変遷図(1)	76
第36図 15号住居跡の遺物	36	第76図 住居跡出土土器変遷図(2)	77
第37図 16号住居跡	37	第77図 住居跡出土土器変遷図(3)	78
第38図 17号住居跡	38	第78図 集落変遷図	78

図版目次

図版1	遺跡遠景（赤城山を望む）	図版11-1	20号住居跡
図版2-1	荒子小学校校庭Ⅲ遺跡空中撮影 (左がⅢ遺跡、右が荒子小学校)	2	21号住居跡
2	荒子小学校校庭Ⅲ遺跡 全景 (北から望む)	3	22号住居跡
図版3-1	荒子小学校校庭Ⅲ遺跡北側（南 から望む）	図版12-1	23号住居跡
2	荒子小学校校庭Ⅲ遺跡 全景 (南から望む)	2	23号住居跡出土遺物(1)
図版4-1	1号住居跡	3	23号住居跡出土遺物(2)
2	2号住居跡	4	24号住居跡
3	2号住居跡カマド	図版13-1	25号住居跡
図版5-1	3号住居跡	2	26号住居跡
2	3号住居跡出土銅印(1)	3	1号掘立柱建物跡
3	3号住居跡出土銅印(2)	図版14-1	2号掘立柱建物跡
4	3号住居跡出土銅印(3)	2	3号掘立柱建物跡
5	3号住居跡貯蔵穴	3	4号掘立柱建物跡
図版6-1	4号住居跡	図版15-1	14号土塁
2	5号住居跡	2	22号土塁
3	6号住居跡	3	24号土塁
図版7-1	右上 7号住居跡左下 8号住居跡	4	27号土塁
2	9号住居跡	5	1号井戸
3	10号住居跡	6	2号井戸
図版8	11号住居跡	図版16-1	3号井戸
2	12号住居跡	2	1号道路状遺構北側
3	13号住居跡	3	1号道路状遺構南側
図版9-1	14号住居跡	4	2号溝状遺構
2	15号住居跡(1)	図版17	2・3号住居跡出土遺物
3	15号住居跡(2)	図版18	4・5・6・7・8・10号住居 跡出土遺物
図版10-1	16号住居跡	図版19	13・14・15・18・19号住居跡出 土遺物
2	左下17号住居跡左上18号住居跡	図版20	20・21・23・25・26号住居跡出 土遺物
3	19号住居跡	図版21	墨書き器
		図版22	鉄・石製品・古錢

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧表	5	表18 18号住居跡出土遺物観察表	40
表2 1号住居跡出土遺物観察表	9	表19 19号住居跡出土遺物観察表	41
表3 2号住居跡出土遺物観察表	11	表20 20号住居跡出土遺物観察表 (1)	44
表4 3号住居跡出土遺物観察表	17	表21 20号住居跡出土遺物観察表 (2)	45
表5 4号住居跡出土遺物観察表	18	表22 20号住居跡出土遺物観察表 (3)	46
表6 5号住居跡出土遺物観察表	21	表23 21号住居跡出土遺物観察表	48
表7 6号住居跡出土遺物観察表	22	表24 23号住居跡出土遺物観察表 (1)	50
表8 7号住居跡出土遺物観察表	23	表25 23号住居跡出土遺物観察表 (2)	53
表9 8号住居跡出土遺物観察表	25	表26 24号住居跡出土遺物観察表	54
表10 9号住居跡出土遺物観察表	26	表27 25号住居跡出土遺物観察表	55
表11 10号住居跡出土遺物観察表	27	表28 26号住居跡出土遺物観察表	56
表12 11号住居跡出土遺物観察表	29	表29 井戸跡出土遺物観察表	61
表13 12号住居跡出土遺物観察表	30	表30 上塙一覧表	65
表14 13号住居跡出土遺物観察表	30	表31 土塙出土遺物観察表	69
表15 14号住居跡出土遺物観察表	32	表32 通溝外出土遺物観察表	71
表16 15号住居跡出土遺物観察表	37	表33 墨書き器・線刻防錠車一覧表	72
表17 17号住居跡出土遺物観察表	38	表34 群馬県内出土銅印一覧表	76

I 調査に至る経緯

昭和62年11月

同月11日付で総務課より埋蔵文化財の表面調査依頼が提出される。

同月24日、総務課あてに、周知の遺跡地であり、事前調査が必要である旨回答する。

また、文化財調査費用について回答を行う。

昭和63年4月

同月13日付で前橋市長藤嶋清多氏より、土地取用法第18条第2項第5号の規定に基づく意

見についての照会があり、18日付で発掘調査が必要な旨回答する。

昭和63年10月

同月11日付で前橋市教育委員会教育長岡本信正氏より、埋蔵文化財発掘調査についての依頼が提出される。

同月14日付で前橋市埋蔵文化財発掘調査団に発掘調査依頼を行う。

平成元年1月

同月14日付で調査実施が決まり、山武考古学研究所と調査の委託契約を締結する。

買収の都合で遺跡地の北半を荒子小学校校庭Ⅱ遺跡とし、昭和63年度に調査を行い、南半を荒子小学校校庭Ⅲ遺跡とし、平成元年度に調査を実施することとする。

調査は3月27日まで実施され、奈良・平安時代の住居跡12軒、掘立柱建物跡4棟、溝1条、井戸3基、土塙13基、道跡1が検出される。遺物として3号住居跡より銅印「謙」が出土。

平成元年4月

同月18日付で、埋蔵文化財発掘調査（南半部）の依頼が提出される。

同月19日付で、前橋市埋蔵文化財発掘調査団に調査を依頼する。

平成元年6月

同月14日付で、前橋市長藤嶋清多と前橋市埋蔵文化財発掘調査団団長二瓶益巳との間に、埋蔵文化財発掘調査委託に関する覚書を締結する。

同月16日に調査について、三者契約による委託契約とすることが決まり、19日付で、調査団を立合者とし、前橋市長藤嶋清多と山武考古学研究所所長平岡和夫の間で委託契約が締結。

調査は8月23日まで実施され、奈良・平安時代の住居跡14軒、溝1条、井戸2基、土塙20基、道跡1が検出される。

なお、遺跡のうち住居跡1軒と掘立柱建物跡1棟が検出地を縁地帯として保存・活用がなされることになった。

(注、荒子小学校校庭遺跡は、昭和27年に住居跡1軒、昭和38年に住居跡5軒が調査検出されている。)

II 調査の組織

団長 二瓶 益巳（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長）
調査指導 井野 誠・（前橋市教育委員会 社会教育課文化財保護係主任）
平岡 和夫（山武考古学研究所 所長）
調査担当 安藤 杜夫（山武考古学研究所 資料室係長）
湯原 勝美（山武考古学研究所 調査研究員）
伊庭 彰一（山武考古学研究所 調査研究員）

発掘参加者

相京清子、朝生タカ、阿部シゲ子、飯島ヤクエ、飯島民弥、飯島実、石井百々子、石関うめ子、石関ヨズエ、石田いつ、伊藤順子、井野芳雄、江原信二、大沢やよい、人間郁恵、岡山晋富、岡田ナオ、小沼あき、小沢丑子、小保方豊五郎、片岡美和子、勝田キミエ、鹿沼かほる、木島久子、木村かく乃、木村源次郎、木村玉代、木村つや子、木村はる子、久保田海一郎、高坂とよ子、高坂なみ、高坂花子、高坂やすの、小屋たみ子、坂牧光枝、新保永二、新保勝太郎、新保隆、新保富恵、新保昌子、新保まつ、新保松乃、新保幸永、須藤とくの、須藤なお子、高橋きしの、田中善四郎、鳥山初子、内藤たか、根本時子、羽鳥イソヨ、原島なか、福島逸司、藤崎徳恵、藤塚千恵子、星野ふじ、堀越うめ子、堀越くに、堀越豊、本間富子、松永シマ子、摩庭幸恵、宮川いち子、三宅美知子、山口里江、山田由美子、横沢信子、吉田やす江

III 調査の経過

調査期間は荒子小学校校庭Ⅱ遺跡が平成元年2月20日から同年3月28日まで、同Ⅲ遺跡が平成元年6月22日から同年8月23日までである。

【荒子小学校校庭Ⅱ遺跡】

2月20日～3月4日 調査区内は桑畑として使用されていたため抜根作業から開始し、その後は表土除去作業となった。表土は厚さが30～50cmで、耕作による搅乱がローム層上面まで達している箇所もあった。

3月1日～3月6日 遺構確認面を助連で平滑にし、確認作業を行った。北側にピットを多數確認したが、桑の抜根の可能性が強い。北調査区の中央に重複したものも含めて竪穴住居跡を9軒確認した。また南側に掘立柱建物跡を2棟確認した。南調査区からは上塙状の落ち込みとピット群を確認した。

3月8日～3月10日 3～6号住居跡の掘下げを開始。また、土塙状の落ち込みを半載しながら調査を進めた。

3月13日～17日 3号住居跡の西壁際から床着の状態で銅製の印が出土した。遺存状態はすこぶる良好である。南調査区の土塙状の落ち込みは3基が掘り込みの深い井戸跡となり、1基は大きな風倒木痕と判明した。15日から掘立柱建物跡の調査を開始した。桑の抜根とも重なって判別しにくかったが、3棟の掘立柱建物跡を検出した。

3月18日～22日 積穴住居跡は12軒確認され、いずれも20日までにカマドを残した状態で掘り下げを終了した。また、21日からは1・2号溝状遺構の調査を開始した。重複している住居跡が何軒かあり、そのうちの7・8号住居跡の重複関係は土層断面から8号住居跡の方が新しいことが判明した。共にカマドは東壁に付設されている。

3月23日 本日は荒子小学校の6年生（約90名）を対象として現地説明会を実施した。作業は住居跡のカマド調査を中心に行った。

3月24日～27日 3号井戸は上層を有する井戸跡と判明した。住居跡のカマド調査は27日で全て終了した。また、27日から全体測量図の作成を開始した。

3月28日 遺跡の全体測量図を作成し、遺跡全景撮影をして全ての調査を終了した。

【荒子小学校校庭Ⅲ遺跡】

6月21日 調査前の現況写真撮影を行い、調査区域を確認し、安全対策として調査区境界沿いにロープを張った。

6月22日～7月1日 Ⅲ遺跡と同様に本遺跡も桑畠として使用されていたため抜根作業から開始し、その後は表土除去作業を行った。前回のⅡ遺跡よりも表土が厚く、なかでも調査区南側は谷状に深くなっている、表土が1m以上も堆積していた。

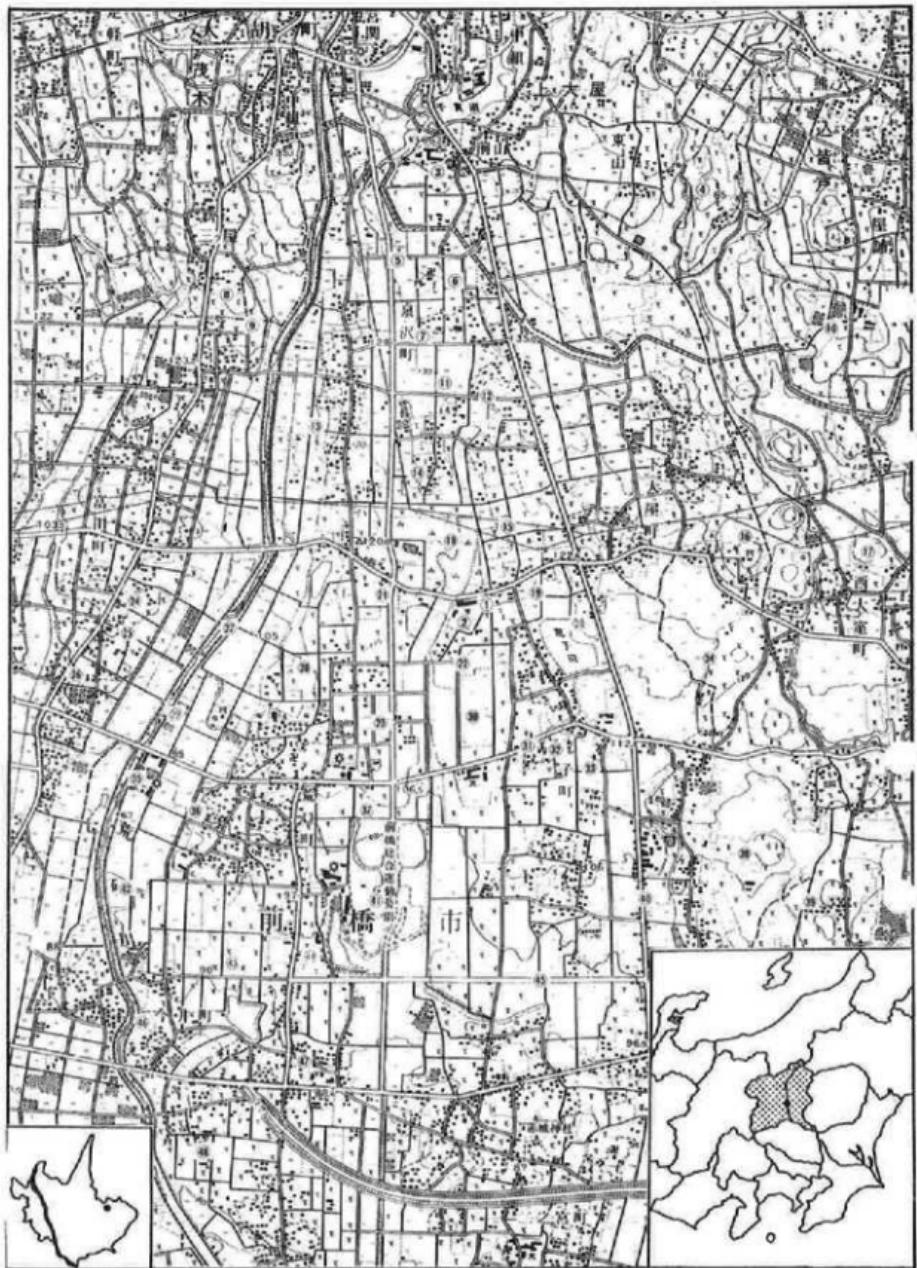
7月3日～18日 7月初旬から雨天の日が多く表土除去作業は予定していたよりも手間取った。結局、表土除去作業が終了したのは18日となった。また、表土除去と併行して遺構確認作業を行い、その結果、13軒の積穴住居跡と溝状遺構2条と多数の土塙状の落ち込みを確認した。

7月19日～29日 確認した遺構の配置図を作成し、溝状遺構と16・19・25号住居跡の掘り下げを開始した。

7月31日～8月5日 積穴住居跡の調査を中心に作業を進めた。住居跡の重複している所は3箇所で合計7軒である。

8月7日～19日 住居跡のカマド調査と上塙状の落ち込みの掘り下げを中心に作業を進めた。

8月21日～23日 調査区南側から最後に確認した26号住居跡を掘り下げ、カマド調査を行った。23日午前中までに遺跡全体測量図を作成し、遺跡全景撮影をして全ての調査を終了した。



第1図 荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡と周辺の遺跡

IV 遺跡の位置と環境

荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡は赤城山麓にあたる前橋市荒子町川龍替戸に所在し、市街地から東へ約7.5kmの位置にある。本遺跡の立地する赤城山南麓の基盤層は火山泥流堆積物によって形成されており、周辺地域の地表面は下部ローム以上を堆積する洪積台地と、ロームの二次堆積である砂質土性の微高地、及び宮川によって形成された冲積地とで成り立っている。宮川は旧利根川の第三次支川で、荒砥川に合流した後に旧利根川筋の桃ノ木川から現利根川へ流下する。現在では、水田灌漑のために中流域で「深堀」と称する用水に接続されて他地域から水補給が行われている。

周辺では先土器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が発掘調査されており、ここで時代別に本地域の遺跡分布を概観してみたい。

表1 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
1	荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡	奈良・平安集落、掘立柱建物跡	29	荒砥宮田遺跡	縄文前期住居、古墳前期中期・後期集落、奈良・平安集落、B軽石下水田跡
2	荒子小学校校庭遺跡	古墳後期集落、須恵器窯跡	30	頭無遺跡	弥生中期住居、古墳後期集落、平安集落
3	谷津遺跡	縄文集落、古墳群、奈良・平安集落	31	荒砥下押切遺跡	古墳後期集落、奈良・平安集落
4	上横伏古墳群		32	荒砥中堅敷遺跡	古墳後期集落、平安集落
5	山崎遺跡	縄文	33	荒砥保育所遺跡	古墳時代後期住居
6	寺東遺跡	古墳中期集落、溝	34	阿久山古墳群	
7	寺前遺跡	古墳中期集落、井戸、溝	35	荒砥前田遺跡	B軽石下水田・荒砥川の洪流水下の水田跡
8	三尾遺跡	先土器	36	荒口前原遺跡	弥生中期・後期初頭住居、平安住居
9	荒砥355号墳	前方後円墳	37	鶴谷遺跡群	縄文前期散布地、古墳中期・後期集落、奈良・平安集落
10	ヒツ石遺跡	弥生後期集落、古墳群	38	立野古墳群	
11	東前田北遺跡	古墳中期來落、中世塚、溝	39	丸山古墳群	
12	東京西遺跡	古墳中期来落、溝	40	荒砥荒子遺跡	古墳中期の権を伴う住居、後期集落、奈良・平安集落
13	丸山遺跡	縄文階下穴、古墳・奈良・平安集落	41	鶴谷遺跡群	縄文前期散布地、古墳中期・後期集落、奈良・平安集落
14	新山遺跡	古墳群、方形周溝墓、溝	42	荒砥北原遺跡	縄文前期・中期の住居、竪穴式草創期散布地、奈良・平安集落
15	上西原遺跡	墓壇を有する柱穴列と溝、奈良・平安集落	43	荒砥北三木堂遺跡	先土器・縄文草創期散布地、弥生住居、古墳前期・後期集落
16	伊勢山古墳群	前方後円墳、円墳15基	44	荒砥人塚遺跡	古墳後期集落、奈良・平安集落
17	中島古墳群		45	荒砥上之坊遺跡	縄文前期住居、弥生後期住居、古墳前期集落、奈良・平安集落
18	前山・前山丘遺跡	平安住居	46	北二木堂古墳群	
19	川籠呂戸遺跡	奈良・平安住居	47	大日遺跡群	古墳後期・奈良・平安集落
20	堤東遺跡	奈良集落	48	今井神社古墳群	古墳後期・奈良・平安集落、水田跡
21	柳久保遺跡	古墳集落、余良集落			前方後凹墳、円墳27基
22	大久保遺跡	奈良・平安集落			
23	柳久保遺跡群	先土器・縄文集落、古墳群、奈良・平安集落			
24	東厚古墳群				
25	東原遺跡	縄文前期住居、古墳後期集落、奈良・平安住居			
26	宮下遺跡	弥生後期住居、古墳後期集落、奈良・平安集落			
27	荒砥源訪西遺跡	古墳前期・後期集落、奈良・平安住居、C軽石に伴わる品、B軽石下水田跡			
28	荒砥源訪遺跡	縄文中期包含層、古墳時代初期集落			

先土器時代は、柳久保遺跡・三屋遺跡・北三木堂遺跡で、尖頭器などが出土している。今後の発掘調査によって遺跡数が増えると考えられる。

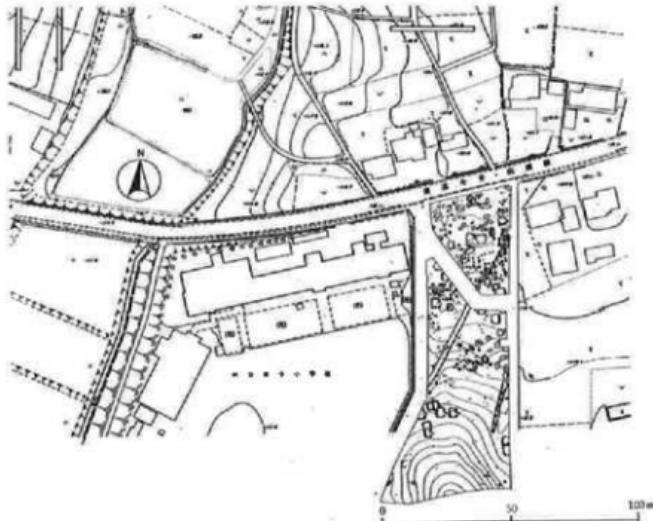
縄文時代は、草創期が荒砥北原遺跡・北三木堂遺跡、早期が柳久保遺跡・荒砥北原遺跡、前期が下鶴谷遺跡・荒砥宮田遺跡・東原遺跡・鶴谷遺跡、中期が荒砥诹訪遺跡・荒砥北原遺跡、後期が島原遺跡・荒砥上川久保遺跡が知られている。晚期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、中期が島原遺跡・頭無遺跡・荒口前原遺跡、後期は宮下遺跡・七ツ石遺跡が知られている。

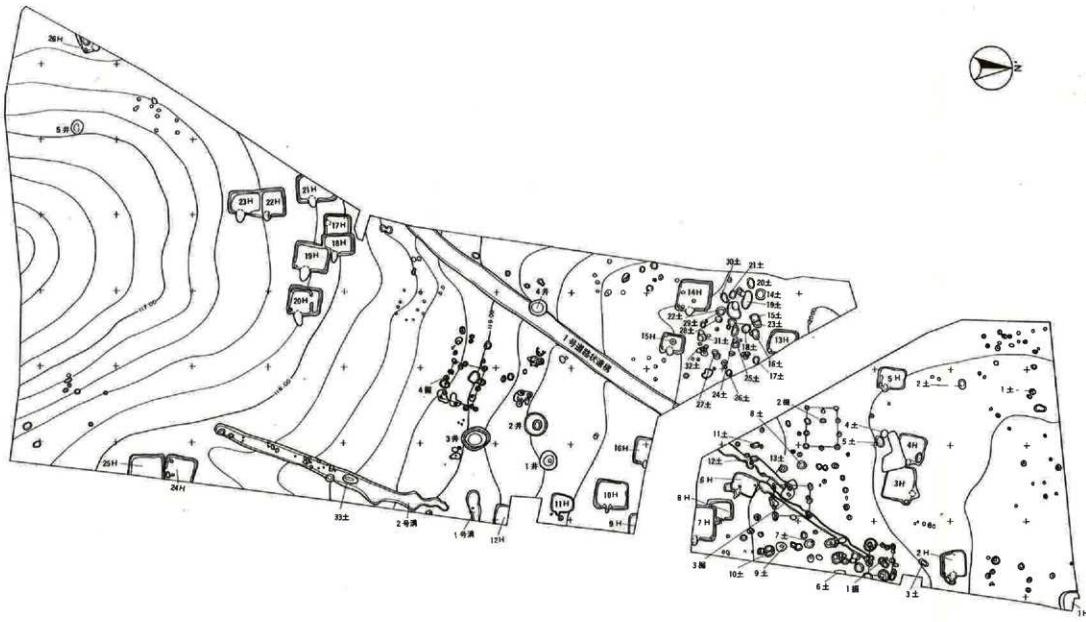
古墳時代は前期から急激に遺跡数が増加する。前期は荒砥宮山遺跡・荒砥上之坊遺跡の集落跡、他に荒砥前原遺跡・荒砥诹訪遺跡・堤東遺跡などで方形周溝墓群が知られている。中期は柳久保遺跡などの集落跡、他に荒砥荒子遺跡・丸山遺跡で豪族居館跡が発見されている。後期は山ノ上古墳・茂木古墳・今井神社古墳など數多くの古墳が築造され、群集墳を形成するようになり、県下有数の古墳密集地帯を形成している。

奈良・平安時代になると、近隣の台地上には数多くの集落が営まれるようになり、普遍的に人々の生活を支える水田跡も発見例が増加している。集落跡は中鶴谷遺跡・頭無遺跡などが知られ、浅間B経石によって埋没した水田跡は、柳久保水田跡などが知られている。また上西原遺跡では柵列と溝によって方形に区画され中央に基壇建物を持つ遺構が発見され、この地が古代の上野国勢多郡の中心（郡衙）と想定されている。

中世では、大宝城・今井城などの城郭跡が知られている。



第2図 荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡の位置



第3図 遺傳配置図

V 検出された遺構と遺物

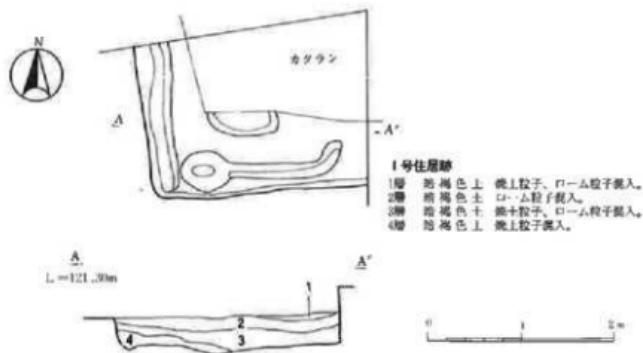
本遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡4棟、溝5条、土塙33基、井戸5基、道路1である。

1 竪穴住居跡

検出された26軒はすべて奈良・平安時代と考えられ、南側の谷部分を除いて、調査区のはば全域に分布する。

1号住居跡（第4・5図、図版4-1、表2）

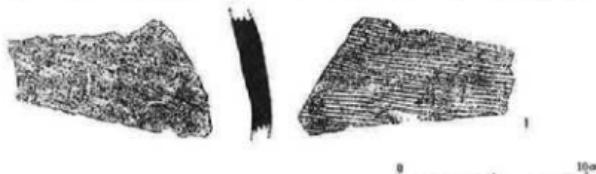
本跡は調査区北東側A-4・5グリッドで検出された。ほとんどが調査区外で、南東側コーナーのみの検出である。方形を呈すると思われ、壁高は30cm、周溝も検出されている。カマドは検出されていない。遺物は覆土中から少量出土している。



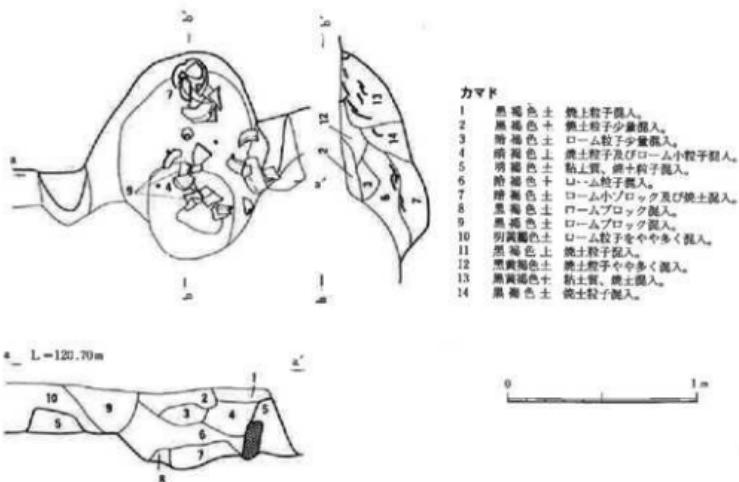
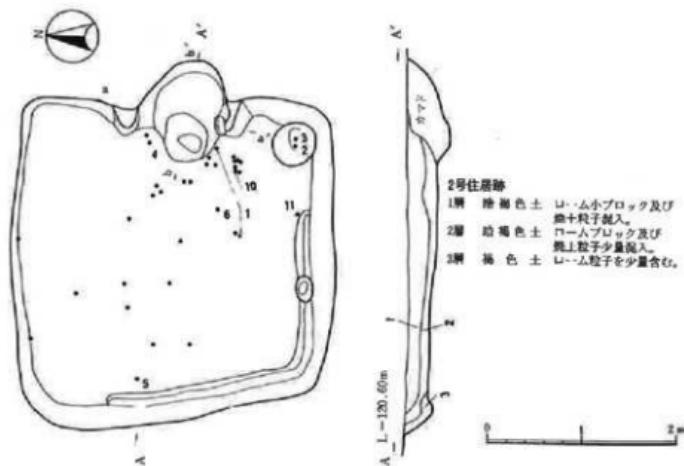
第4図 1号住居跡

表2 1号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(m)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 瓦 灰 灰 灰 灰	—	器高 口徑 底径	— 銅部片。 —	外腹平行印き目。 内面ナメ調整。	白色胎土 を含む。	灰色	未元 覆土中



第5図 1号住居跡の遺物



第6図 2号住居跡とカマド

2号住居跡（第6・7図、図版4-2・4-3・17・22、表3）

本跡は調査区北東側B-4、C-4グリッドで検出された。主軸方向はN-98°-Eである。規模は3.1×3.2mでやや歪んでいるが正方形に近い。壁高は30cm。

柱穴は検出されず、南東側コーナーには貯蔵穴が認められる。周溝は南西側のみ回る。

カマド 東壁中央に位置する。袖は粘土と石で構築されている。壁外への掘り込みは30cmでなだらかに立ち上がる。

遺物はカマドから土器の甕が3個体出土している。

表3 2号住居跡出土遺物観察表

調 器 種	法 量(φ)	器 形 の 特 徴	整・成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	備 考
1 土 瓶	器高 3.8 口径 13.1 底径 5.8	平底。体部外傾する。	外面部下端へラブリ。底部無調整(砂底状)。内面ナデ。	砂粒・白色 色、粘土を含む 多い。	暗褐色	酸化	カマド内
2 土 瓶	器高 4.1 口径 13.6 底径 5.2	平底。体部外傾する。	外面部下端へラブリ。口縁部ノア。底部無調整(砂底状)。内面ナデ。	砂粒・白色 色、粘土を少量含む。	暗褐色	酸化	貯蔵穴
3 土 瓶	器高 4.0 口径 13.2 底径 5.2	平底。体部外傾する。	外面部下端へラブリ。底部無調整(砂底状)。	白色・黑色 色、粘土を少 量含む。	褐色	酸化	貯蔵穴
4 土 瓶	器高 4.7 口径 13.2 底径 5.5	体部外傾する。底部平底。 1-3に比して器高や高 い。	外面部下端へラブリ。底部無調整(砂底状)。内面ナデ。	砂粒・白色 色、黑色 色、粘土を少 量含む。	褐色	酸化	カマド内
5 土 瓶 高台付椀	器高 (3.4) 口径 — 底径 6.0	高台部短く「ハ」の字状 に開く。	外面高台取り付け接丁寧 なナデ。内面ナデ。	白色・水 色、粘土を少 量含む。	暗褐色	酸化	覆土中
6 漆 瓶	器高 (4.2) 口径 13.6 底径 —	体部外傾する。	ロクロ成形。	白色粘土を少 量含む。漆密。	褐色	漆光	器表(不明) 回数々 覆土中
7 土 瓶	器高 19.8 口径 19.8 底径 —	器身や厚く、口縁部 「く」の字状に扁する。 最大幅は胴上半部。	外面、口縁部へラブリ。肩部横方向、胴 部縱方向へのラブリ。	砂粒・水 色、粘土を少 量含む。	暗褐色	酸化	カマド内
8 土 瓶	器高 11.0 口径 17.1 底径 —	口縁部短く外反する。	外面口縁部へラブリ。 胴上半部横方向へのラブリ。 内面へラブリ。	砂粒・白 色、黑色 色、粘土を少 量含む。	褐色	酸化	カマド内
9 土 瓶	器高 (15.8) 口径 18.0 底径 —	口縁部「く」の字状に外 反する。	外面胴上半部横方向の下 半部縱方向へのラブリ。 内面へラブリ。	砂粒・水 色、粘土を含む。	褐色	酸化	カマド内
10 上 鍋 台 便 梢	器高 (2.2) 口径 7.4 底径 —	台部のみ残。「ハ」の字 状に開く。	内外面共にヘラ調整。	砂粒・白 色、粘土を少 量含む。	褐色	酸化	床密着
11 銅 印 刀		刃先部のみ残。					覆土中

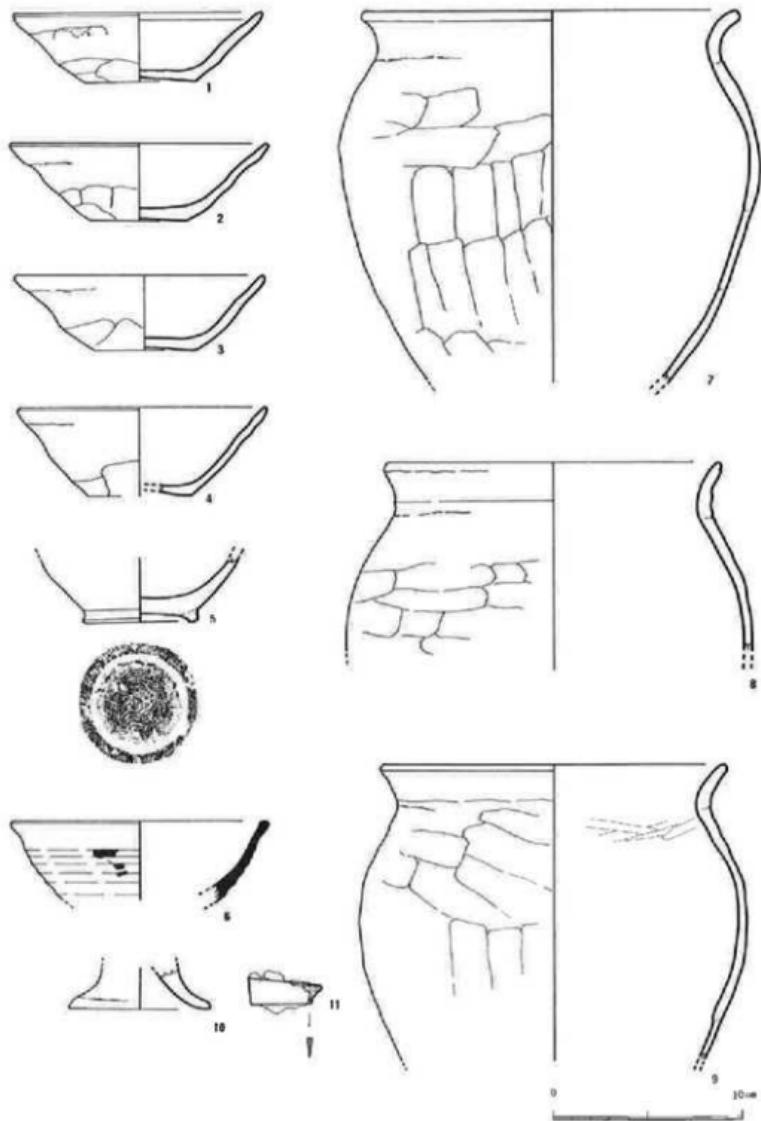
3号住居跡（第8・9・10・11・図、図版5-17・21・22、表4）

本跡は調査区北側C-3グリッドで検出された。西側には4号住居跡が近接する。主軸方向はN-20°-Eである。規模は4.3×3.9mで、やや横長の長方形を呈する。掘り込みは深く、壁高は50cmを計る。南西側コーナーは搅乱を受けている。

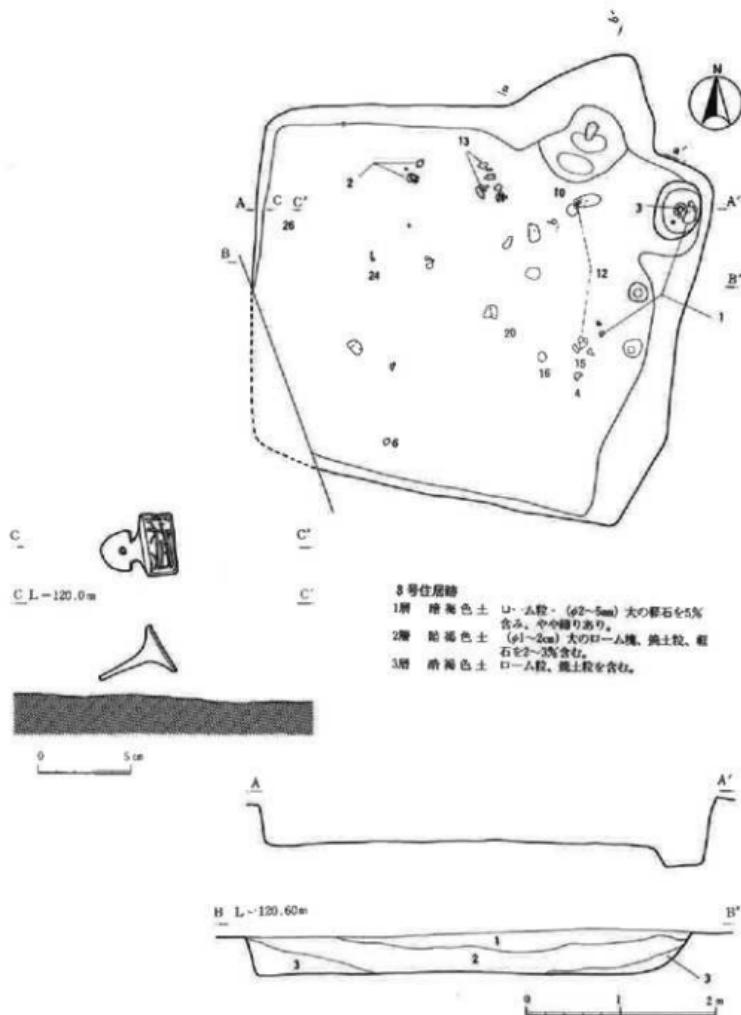
柱穴は検出されなかった。北東側コーナーには貯蔵穴が検出されている。

カマド 北壁東寄りに位置する。支脚の石が検出されている。袖は不明であるが、石が散乱していることにより、石組みのカマドであったと考えられる。

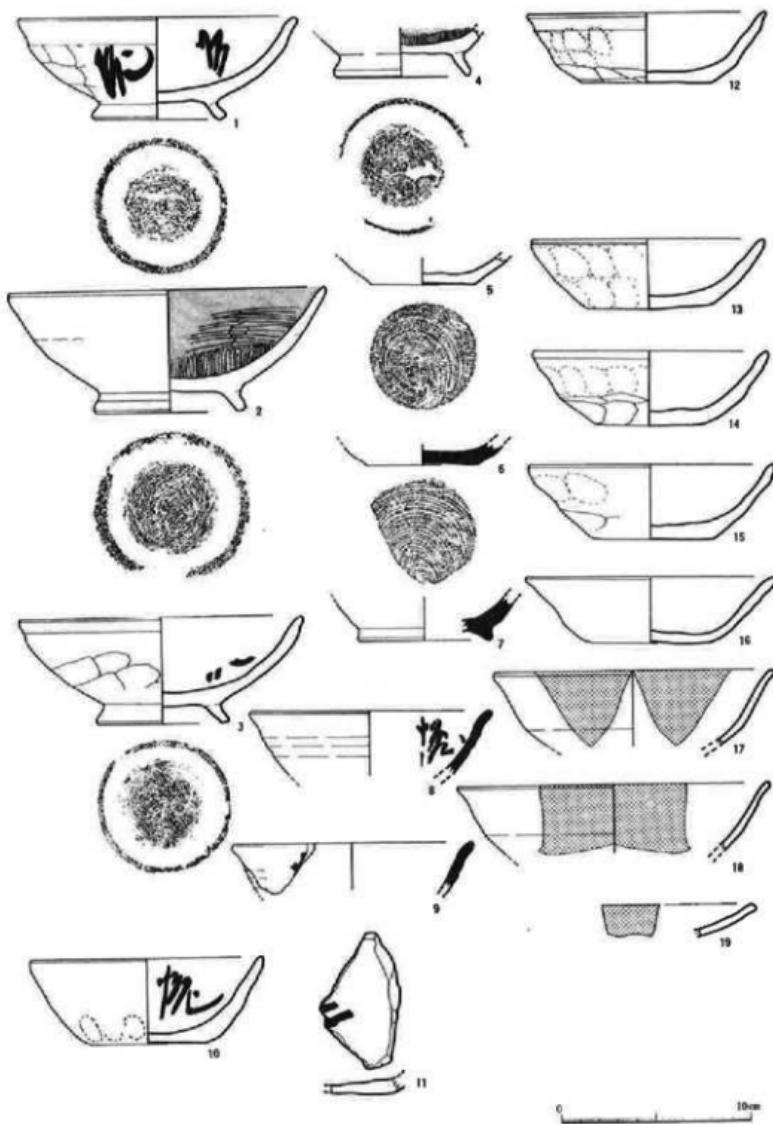
遺物は貯蔵穴、カマド付近を中心にややまとまって出土しており、西側壁寄り床面から1cm程浮いた状態で銅印が出土している。この銅印は出土状態から本跡に伴うものと考えられる。



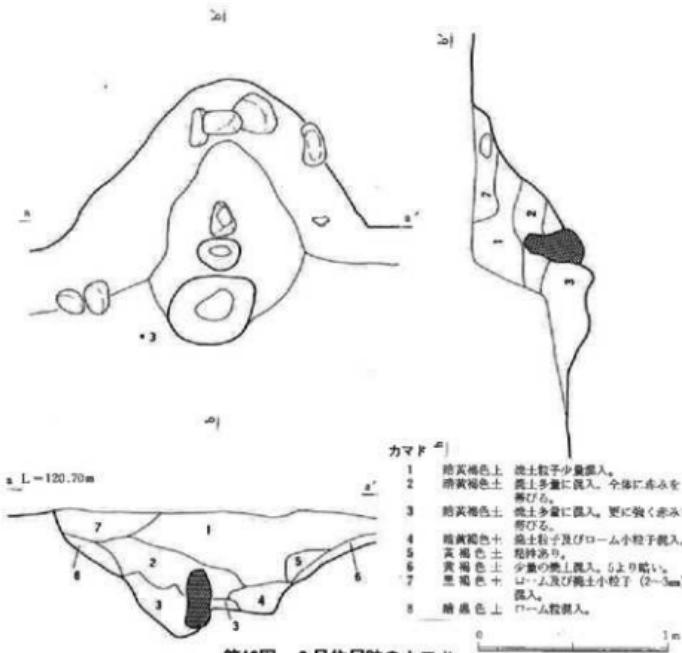
第7図 2号住居跡の遺物



第8図 3号住居跡



第9図 3号住居跡の遺物 (I)



第10図 3号住居跡のカマド

4号住居跡(第12・13図、図版6-1・18、表5)

本跡は調査区北側C-2・3グリッドで検出された。主軸方向はN-84°-Eである。規模は3.1×3mではば正方形を呈する。南側は搅乱を受けている。確認面からの掘り込みは50cmである。

ピット、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。

カマド 東壁中央に位置する。壁外への掘り込みは40cmでやや急激に立ち上がる。袖は粘土で構築されている。

遺物はカマド付近を中心で少量出土している。

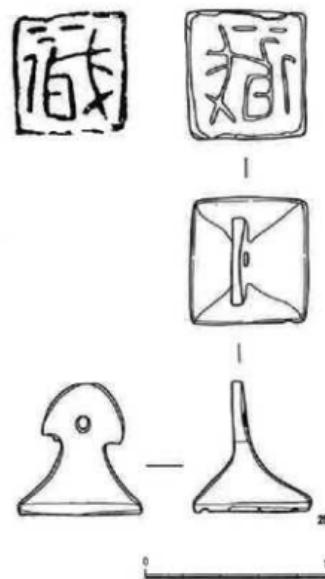
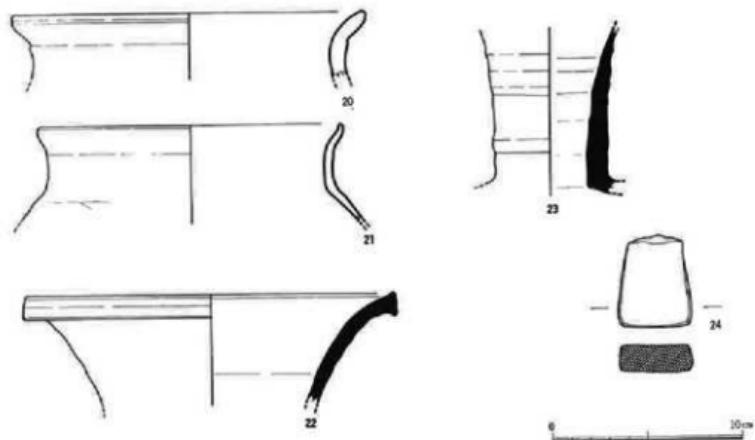
5号住居跡(第14・15図、図版6-2・18・22、表6)

本跡は調査区北西側C-2グリッドで検出された。主軸方向はN-99°-Eである。規模は3.6×2.5mで横長の長方形を呈する。壁高は45cmである。

南西側コーナーには貯蔵穴がある。ピット、周溝は検出されなかった。

カマド 東壁南寄りに位置する。粘土で構築されており、煙道部が残存するが、袖、支脚等は検出されていない。

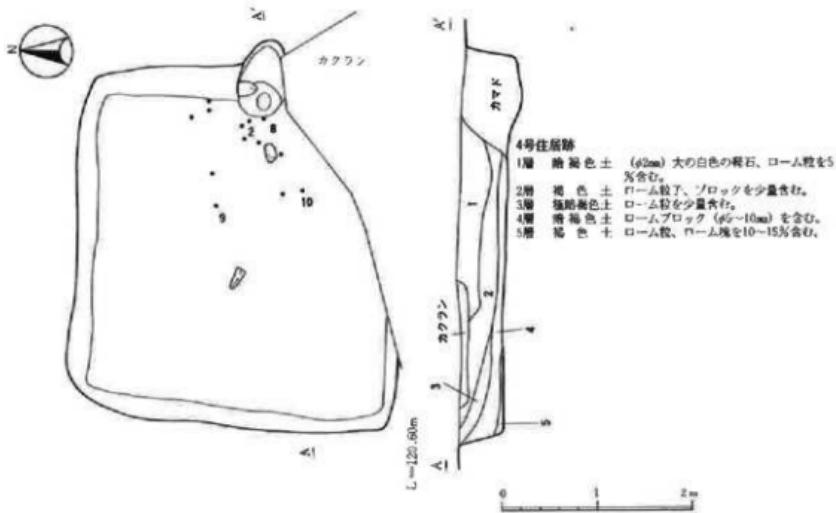
遺物はカマド、貯蔵穴等から少量出土している。



第11図 3号住居跡の遺物 (2)

表4 3号住居跡出土遺物観察表

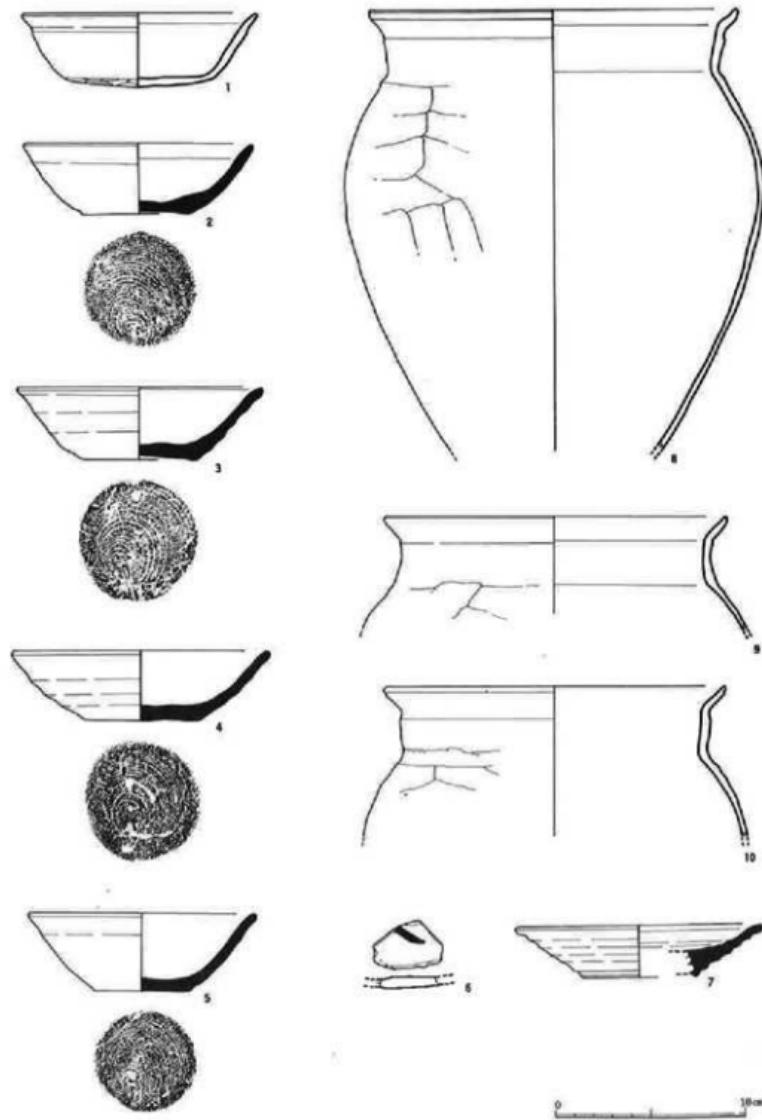
器種	法量(φ)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 上 高台付瓶	器高 5.4 口径 14.6 底径 7.0	体部内側して立ち上がる、鋸い、削り持つ。高台付「ハ」の字状に開く。	外縁へラ削り。底部付高台付ナデ。	褐色 少量含む。	褐色	酸化	内外面焼成 墨古「院」 貯藏穴
2 土 頭 高台付瓶	器高 6.5 口径 15.8 底径 7.8	体部内側して立ち上がる。高台付「ハ」の字状に開く。	外縁へラ削り。底部付高台後ナデ。	砂粒・白 内面黒色処理。 少量含む。	褐色 内面黑色	酸化	床着
3 土 頭 高台付瓶	器高 5.6 口径 15.0 底径 6.8	体部内側して立ち上がる。高台付「ハ」の字状に開く。	外縁へラ削り。底部付高台後ナデ。	砂粒・白 内面黒色処理。 少量含む。	褐色	酸化	内面墨青焼成 「院」 野藏火
4 土 頭 高台付瓶	器高 (2.6) 底径 7.0	高台付「ハ」の字状に開く。	外縁底付高台後ナデ。 内面黒色処理。 少量含む。	砂粒・黑 内面黒色 少量含む。	褐色	酸化	覆土中
5 漆 惠 杯	器高 (1.5) 底径 5.6	体部外側する。	ロクロ成形。 底部回転糸切り後無調整	小石を少 量含む。 微細。	褐色	酸化	覆土中
6 銀 惠 杯	器高 (1.1) 底径 6.0	底部片。	レクロン成形。 底部回転糸切り後無調整	砂粒・白 内面黒色 少量含む。	褐色	還元	覆土中
7 銀 壺 高台付瓶	器高 (2.3) 底径 7.0	細片。	底部付高台後ナデ。	砂粒・白 内面黒色 少量含む。	灰色	還元	覆土中
8 銀 惠 杯	器高 (3.4) 口径 12.8	体部内側して立ち上がる。	ロクロ成形。	砂粒を少 量含む。 微細。	褐色	還元	内面墨青正位 「院」 覆土中
9 銀 惠 杯	器高 (2.8)	体部内側して立ち上がる。	ロクロ成形。	砂粒を少 量含む。 微細。	褐色	還元	外面部墨青 不明。 覆土中
10 土 頭 杯	器高 4.5 口径 12.2 底径 6.0	底部平底。やや厚手。 体部直線的に外傾する。	外縁底部指揮され、ナデ。 底部へラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白 内面黒色 少量含む。	褐色	酸化	内面墨青止位 「院」 沫者
11 土 頭 杯	器高 (3.8) 口径 12.6 底径 7.0	平底の底部。	底部内面ナデ。	砂粒・黑 内面黒色 少量含む。	にぶい褐色	酸化	内面底部墨青 不明。 覆土中
12 土 頭 杯	器高 (3.8) 口径 12.6 底径 7.0	底部平底。体部直線的に 外傾する。	外縁底部及び体部下端へ ラ削り。体部中央指揮さ れ。 内面ナデ。	砂粒を少 量含む。	褐色	酸化	床着
13 土 頭 杯	器高 4.0 口径 13.5 底径 6.0	やや不安定な平底。体部 直線的に外傾し、口唇部 直立ぎみになる。	外縁底部へラ削り。 体部指揮され、ナデ。 内面ナデ。	砂粒・白 内面黒色 少量含む。	茶褐色	酸化	周溝内
14 上 頭 杯	器高 4.0 口径 13.0 底径 6.5	底部平底。体部直線的に 外傾する。	外縁底部及び体部下端へ ラ削り。体部中央指揮さ れ。 内面ナデ。	砂粒・黑 内面黒色 少量含む。	茶褐色	酸化	カマド内
15 土 頭 杯	器高 3.6 口径 13.2 底径 6.4	底部平底。体部直線的に 外傾し、口唇部直立ぎみ になる。	外縁底部及び体部下端へ ラ削り。体部中央指揮さ れ。 内面ナデ。	砂粒・白 内面黒色 少量含む。	暗褐色	酸化	覆土中
16 土 頭 杯	器高 3.9 口径 12.5 底径 7.6	底部平底。体部直線的に 外傾する。	外縁底部指揮され、ナデ。 底部へラ削り。 内面ナデ。	砂粒・白 内面黒色 少量含む。	褐色	酸化	覆土中
17 灰 瓶 盖	器高 (4.0) 口径 14.8	口縁部片。体部内側して 立ち上がり、口唇部外傾 ぎみとなる。	ロクロ成形。	微密	灰白色	還元	覆土中
18 灰 瓶 蓋	器高 3.6 口径 16.4	口縁部片。体部内側して 立ち上がり、口唇部外傾 ぎみとなる。	ロクロ成形。	微密	灰白色	還元	覆土中
19 灰 瓶 蓋	-	口縁部片。	ロクロ成形。	微密	灰白色	還元	覆土中
20 土 頭 蓋	器高 (1.5) 口径 18.6	口縁部片。肉厚で口唇部 外傾する。	ロ縫部内外面丸にナデ。	砂粒・白 内面黒色 少量含む。	褐色	酸化	カマド内
21 土 頭 蓋	器高 5.2 口径 16.0	口縁部「ハ」の字状を早 くする。	外縁底部方向へラ削 り。 ロ縫部内外面ナデ。	砂粒を少 量含む。	褐色	酸化	覆土中
22 銀 惠 壺	器高 (5.9) 口径 19.6	外傾する口縁部片。先端 部段を有する。	ロクロ成形。	黒色感物 をやや多 く含む。	褐色	還元	覆土中
23 銀 惠 壺	器高 (9.0)	長縫部片。	ロクロ成形。	白色感物 を含む。	褐色	還元	覆土中
24 石 印	-	正面は一字「頭」彫型の印面に直成造字に切った楕円筒造による古封印。全体の形状は鈎形。印面の大きさは縦3.1cm・横3.2cm・高3.5cmで、当時の1寸に相当し、私印と考えられる。	-	褐色	灰白色	-	覆土中
25 石 印	-	印字は一字「頭」彫型の印面に直成造字に切った楕円筒造による古封印。全体の形状は鈎形。印面の大きさは縦3.1cm・横3.2cm・高3.5cmで、当時の1寸に相当し、私印と考えられる。	-	褐色	灰白色	-	床着



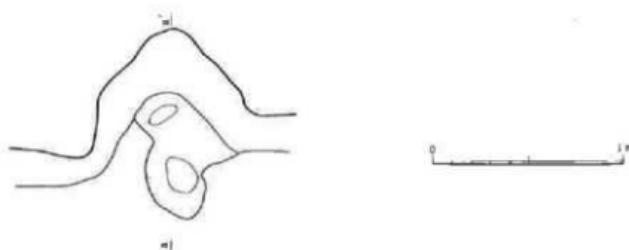
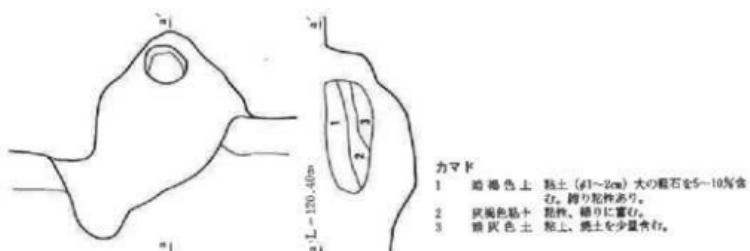
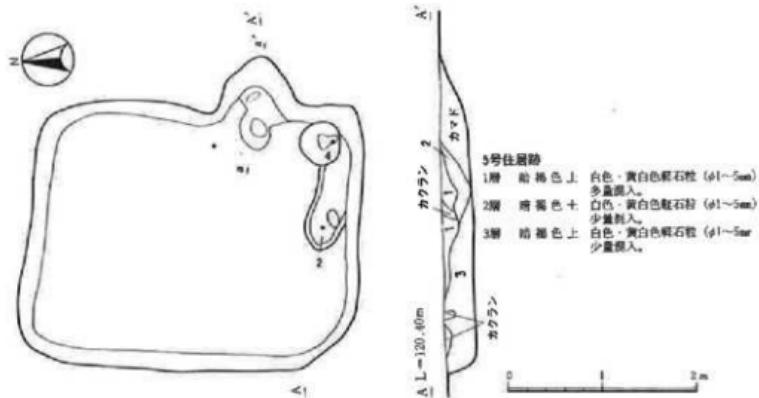
第12図 4号住居跡

表5 4号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(㌘)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 土師杯	器高 3.9 口径 12.4 底径 8.0	底部小不安定な平底。体部直筒的に外傾し、口縁部直下に棱を持つ。	外面底部へ7割り。 外面全体泥棒なナゲ。 内面ナゲ。	黒色粘土 茶褐色 少量化	茶褐色	酸化	覆土中
2 頸状杯	器高 3.8 底径 12.2 底径 5.8	底部平底。体部直筒的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整。	白色・黒色 灰褐色 色氣物を含む。	灰褐色	還元	未着
3 頸状杯	器高 3.8 口径 13.0 底径 6.1	底部上上げ底ぎみになる。 口径13.0 体部直筒的に外傾する。	ロクロ成形。外表面底部回転糸切り後無調整。	砂粒・白 色氣物を 少量化	灰褐色	還元	カマド内
4 頸状杯	器高 3.7 口径 13.6 底径 5.6	底部平底。体部直筒的に外傾する。	ロクロ成形。外面底部回転糸切り後無調整。	白色・赤 色氣物を 多く含む。	暗褐色	原元	未着
5 頸状杯	器高 4.1 口径 12.0 底径 5.0	底部平底。体部直筒的に外傾する。	ロクロ成形。外表面底部回転糸切り後無調整。	白色・赤 色氣物を 少量化	にぶい 白	原元	カマド内
6 土師杯		底部片。	内外面ナゲ。	砂粒を少 量含む。	褐色	酸化	底部内面黒靄 不明 覆土中
7 頸状壺	器高 (2.7) 口径 13.0	口縁部片。底部付近肉厚となり、高合付と思われる。	ロクロ成形。	白色粘土 を少量含む。	灰色	還元	カマド内
8 土師壺	器高 (23.5) 口径 19.4	「コ」の字状口縁。器内はやや厚い。	外面胴上半部横方向の下 半部巻き方向へ7割り。 内面ナゲ。	砂粒・白 色氣物を 少量化	暗褐色	酸化	カマド内
9 土師壺	器高 (6.0) 口径 18.0	「コ」の字状口縁。	外面胴上半部横方向への 7割り。 内面ナゲ。	白色粘土 を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
10 上部壺	器高 (8.0) 口径 18.0	「コ」の字状口縁。	外面胴上半部横方向への 7割り。 内面ナゲ。	白色・赤 色氣物を 少量化	褐色	酸化	覆土中



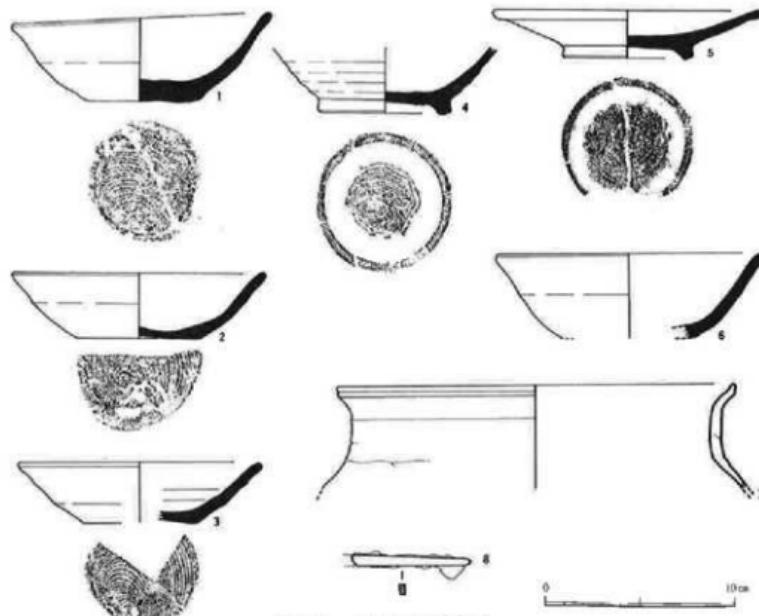
第13図 4号住居跡の遺物



第14図 5号住居跡とカマド

表6 5号住居跡出土遺物観察表

番	器種	法式(→)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	須 杯	器高 4.8 口径 13.5 底径 5.5	底面平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 外曲底部回転糸の切り後無調整。	砂粉・白色粘土物 沙粒。	灰色	還元	カマド内
2	須 杯	器高 3.5 口径 13.4 底径 6.4	底面平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 外曲底部回転糸切り後無調整。	砂粒・白色粘土物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
3	須 杯	器高 3.2 口径 12.8 底径 6.2	底面平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 外曲底部回転糸切り後無調整。	砂粒・白色粘土物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
4	須 高台付杯	器高 (3.5) 高台付 底径 7.0	高台頗く「」の字状に開く。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 外曲底部回転糸切り後平行高台。底縁部ナメ。	砂粒・白色粘土物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
5	須 高台付皿	器高 2.5 口径 14.2 底径 8.0	高台頗く「」の字状に開く。	ロクロ成形。 外曲底部付高台後企木に丁寧なナメ。	砂粒・白色粘土物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
6	須 杯	器高 (4.5) 口径 14.0	底部欠。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。	砂粒・白色粘土物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
7	土 器	器高 (6.5) 口径 21.0	「コ」の字状に縁。	外曲面部上端部横方向のヘア削り。	砂粒を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
8	鉄 製 刀	—	刃部欠損の刀子か。存長 6.3cm	—	—	—	—	カマド内



第15図 5号住居跡の遺物

6号住居跡 (第16・17図、図版6-3-18、表7)

本跡は調整区北側中央E-3グリッドで検出された。主軸方向はN-97°-Eである。規模は3×2.3mとやや小形で横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは50cmである。

ピットは3基検出されているが、いずれも不整形で浅い。

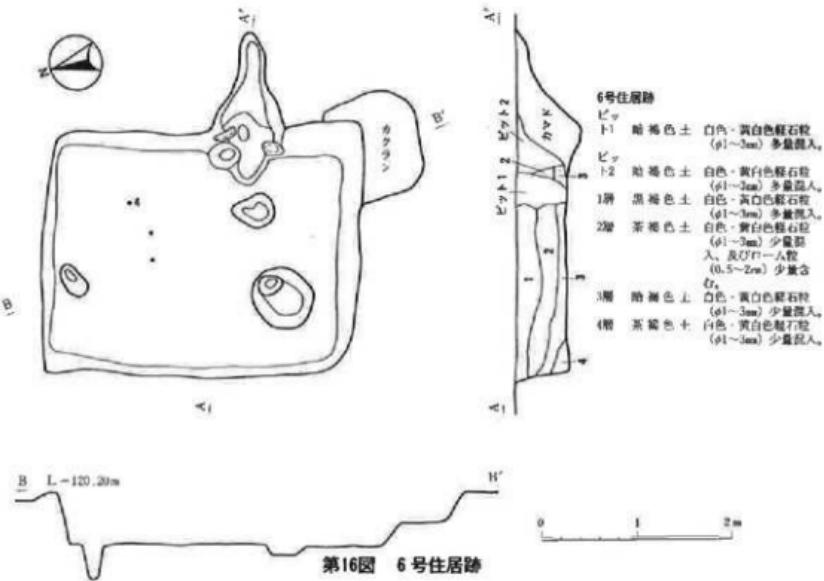
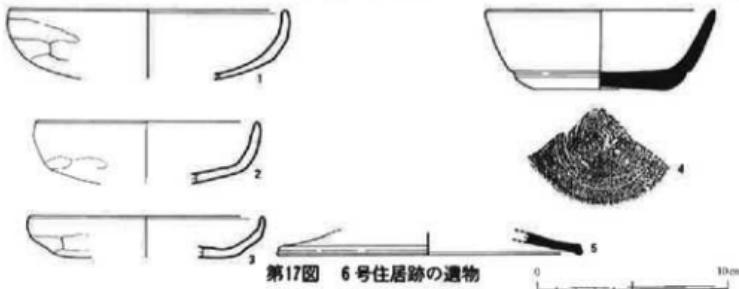


表7 6号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(φ)	器形の特徴	整成形の特徴	胎上	色調	焼成	備考
1 土 瓢	器高 (3.7) 口径14.6 底径 —	平底に近い直底。体部内 部真っ直ぐから立ち上がりし て唇部直立する。	外盤底部及び体部下端へ リ削り。 内面ナマ。	黒色 物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内
2 土 瓢	器高 (3.3) 口径11.8	平底に近い直底。体部内 部真っ直ぐに立ち上がり、口 唇部外傾ぎみとなる。	外盤底部及び体部下端へ リ削り。 内面ナマ。	白色・黒 色鉱物を 少量含む。	褐色	酸化	カマド内
3 土 瓢	器高 (2.2) 口径12.4	底部平底。体部内面真っ 直ぐに立ち上がり、口唇部直 立する。	外盤底部及び体部下端へ リ削り。 内面ナマ。	白色・黒 色鉱物を 少量含む。	褐色	酸化	覆土中
4 鉢 恵	器高 4.2 口径12.0 底径 7.0	平底。体部直線的に外底 近くに後を有する。	クロ成形。 外盤底部削 り。	白色・黒 色鉱物を やや多く 含む。	灰褐色	還元	床着
5 瓶 盔	器高 (1.2) 口径16.0	瓶片。口縁周辺屈曲する。	クロ成形。	緻密	灰色	還元	覆土中



カマド 東壁中央南寄りに位置する。壁外への掘り込みは110cmでながらかに立ち上がる。袖には石が利用されている。

遺物は土師器の杯がカマドから出土しているが、全体に出土量は少ない。

7号住居跡(第18・19回、図版7-1 18、表8)

本跡は調査区東側F-3・4グリッドで検出された。南側では道路のため未調査となった。北西側で8号住居跡を重複し、本跡が古い。主軸方向はN-93°-Eである。規模は東西方向は4.1mを計り、方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは50cmである。

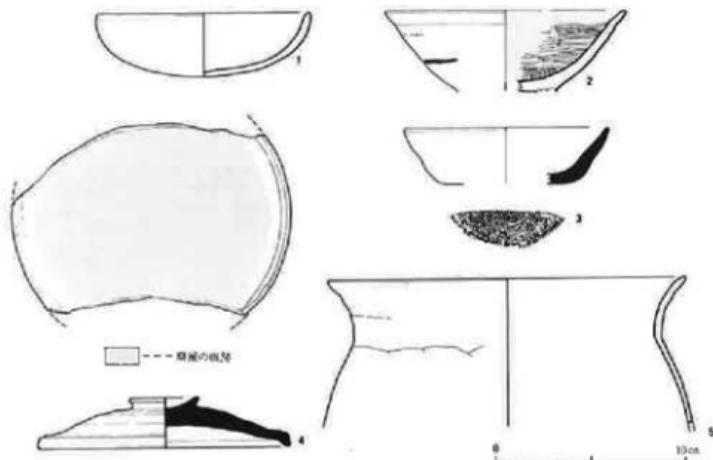
ピットは検出されず、周溝は調査区内では回る。

カマド 東壁中央に位置する。袖、支脚等は検出されなかった。壁外への掘り込みは90cmで急激に立ち上がる。

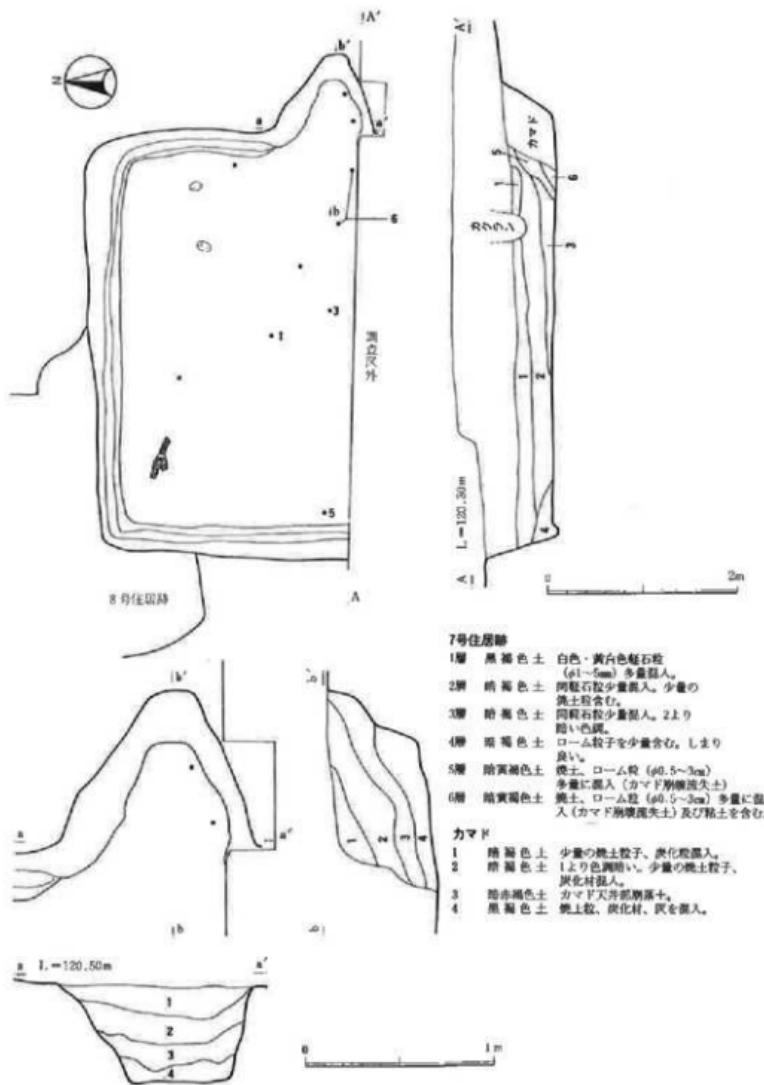
遺物はカマド付近から少量出土し、北西側から炭化材が出土している。

表8 7号住居跡出土遺物観察表

類	器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎上	色調	焼成	備考
1	土器 碗	器高 3.8 口径12.6 底径 -	丸底。体部内側して立ち上がり、口唇部直立する。	外面ヘラ削り。 内肉ナギ。	白色・黒色 色鉱物を 少量含む。	褐色	酸化	床着
2	土器 高台付杯	器高 4.8 口径14.2 底径 6.0	高台部剥落。体部直線的 に外傾し、口唇部低い後 を持って反する。	外面体部ヘラ削り。 内面内墨処理の後ミガ キ。	白色・黒 色鉱物を 少量含む。	褐色	酸化	外面墨書き不 確上中
3	須 杯	器高 3.3 口径12.0 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾 する。	ロクロ皮形。 外面底部回転ヘラ切り。	白色・黒 色鉱物を 少量含む。	灰色	還元	覆土中
4	須 唐 輪田 甕	器高 3.0 口径14.8	口唇端部弱く加曲する。 つまみ握平。	ロクロ皮形。 天井部回転ヘラ削り。 内面よく磨かれている。	白色・黒 色鉱物を やや多く 含む。	灰色	還元	裏底わざかに 残る。床着
5	土 甕	器高 (8.9) 口径21.2	口唇部「く」の字状に外 反する。	胎上半部横方向のヘラ削 り。	白色・黒 色鉱物を 少量含む。	赤褐色	酸化	床着



第18図 7号住居跡の遺物



第19図 7号住居跡とカマド

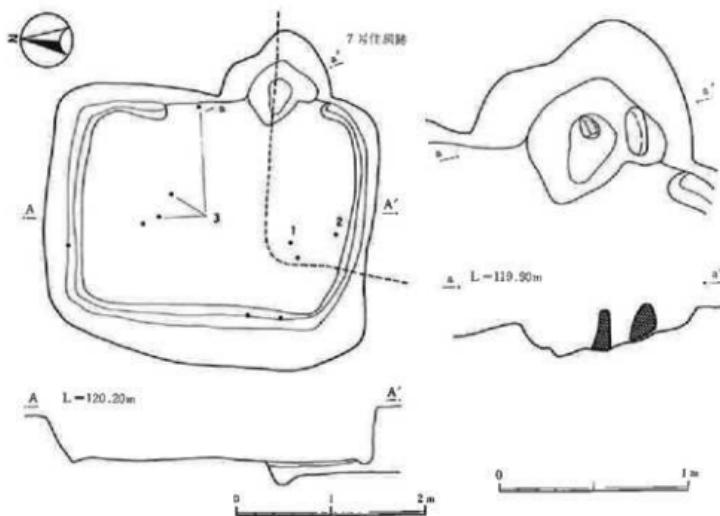
8号住居跡(第20・21図、図版7-1・18、表9)

本跡は調査区東側E-3・F-3グリッドで検出された。南東側で7号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。主軸方向はN-95°-Eである。規模は2.9×2.4mで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは50cmである。

ピットは検出されず、周溝はカマド付近を除いて回る。7号住居跡と重複する部分は貼り床となっている。

カマド 東壁やや南寄りに位置する。右袖の石と支脚の石が検出されている。壁外への掘り込みは70cmでなだらかに立ち上がる。

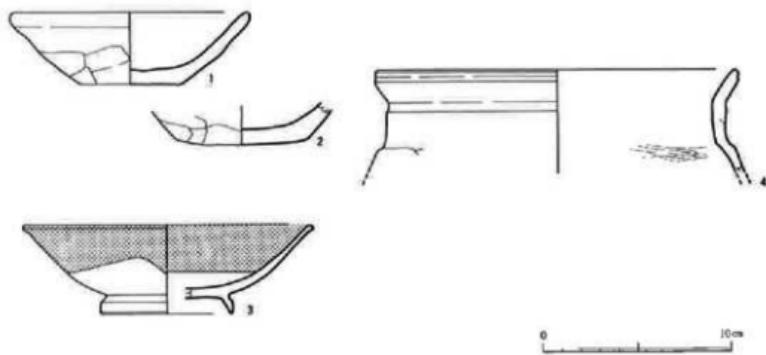
遺物は床着、覆土中共に少ない。



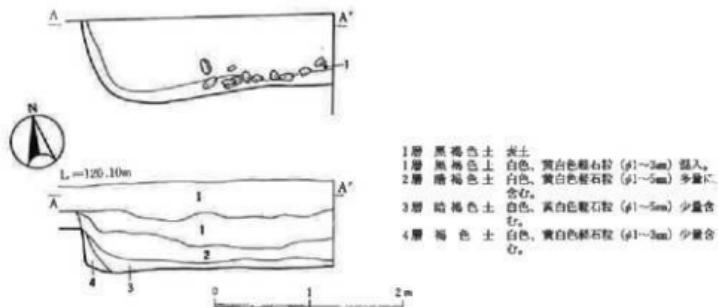
第20図 8号住居跡とカマド

表9 8号住居跡出土遺物観察表

明器種	法量(m)	器形の特徴	整成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 土器 环	器高 3.8 口径 12.6 底径 5.4	平底。底部直線的に外傾する。	前面底部無調整(砂芯状)。全体へク削り。内面ナデ。	白色胎土 を少量含む。	赤褐色	酸化	覆土中
2 土器 环	器高 2.1 口径 7.0 底径 7.0	平底。	前面底部、体幅下端へテラ削り。 内面ナデ。	白色・黑色胎土 を少量含む。	褐色	酸化	床着
3 土器 高台付桶	器高 4.7 口径 15.0 底径 7.0	高台部三円形。口縁部 内側へ立ち上がり、口 輪部外傾する。	ロクロ皮膜。 胎土は刷毛墨り。	緻密	灰白色	還元	床着
4 土器 壺	器高 (5.4) 口径 19.0	やや厚手の「コ」の字状 紋。	外面側残存部横方向への 剥離。	砂粒を含む	褐色	酸化	覆土中



第21図 8号住居跡の遺物



第22図 9号住居跡

表10 9号住居跡出土遺物観察表

器種	法基(φ)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 + 鈕 环	器高 (2.9) 口径 12.6 底径 -	底面平武ぎみの丸底。 体袋内側に立ち上がり 口部直立する。	外面底面へラ切り。 内面ナメ。	緻密	褐色	焼化	床着
2 頸 环	器高 (0.8) 口径 - 底径 7.0	平底の底部片。	ロクロ成形。 外面底面回転へラ切り。	白色胎土 を少量含 む。	灰褐色	還元	床着
3 頸 蓋	器高 (1.3) 口径 16.0	蓋片。	ロクロ成形。	緻密	灰色	還元	床着



第23図 9号住居跡の遺物

9号住居跡（第22・23図、図版7-2、表10）

本跡は調査区東側G-3・4グリッドで検出された。北側は道路のため調査できず、東側は調査区外となっている。南西側一部のみの検出であるが、方形を呈するものと思われる。掘り込みは65cmと深い。

ピット、周溝は検出されなかった。

カマド 調査区内では検出されなかった。

遺物は少量出土している。

10号住居跡（第24・25図、図版7-3・18、表11）

本跡は調査区東側G-3グリッドで検出された。主軸方向はN-89°Eである。規模は4.2×3.5mでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは45cmである。

ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。周溝は全周する。

カマド 東壁中央やや南寄りで検出された。壁外への掘り込みは70cmでなだらかに立ち上がる。袖は粘土上と石で構築されている。支脚は検出されなかった。

遺物の出土量は少ない。

11号住居跡（第26・27図、図版8-1、表12）

本跡は調査区東側H-3グリッドで検出された。主軸方向はN-101°Eである。規模は2.7×2.2mで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは15cmと浅い。

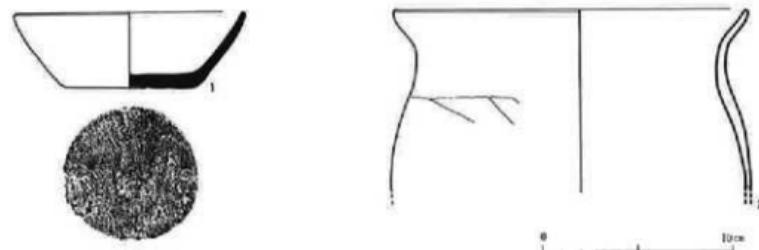
ピット、周溝は検出されなかった。南東側コーナーには貯蔵穴がある。

カマド 東壁中央南寄りで検出された。壁外への掘り込みは40cmでなだらかに立ち上がる。袖、支脚等は検出されなかった。

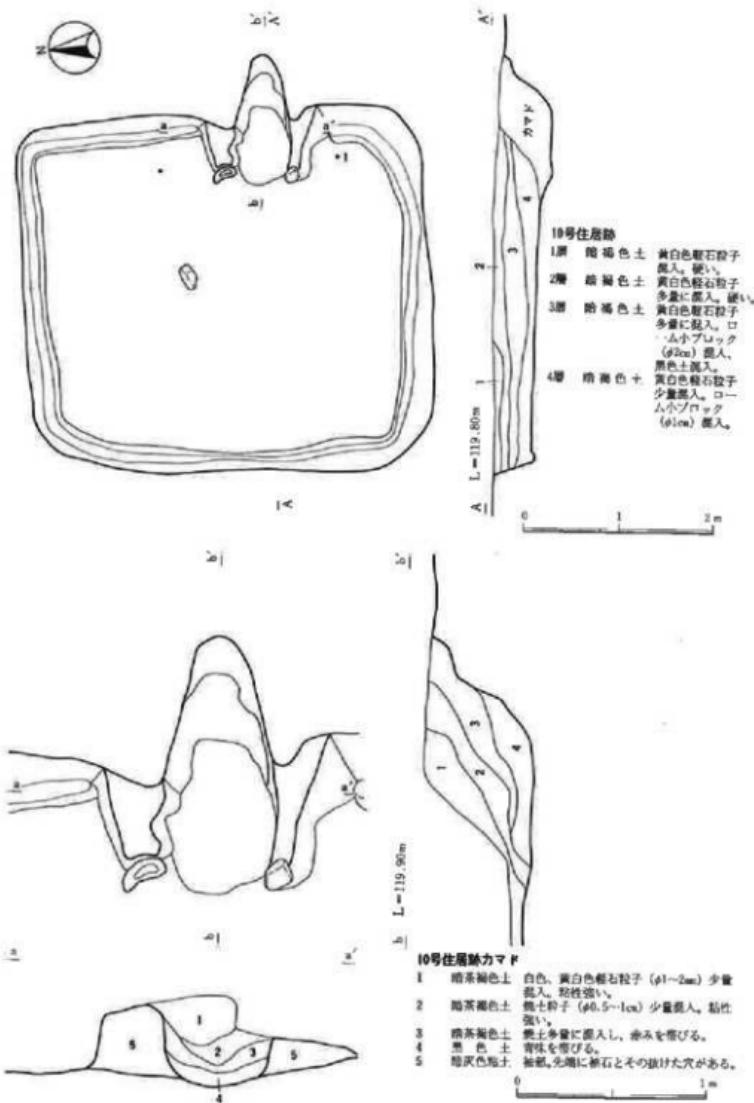
遺物はカマドから少量出土している。

表11 10号住居跡出土遺物観察表

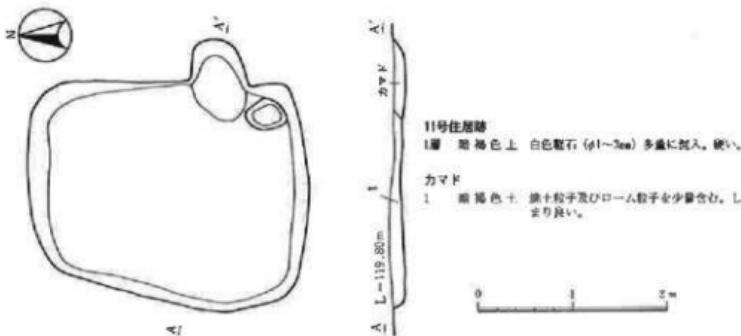
器種	法量(㌘)	器形の特徴	整成形の特徴	胎上	色調	焼成	備考
1 須 杯	底高4.0 口径12.2 底径7.0	器高4.0 平底。体部直線的に立ち上がり外傾する。	クロ成形 外面底部凹部糸切り後周縁部手持ちへき前振り。	黒色鉢物 を少量含む。	灰色	還元	床着
2 土 器	器高 (9.6) 口径19.6	底部「く」の字状に外反する。	外曲柄と半部横方向への割り。 内面ナデ。	砂粒・白色氣物を 少量含む。	褐色	酸化	カマド内



第24図 10号住居跡の遺物



第25図 10号住居跡とカマド



第26図 11号住居跡

表12 11号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(㎤)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 + 鏡 壺 甌	高 (7.0) 口径21.0 底径 -	口縁部短かく「く」の字 状に外反する。	外面胴上半部横方向への テ条り。 内面ナゲ。	白色氣物 を含む。	褐色	酸化	カマド内



第27図 11号住居跡の遺物

12号住居跡（第28・29図、図版8-2、表13）

本跡は調査区東側H-3・4グリッドで検出された。東側は調査区外となっており、北側も未調査である。検出部分の壁高は45cm。

ピット、周溝、カマド等は検出されなかった。

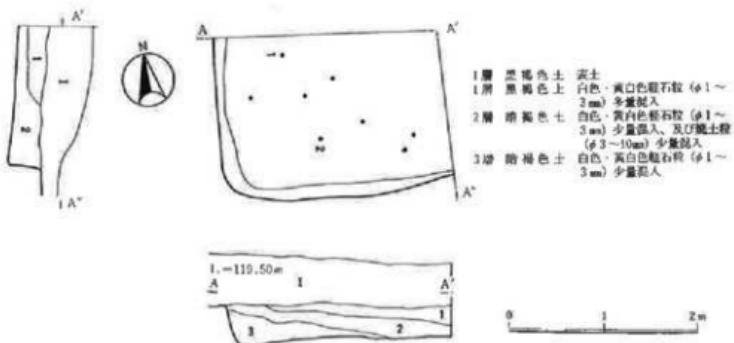
遺物は少量出土しており、墨書き器も検出されている。

13号住居跡（第30・31図、図版8-3・19、表14）

本跡は調査区北西側E-1グリッドで検出された。北東側が道路のために未調査となっている。規模は3.6×2.8mで長方形を呈する。

ピットは南東側コーナーに1基検出され、周溝は検出部分では南側の一部を除いて回る。カマドは不明である。床面の中央は良く踏み固められている。

遺物は中央部付近を中心に出土している。



第28 12号住居跡

表13 12号住居跡出土遺物観察表

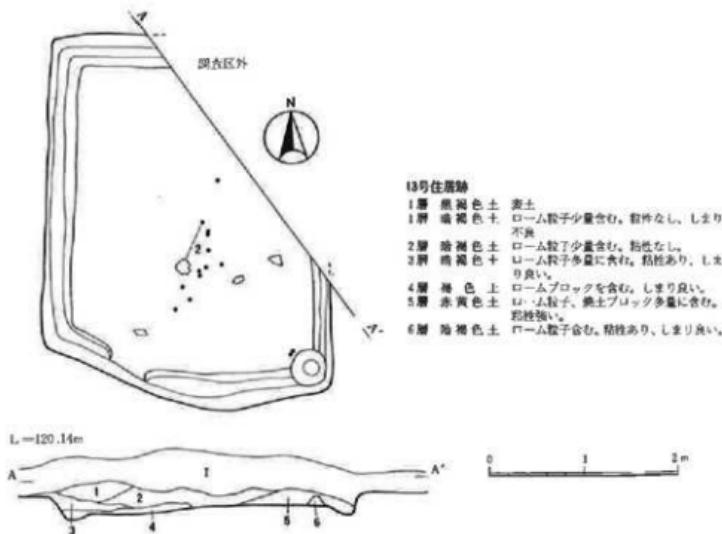
器種	法量(㌘)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 土器 杯	器高 (2.8) 口径12.8 底径—	底部平底ぎみ。全体内面して立ち上がり口唇部外側に付する。	外底部及び全体下端へク病り。内面ナデ。	陶器遺物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
2 土器 杯	器高 (1.3)	平底ぎみの底部片。	外底部へク病り。内面ナデ。	白色・黑色混物を少量含む。	褐色	酸化	底部墨書き子「」覆土中
3 土器 甕	器高 (7.0) 口径20.0 —	口唇部「く」の字状に外反する。	外底部上半部横方向へのク病り。内面ヘラ調整。ナデ。	白色混物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中



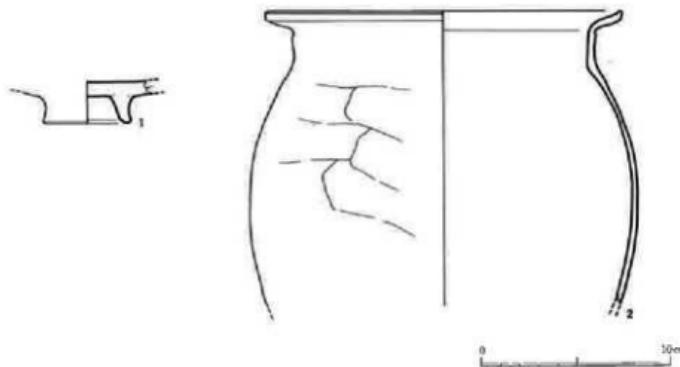
第29図 12号住居跡の遺物

表14 13号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(㌘)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 土器 高台付碗	器高 2.3 口径 — 底径 4.5	高台部「へ」の字状に開口	高台取り付け後、ナデ。	砂質・白色混物をやや多く含む。	黒褐色	酸化	床着
2 土器 甕	器高 (15.7) 口径18.8	「コ」の字状口縁。口唇部外反する。	外底部上半部横方向へのク病り。内面ナデ。	白色・黑色混物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中



第30図 13号住居跡

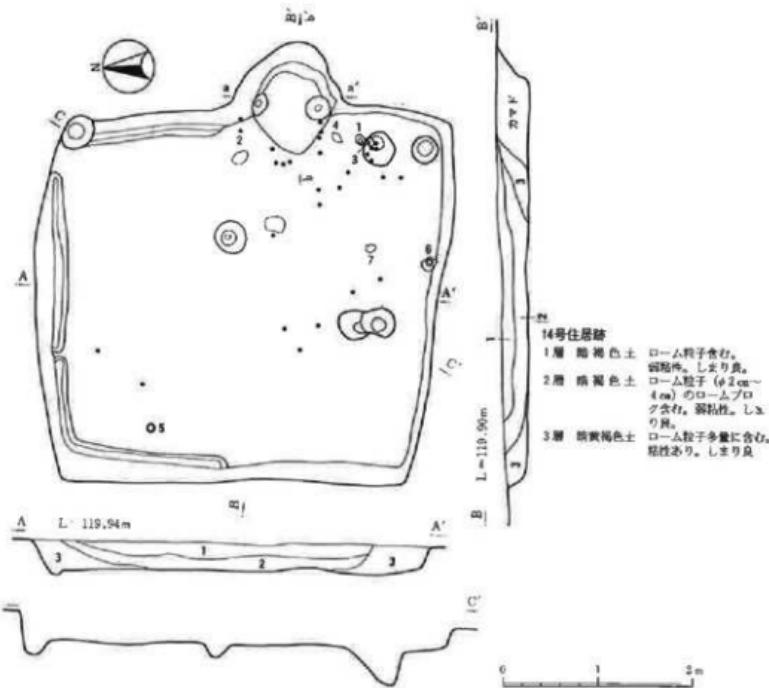


第31図 13号住居跡の遺物

14号住居跡(第32・33・34図、図版9-1・19・21、表15)

本跡は調査区西側F-0・1グリッドで検出された。主軸方向はN-90°-Eである。規模は3.7×4mでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは30cm。

ピットは5基検出されているが、バラツキがあり、主柱穴とは考えられない。カマドの右側には貯蔵穴がある。周溝は北側半分のみ回る。



第32図 14号住跡

表15 14号住跡出土遺物観察表

器種	法量(㎤)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 頸部 杯	器高 4.2 口径 13.8 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。底面回転糸切り無調整。	砂粒・白色粘物を含む。	灰色	還元	沫者
2 頸部 高台付壺	器高 5.1 口径 14.2 底径 7.2	高台は頂く台形で「ハ」の字状。体部は内湾して立ち上がり、口唇部外反する。	ロクロ成形。外面底面回転糸切り後高台、圓錐部ナデ。内外面整擦。	砂粒を少量含む。	灰色	還元	内部のみこみ部は、墨痕が円形に残る。沫者
3 頸部 杯	器高 3.9 口径 13.2 底径 6.1	底盤は平底。体部は直線的に外傾する。	ロクロ成形。底面回転糸切り無調整。	砂粒・白色粘物を含む。	灰色	還元	底部のみこみ部は、墨痕・半沫者
4 頸部 杯	器高 3.5 口径 13.4 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。底面回転糸切り無調整。	砂粒を少量含む。	灰褐色	還元	底部に墨痕沫者
5 頸部 高台付壺	器高 (2.0) 口径 一 底径 6.8	高台は「ハ」の字状に開く。	ロクロ成形。底面回転糸切り後付高台、ナデ。内面は平滑。	白色粘物を少量含む。	灰色	還元	墨転用か 覆土中
6 頸部 高台付壺	器高 2.7 口径 13.6 底径 7.0	高台は「ハ」の字状に大きく開く。体部は直線的で外傾する。	ロクロ成形。底面回転糸切り後付高台、ナデ。	砂粒・白色粘物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
7 土面 高台付壺	器高 5.7 口径 10.6 底径 6.0	高台の開きは小さく直線的に盛上る。体部は内湾して立ち上がる。	高台部及び外側はていねいなナフ。内面は墨痕か白色無理される。	墨痕	内黒色 外褐色	酸化	底部及び外側 体部は墨痕 下、覆土中
8 上面 甕	器高 (12.5) 口径 20.4	口部頗るかく「く」の字状に外反する。器内咲い。	外面部上半部直角方向のへり附り。内面へり調整、ナデ。	白色粘物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内

カマド 東壁中央に位置する。煙道の壁外への掘り込みは55cmで急激に立ち上がる。袖は石で構築され、煙道付近に甕がおかされている。

遺物はカマド、貯蔵穴付近を中心にまとめて出土している。



第33図 14号住居跡のカマド

15号住居跡(第35・36図、図版9-2・9-3・19、表16)

本跡は調査区中央F-1グリッドで検出された。主軸方向はN-90°-Eである。規模は2.1×2.6mと小形で横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは40cmである。

ピットは壁際に浅いものが検出され、中央に皿状のものが検出されている。周溝は南側と東側の一部を除いて回る。

カマド 東側中央に位置する。煙道の壁外への掘り込みは75cmでなだらかに立ち上がる。袖は前面に張、後に石がおかれている。支脚は検出されていない。

遺物はカマド付近を中心によく出土している。

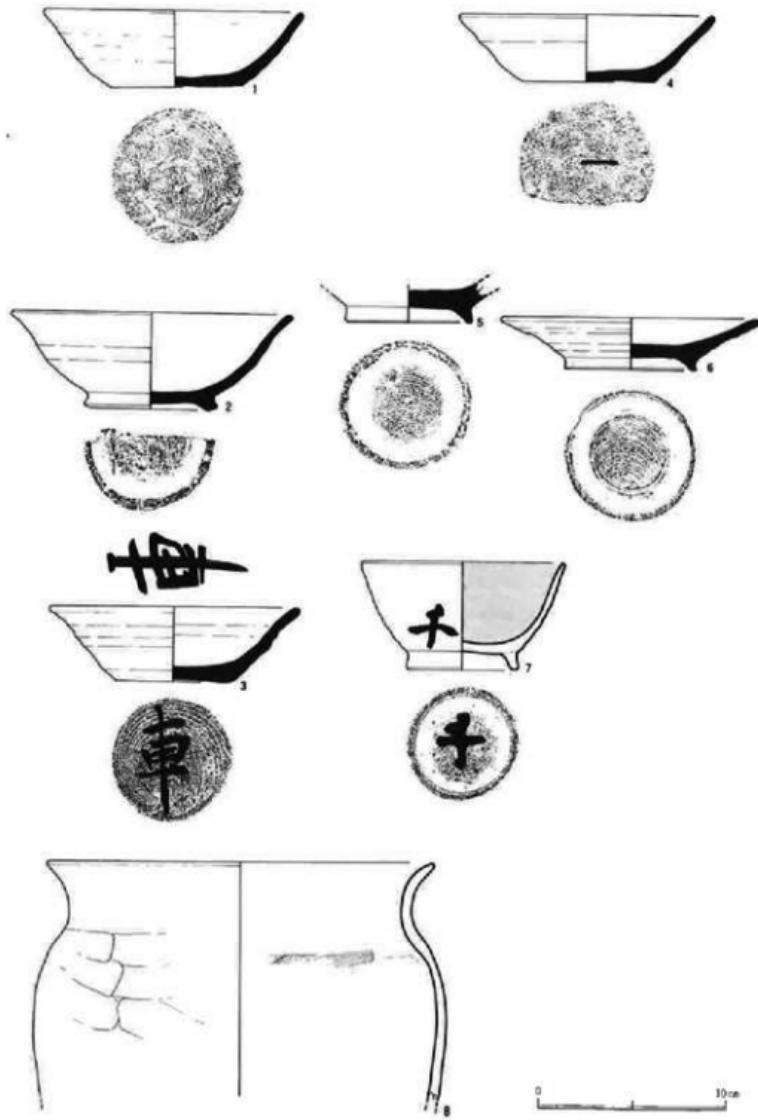
16号住居跡(第37図、図版10-1)

本跡は調査区中央F-2、F-3、G-2、G-3グリッドで検出された。主軸方向はN-98°-Eである。北側は道路のため未調査である。規模は東西方向で3.4mを計る。壁高は20cmである。

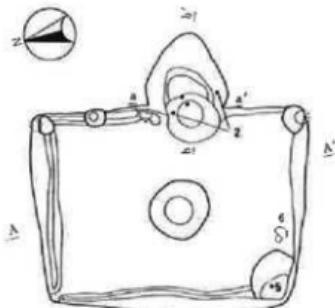
南東側コーナーには貯蔵穴があり、周溝は調査部分では回る。

カマド 東壁に位置する。煙道の壁外への掘り込みは70cmでゆるやかに立ち上がる。袖、支脚等は検出されなかった。

遺物は調査部分からは出土していない。



第34図 14号住居跡の遺物



15号住居地

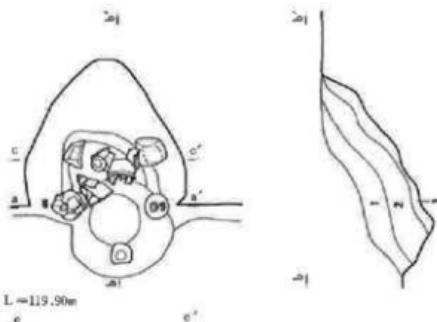
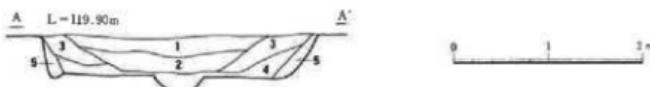
- 1層 黒褐色土 植ぬ。ル-ム粒子少量含む。粘性なし。
少し硬く重い。

2層 黒 色 土 離石。ロームブロック含む。弱粘性、
しりり良。

3層 灰褐色 土 ローム粒子含む。粘性あり。しりり良。

4層 灰褐色土 ローム粒子含む。粘性あり、しりりや
やある。

5層 灰褐色土 ル-ム粒子多量に含む。弱粘性、しりり
ややある。

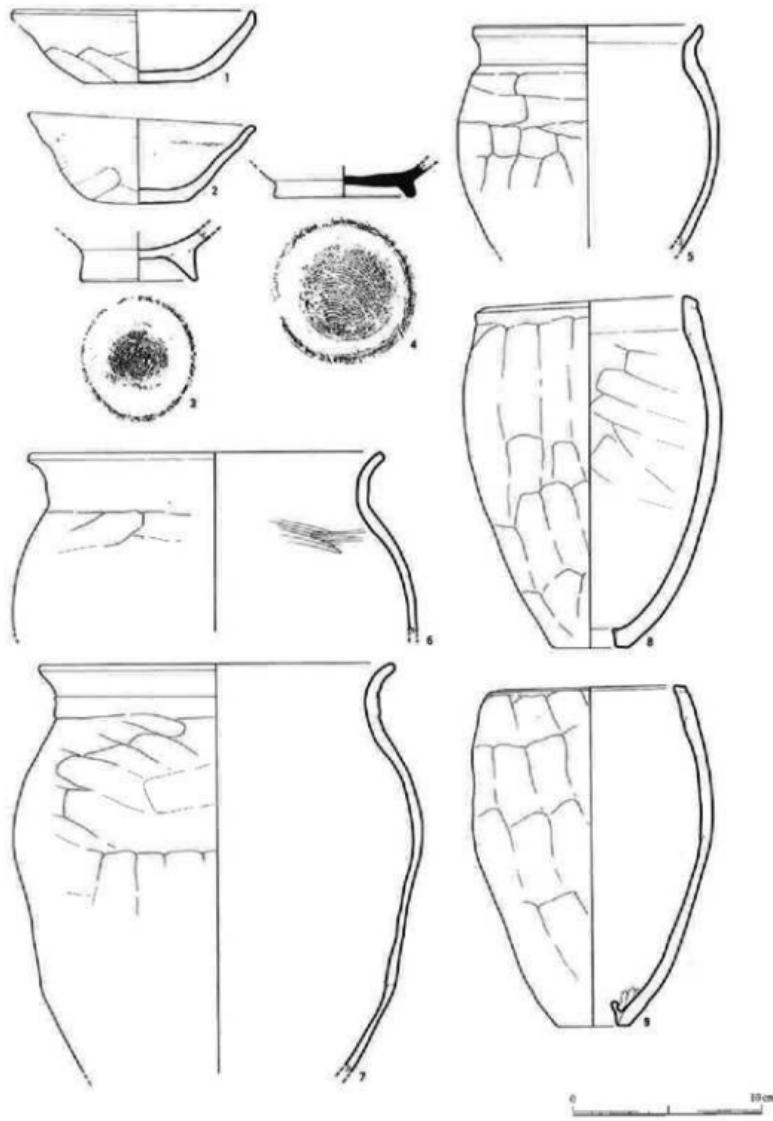


15号住居跡、カマド

1. 黄褐色土 烧土混入。
 2. 暗褐色土 口一ム粒子、燒土粒子混入。
 3. 鳞片状黑色土 烧土多量混入。



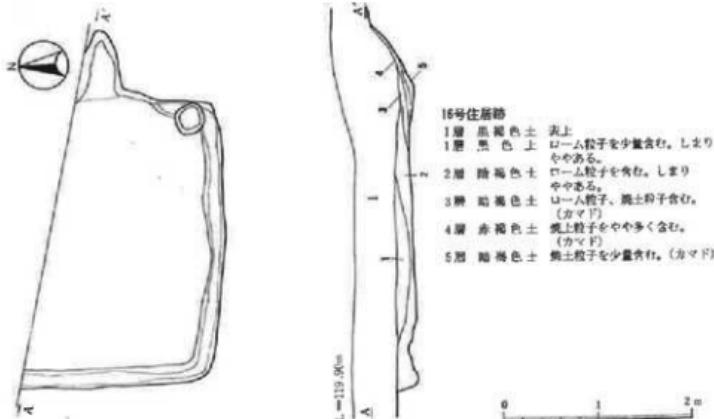
第35図 15号住居跡とカマド



第36図 15号住居跡の遺物

表16 15号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1. 土 壺	器高 4.0 口径 12.8 底径 6.0	平底。体部は直線的に外輪に傾し、口唇部成立ぎみにならず。厚手。	外面部及び体部下端へテラコリ。内面ナゲ。	白色、黑色鉄物を含む。	褐色	酸化	床着
2. 土 壺	器高 4.9 口径 11.9 底径 6.0	不安定な平底。体部直線的に外輪に傾する。	外面部及び体部下端へテラコリ。内面ナゲ。	白色、黑色鉄物を少量含む。	褐色	酸化	床着
3. 土 壺 高台付壺	器高 2.7 口径 6.0	高台は長く「ハ」の字状に開く。	外面部付高台後工事なナゲ。	砂粒、白色鉄物をやや多く含む。	褐色	酸化	覆土中
4. 瓢 高台付壺	器高 (1.7) 口径 7.5 底径 7.5	高台は短く「ハ」の字状に開く。	ロクロ成形。底部回転式切削付高台、ナゲ。	白色鉄物を含む。	灰色	還元	覆土中
5. 小 形 壺	器高 (11.8) 口径 12.0 底径 6.0	口縁部細かく開き、口唇部直立ぎみになる。	外面部下部横方向の中央凹部方向へのフリ。内面ナゲ。	砂粒、白色鉄物を多量含む。	暗褐色	酸化	床着
6. 土 壺	器高 9.5 (17.8)	ロジ底、「ト」の字状を呈する。窓内厚く、口唇部は薄い。	外面部上半部横方向へのフリ。内面ナゲ。	砂粒、白色鉄物を含む。	褐色	酸化	床着
7. 土 壺	器高 (21.8) 口径 18.8 底径 8.0	ロジ底細かく「ト」の字状を呈する。窓内厚く、底下部は削り平手形。	外面部上半部横方向の中央凹部方向へのフリ。内面ナゲ。	砂粒、赤色鉄物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
8. 土 壺	器高 18.5 口径 18.5 底径 4.0	半孔。口縁部細かく直立する。	外面部前縫方向へのフリ。内面ナゲ。	白色、赤色鉄物を含む。	褐色	酸化	カマド内
9. 土 壺	器高 20.0 口径 9.3 底径 3.8	半孔。ロジ底細かく直立する。	外面部前縫方向へのフリ。内面ナゲ。	白色、赤色鉄物を少量含む。	褐色	酸化	カマド内



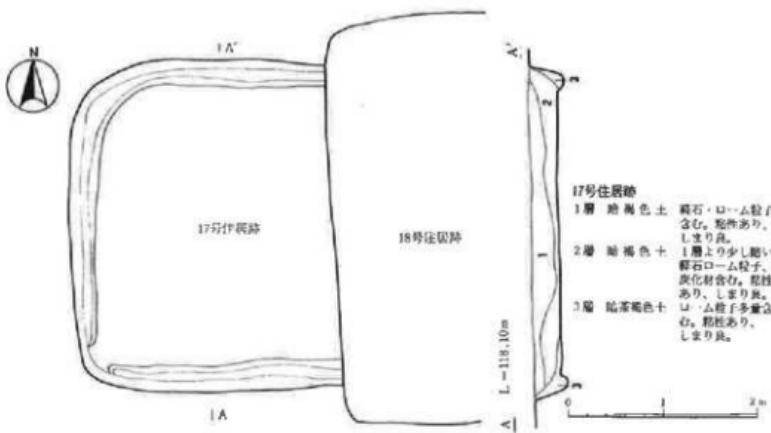
第37図 16号住居跡

17号住居跡 (第38・39図、図版10-2、表17)

本跡は調査区南西側J-0、K-0グリッドで検出された。東側で18号住居跡と重複し、本跡の方が古い。主軸方向はほぼ東に向くと思われる。規模は南北方向で3.3mを計る。確認面からの掘り込みは30cmである。

周溝は南西側のコーナー付近を除き、回る。ピット等は検出されていない。カマドは東壁にあったものと思われるが、18号住居跡に埋されている。

遺物は少量出土している。



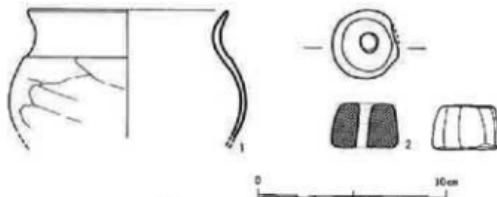
第38図 17号住居跡

表17 17号住居跡出土遺物観察表

器種	汎量(㌘)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 頸環	25高 3.9 口径11.4 底径 8.0	平底。底部直線的に外傾する。	レクル成形。 底部は軽く切り無調整。	白色胚物 少量含む。	灰色	還元	覆土中
2 漆瓶	器高 3.0 口径 (14.8) 底径 (14.4)	円筒形の漆片か。	レクル成形。	黒色胚物 を少量含む。	灰色	還元	覆土中



第39図 17号住居跡の遺物



第40図 18号住居跡の遺物

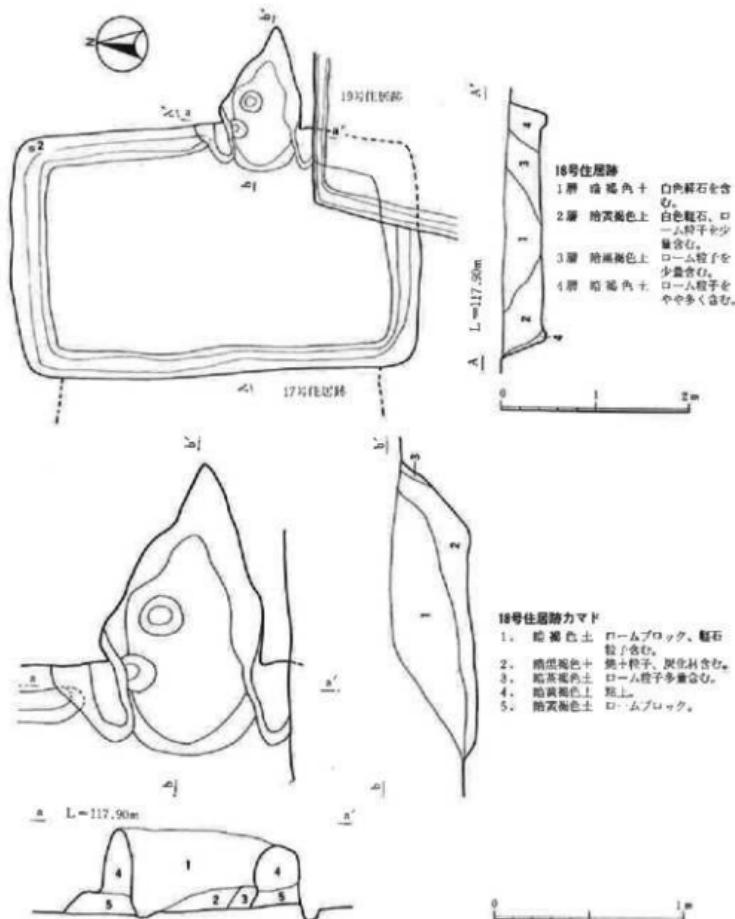
18号住居跡(第40・41図、図版10-2・19-22、表18)

本跡は調査区南西側J-0、K-0クリッドで検出された。西側で17号住居跡を切り、南東側で19号住居跡に切られている。主軸方向はN-93°-Eである。規模は4.1×2.3mで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは40cmである。

ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。周溝は全周するものと思われる。

カマド 東壁や南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは105cmで急激に立ち上がる。袖は白色粘土で構築されている。支脚は検出されていない。

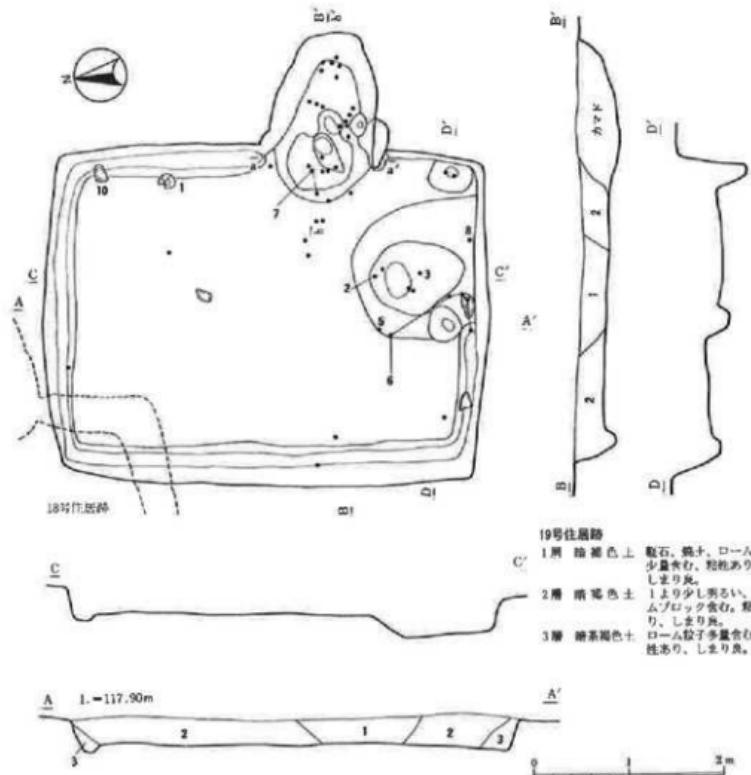
遺物は少量の出土であるが、北側周溝より筋鉄車が出土している。



第41図 18号住居跡とカマド

表18 18号住居跡出土遺物観察表

器 器	名	法 量(㎝)	器 形 の 特 徴	整・成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	備 考
1 小 形 鉢	高さ (6.8) 口径10.6 真径 -	口縁部「く」の字状に外 反する。器肉薄い。	外面削上半部横方向への ラブリ。	緻密	褐色	酸化		覆土中
2 石 製 防 助	品 中 高さ 2.3 口径 3.5	内厚。	穿孔は向方向から行われ ている。	板灰岩				覆土中



第42図 19号住居跡

19号住居跡(第42・43・44図、図版10-3・19・22、表19)

本跡は調査区南西側K-0グリッドで検出された。北西側で18号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。主軸方向はN-98°-Eである。規模は3.3×4.5mでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは35cmである。

南東側コーナーには貯蔵穴があり、南側には皿状の落ち込みがある。

カマド 東壁やや南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは120cmで緩やかに立ち上がる。袖は右側のみの検出で、粘土が使用されている。

遺物は、カマド及びその付近からまとめて出土している。

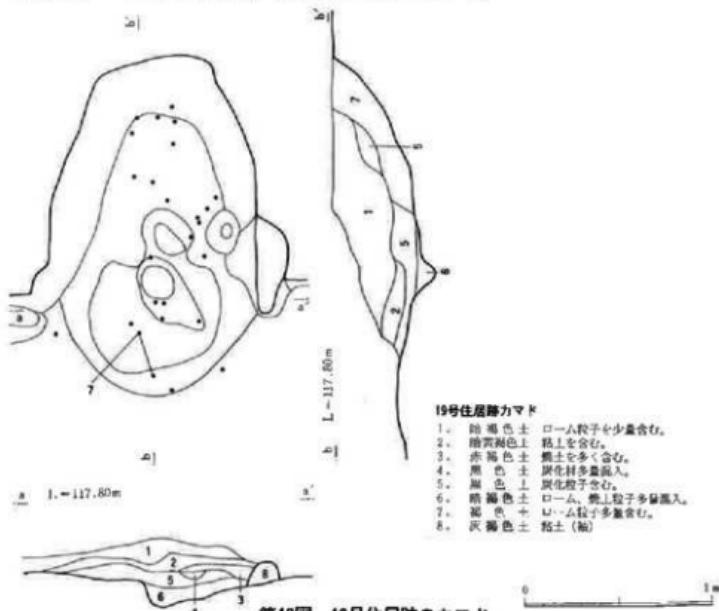
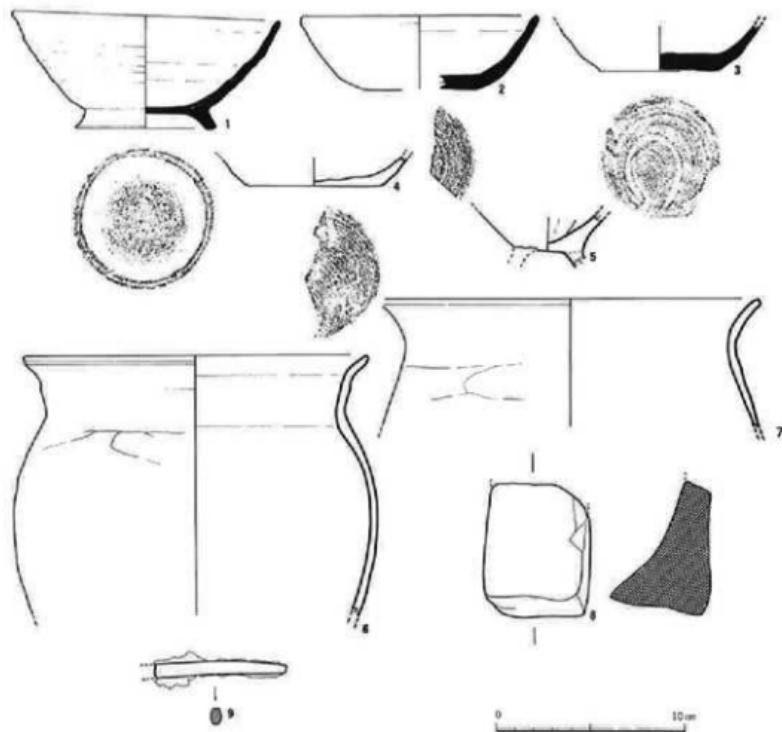
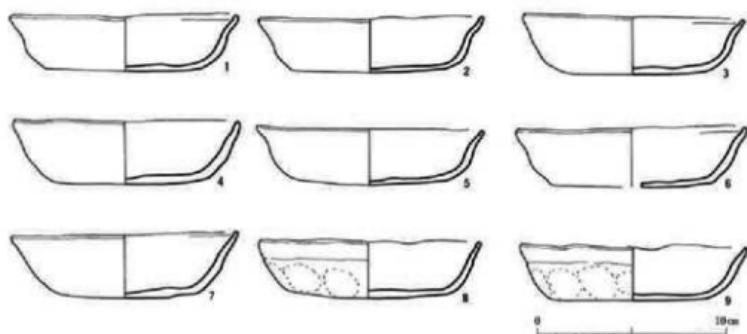


表19 19号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎上	色調	焼成	備考
1. 瓢 底	器高 6.2 口径 14.3 底径 7.3	高台は「…」の字状に開く。体部は内向し、口縁では直線的となる。	ハラマ皮型。底面切削無し。切り抜竹高台、丁寧なナフ。	白色粘土を少量含む。	暗灰色	墨元	陶面とガスが抜けた孔が見られる。底石
2. 瓢 底	器高 3.9 口径 12.2 底径 6.0	底面は丸みを帯びた平底で体部は内向気味に立つ。	ハラマ皮型。底面切削無し。底面切削無し。	白色粘土を少量含む。	灰色	墨元	ピット内
3. 瓢 底	器高 (2.4) 口径 6.0 底径 6.4	底面は平底。体部は内向型。	ハラマ皮型。底面切削無し。	白色粘土を少量含む。	灰色	墨元	ピット内
4. 瓢 底	器高 (1.6) 口径 7.4	底面は平底。体部は内向型。	ハラマ皮型。底面切削無し。	白色粘土を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
5. 十字付甌	器高 (2.8)	裏底面と脚の接合部分の破片。脚部「へ」の字状に開く。	平底の底面を整削した後に脚部を付す。外周ヘラ削り。内面ヘラナフ。	白色粘土を少量含む。	褐色	酸化	灰着
6. 土 瓢	器高 (13.8) 口径 18.2 底径 一	レノ底部「コ」の字状に開く。	外面部上半部模様方向への削り。内面ナフ。	磁密	褐色	酸化	測溝内
7. 土 瓢	器高 (6.8) 口径 19.8 底径 一	口縁部「く」の字状に開く。	外面部上半部模様方向への削り。内面ナフ。	白色粘土を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
8. 台 瓶	器高 7.1 口径 5.8 底径 5.2	横面形はほぼ長方形を結ぶもので上下両面は斜く削りられる。断面形は2分割形状を呈する。側面に細かな条線が見られるものの使用は少ない。	腹密岩	灰白色		ピット内	
9. 鋸 刀	成長長 9.9	刃先剥落。					覆土中



第44図 19号住居跡の遺物



第45図 20号住居跡の遺物 (I)

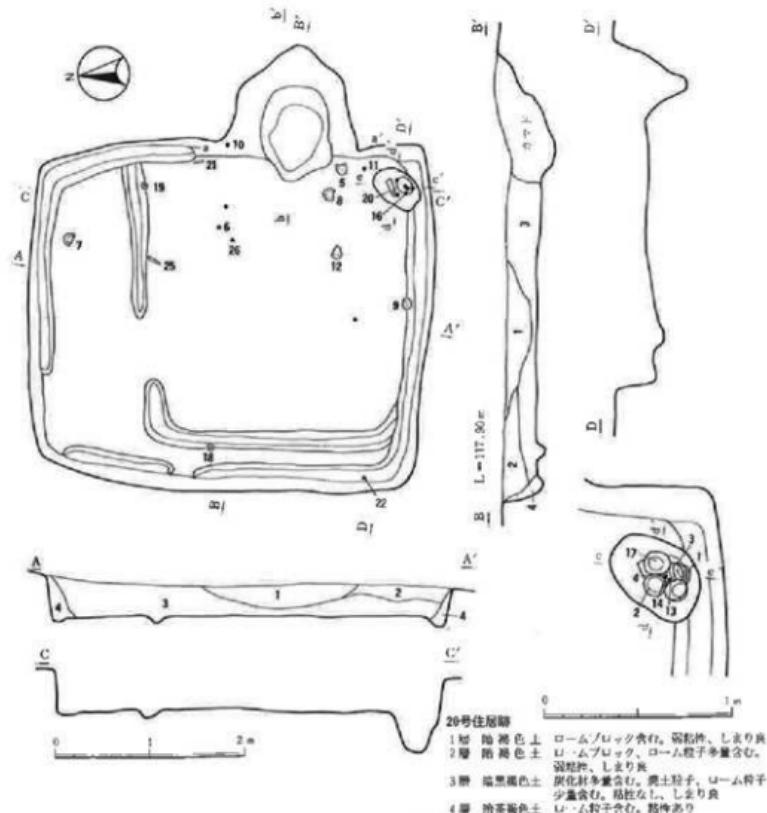
20号住居跡(第45・46・47・48・49図、図版11-1・20・21・22、表20・21・22)

本跡は調査区南側K-1グリッドで検出された。主軸方向はN-100°-Eである。拡張住居跡と思われ、拡張前は3.1×3.1mではば正方形を呈し、拡張後は3.5×4mでやや横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは35cmである。

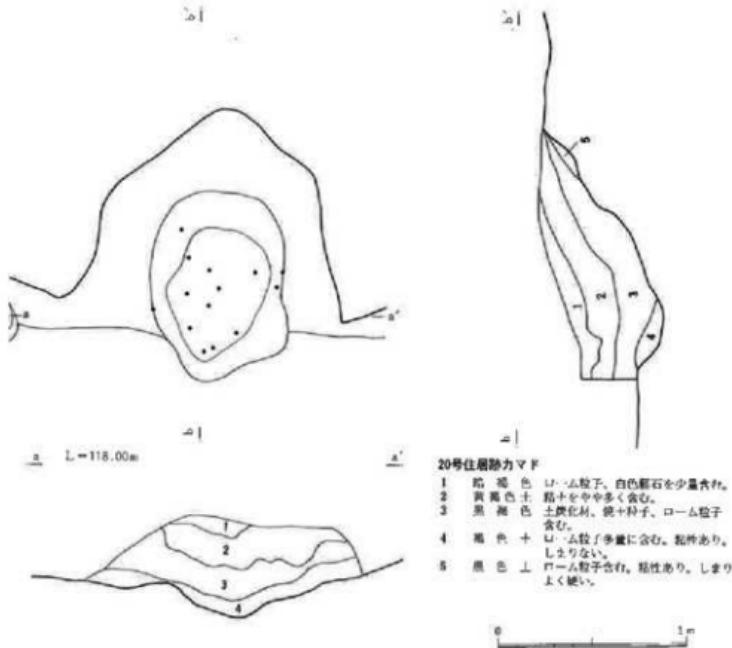
ピットは検出されず、南東側コーナーには貯蔵穴がある。周溝は建て替え前、後共にあり、カマド付近と北側の一部を除いて回る。

カマド 東壁中央南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは1mでなだらかに立ち上がる。袖等は検出されなかった。

遺物は坏類を中心にやや多く出土し、貯蔵穴からはまとまって出土している。又紡錘車が2個検出され、線刻がなされている。



第46図 20号住居跡



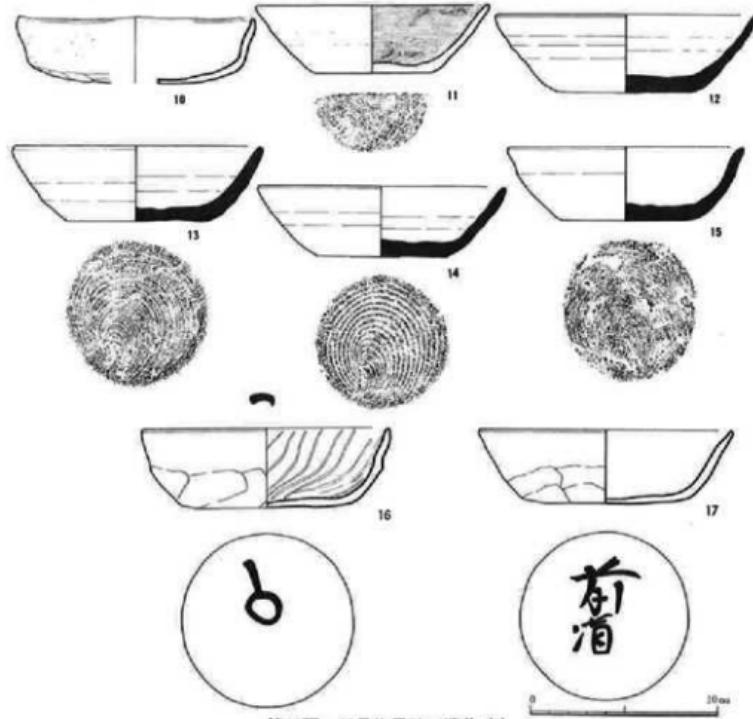
第47図 20号住居跡のカマド

表20 20号住居跡出土遺物観察表 (1)

器種	法量(cm)	器形の特徴	整成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 上 鍋	器高 2.9 口径12.0 底径 8.4	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	緻密	黒褐色	酸化	貯藏穴
2 上 鍋	器高 2.9 口径11.8 底径 8.6	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	緻密	黒褐色	酸化	貯藏穴
3 上 鍋	器高 3.2 口径11.7 底径 8.0	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	白色灰物 を少量含む。	暗褐色	酸化	貯藏穴
4 上 鍋	器高 3.5 口径11.9 底径 8.5	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	白色灰物 を少量含む。	暗褐色	酸化	貯藏穴
5 上 鍋	器高 3.1 口径12.0 底径 8.1	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	白色灰物 を少量含む。	褐色	酸化	床着
6 上 鍋	器高 3.1 口径12.0 底径 8.6	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	緻密	暗褐色	酸化	覆土中
7 土 瓢	器高 3.6 口径7.3	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	白色灰物 を少量含む。	暗褐色	酸化	床着
8 上 鍋	器高 3.0 口径11.6 底径 8.4	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	白色灰物 を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
9 上 瓢	器高 3.1 口径12.0 底径 8.5	底部平底。体部内面ぎみに立ち上がり、口縁部外側する。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	白色灰物 を少量含む。	褐色	酸化	床着

表21 20号住居跡出土遺物観察表 (2)

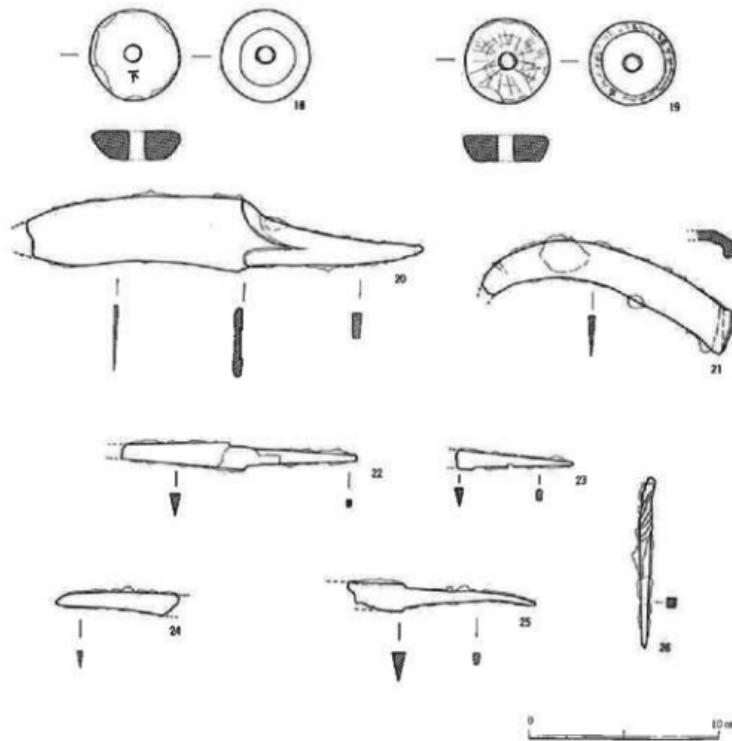
器種	法寸(㎜)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
土 簋 杯	器高 3.5 口径 13.4 底径 -	底部平底。体部内側して立も上がり、口縁部外側外傾する。	外面底部へ削り。内面ナデ。	白色粘土を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
土 簋 杯	器高 3.6 口径 12.2 底径 6.2	底部平底。体部直線的に外傾する。	クロア成形。底部回転糸切り後無調整。	白色粘土を少量含む。	褐色	酸化	床着
須 惠 杯	器高 4.1 口径 13.8 底径 7.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	クロア成形。底部回転糸切り後無調整。	砂粒、白色粘土を含む。	灰色	還元	覆土中
須 惠 杯	器高 4.1 口径 13.8 底径 7.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	クロア成形。底部回転糸切り後無調整。	白色粘土を少量含む。	灰色	還元	貯藏穴
須 惠 杯	器高 3.7 口径 13.0 底径 7.0	底部平底。体部直線的に外傾する。	クロア成形。底部回転糸切り後無調整。	白色粘土を含む。	灰色	還元	貯藏穴
土 簋 杯	器高 3.9 口径 12.4 底径 6.6	底部平底。体部内側して立も上がり、口縁部外傾する。	クロア成形。底部回転糸切り後無調整。	白色粘土を少量含む。	灰色	還元	覆土中
土 簋 杯	器高 4.2 口径 13.0 底径 9.2	底部平底。体部内側して立も上がり、縫を持って体部外傾する。	外面底部及び体部下端へ削り。内面吹抜状断面。	白色粘土を少量含む。	暗褐色	酸化	「内面底部墨書き」記号 「貯藏穴」
土 簋 杯	器高 3.9 口径 13.4 底径 9.0	底部平底。口縁部直線的に外傾する。	外面底部及び体部下端へ削り。内面ナデ。	白色粘土を少量含む。	暗褐色	酸化	「外因底部墨書き」記号 「貯藏穴」



第48図 20号住居跡の遺物 (2)

表22 20号住居跡出土遺物観察表(3)

器種	大きさ(cm)	器形の特徴	備考
18 石製品 切妻 刃	直径 4.5 厚さ 1.5 孔径 0.9	断面台形を呈する。偏平で、「下」の字が書かれている。重量57g。	床着
19 石製品 切妻 刃	直径 4.6 厚さ 1.4 孔径 0.8	断面台形を呈する。偏平で側面に文字が書かれしており、上面にも縁延がなされている。重量45g。	縁延「□□古代□□去治女」 床着
20 鉄製品 小刀	残存長 21.4	先端部分を欠損する。間から茎にかけて折返しがある。	覆土中
21 鉄製品 刀	残存長 13.4	ほぼ半円形である。刃部は内湾する。基部は折り曲がっている。	覆土中
22 鉄製品 刀	残存長 12.7	先端部を欠損する。内湾。	床着
23 鉄製品 刀子	残存長 6.3	刀部のはとんどを欠損する。	覆土中
24 鉄製品 刀子	残存長 6.6	刀部のみの残存。	床着
25 鉄製品 刀子	残存長 10.1	刀先部を欠損する。両側。	床着
26 鉄製品 刀	残存長 9.1	ねじり鐵。先端部欠損。	覆土中



第49図 20号住居跡の遺物(3)

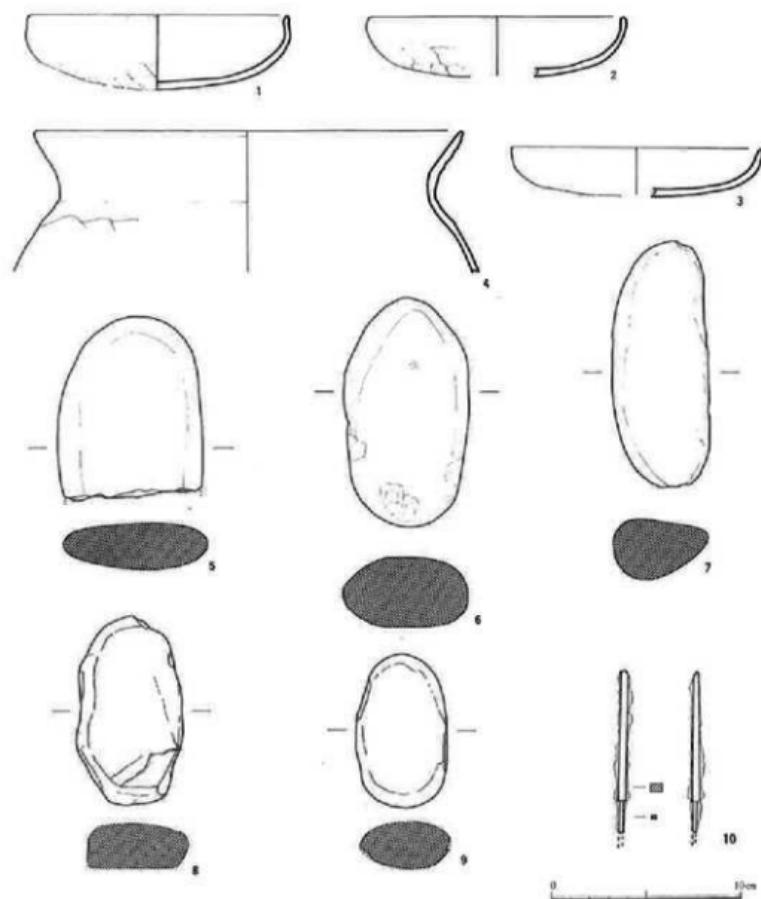
21号住居跡(第50・51・52図、図版11-2・20・22、表23)

本跡は調査区南西側K-a グリッドで検出された。西側は調査区外となっている。主軸方向はN-88°-Eである。規模は5×3.5mで横長の長方形を呈する。壁高は50cmである。

周溝は調査区内では回る。ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマド 東壁やや南寄りで検出された。煙道の壁外への掘り込みは65cmで、なだらかに立ち上がる。袖、支脚等は検出されなかった。

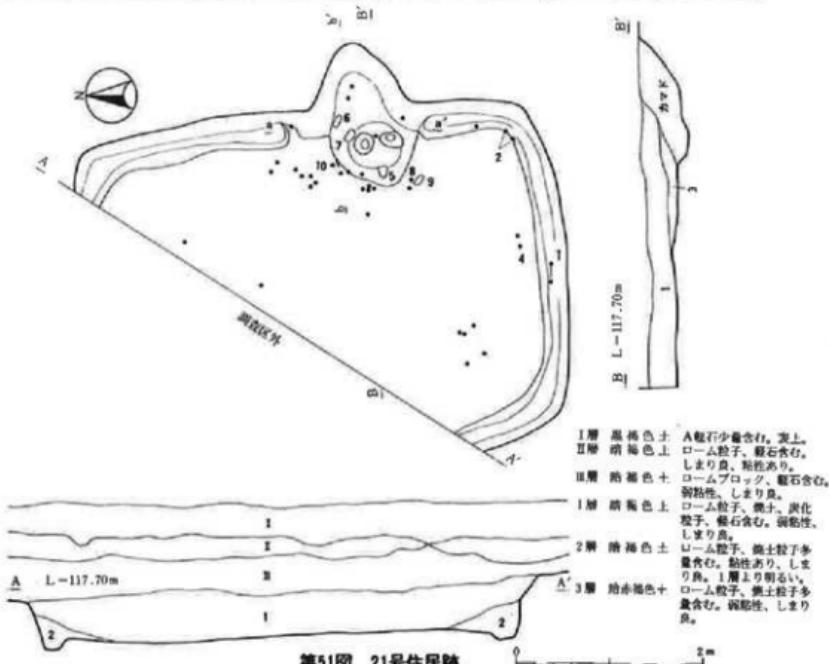
遺物はカマド付近を中心に出土している。



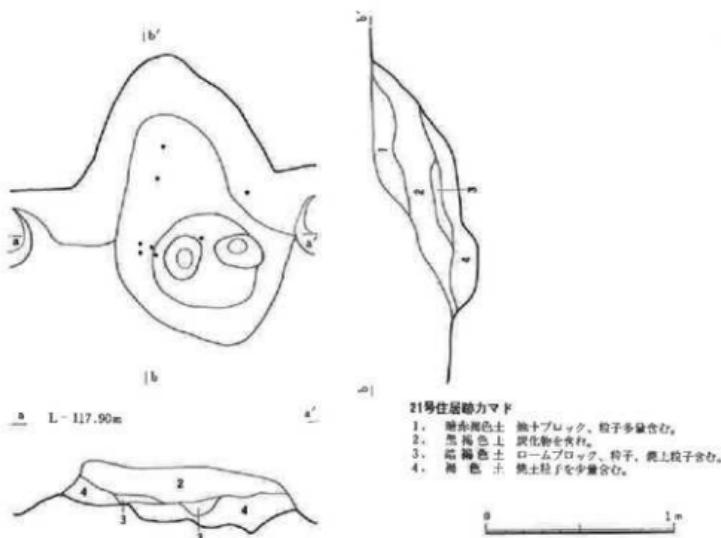
第50図 21号住居跡の遺物

表23 21号住居跡出土遺物観察表

割	器種	法量(g)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1	土器 碗 坏	器高 4.0 口径 3.6 —	丸底。体部内側して立ち上り、口唇部直立する。	外面底面及び体部下端へテラ削り。 内面ツブ。	白色粘土 を少量含む。	褐色	焼化	床着
2	土器 碗 坏	器高 3.2 口径 3.4 直径 —	丸底。体部内側して立ち上り、口唇部直立する。	外面底面及び体部下端へテラ削り。 内面口唇部ツブ。	白色粘土 を少量含む。	褐色	焼化	床着
3	土器 碗 坏	器高 2.6 口径 3.2 直径 —	丸底。体部内側して立ち上り、口唇部横張りみになる。	外面底面及び体部下端へテラ削り。	褐色	褐色	焼化	覆土中
4	土器 碗 壳	器高 (7.6) 口径 22.6 底径 —	口唇部「く」の字状に外反する。	外面胴上半部横方向へテラ削り。	砂粒を少 量含む。	褐色	焼化	床着
5	石 縱 横 厚さ	(9.6) 7.7 2.5 重量334g。	長円形を呈するものと思われる。全面磨毛している。赤褐色石か。	安山岩				覆土中
6	石 縱 横 厚さ	12.4 6.5 3.3 重量305g。	長円形を呈する。全体に磨かれている。赤褐色石か。	安山岩				覆土中
7	石 縱 横 厚さ	13.1 5.1 3.2 重量307g。	長円形を呈する。全体に磨かれている。赤褐色石か。	安山岩				覆土中
8	石 縱 横 厚さ	10.0 5.7 2.4 重量219g。	やや歪な橢円形。全体に磨かれている。赤褐色石か。	安山岩				床着
9	石 縱 横 厚さ	8.2 4.7 2.5 重量163g。	滑円形。5~8に比して小形で、よく磨かれている。赤褐色石か。	安山岩				
10	鉄製品 鍔	残存長 8.6	鉗形。					覆土中



第51図 21号住居跡



第52図 21号住居跡のカマド

22号住居跡 (第53図、図版11-3)

本跡は調査区南西側K-a、L-aグリッドで検出された。南側で23号住居跡と重複し、本跡の方が占い。主軸方向はN-87°-Eである。規模は東西方向が3.5mではば正方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは40cmである。

ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。周溝は検出部分では東側の一部を除いて回る。

カマド 東壁中央南寄りに位置する。煙道の壁外への掘り込みは50cmで、急激に立ち上がる。袖は粘土で構築されている。支脚は検出されなかった。

遺物は細片のみ少量出土している。

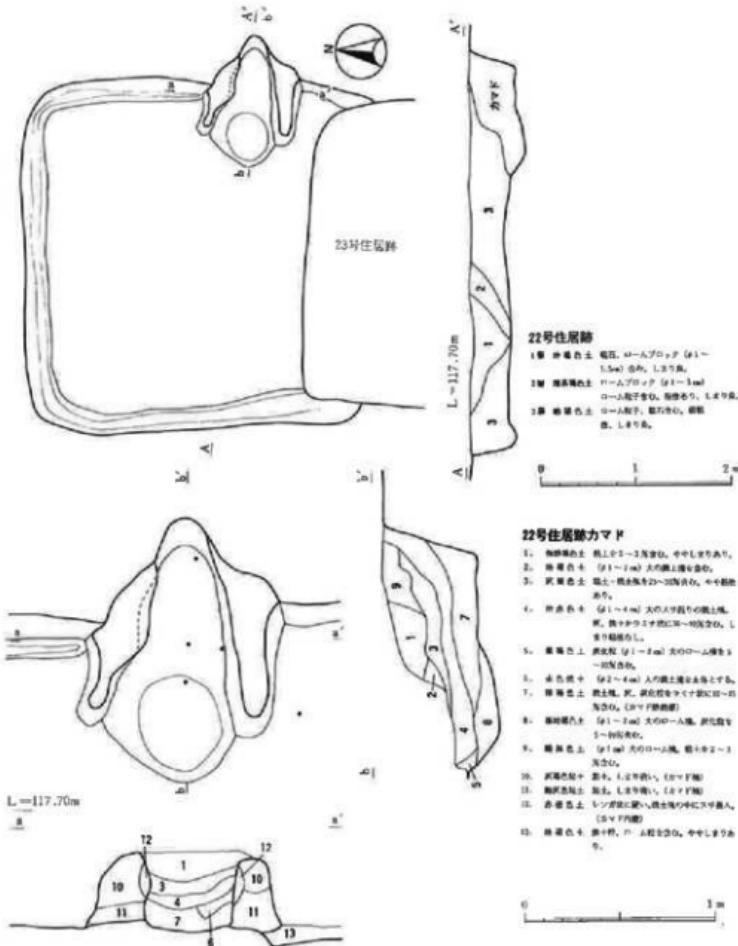
23号住居跡 (第54・55図、図版12-1・12-2・12-3・20・22、表24・25)

本跡は調査区南西側L-aグリッドで検出された。北側で22号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。主軸方向はN-93°-Eである。規模は4.2×2.8mで横長の長方形を呈する。確認面からの掘り込みは50cmである。

周溝は東側と南側の一部を除いて回る。ピット、貯蔵穴等は検出されなかった。

カマド 東壁中央南寄りで検出された。煙道の壁外への掘り込みは100cmで、なだらかに立ち上がる。袖は粘土で構築されている。支脚は検出されなかった。

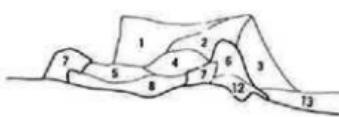
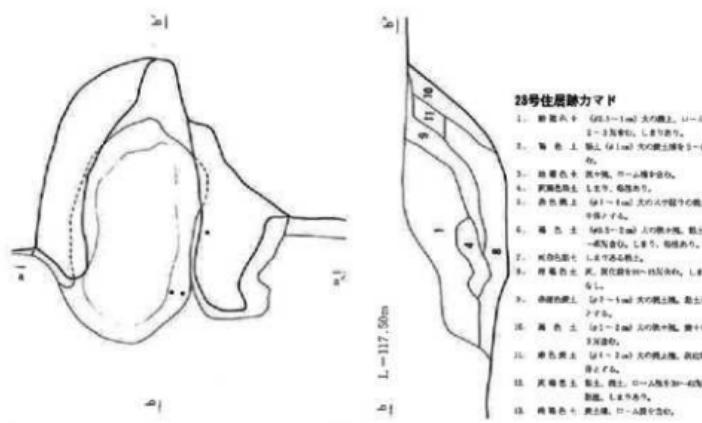
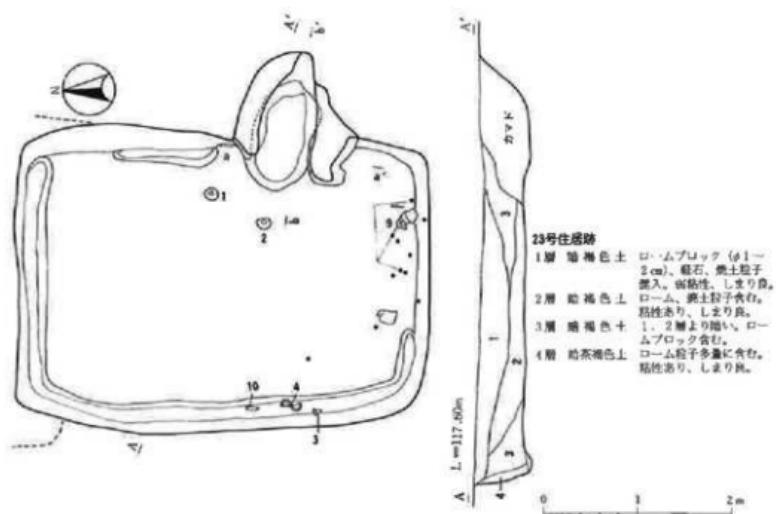
遺物はカマドの周辺及び南側に集中して検出されている。



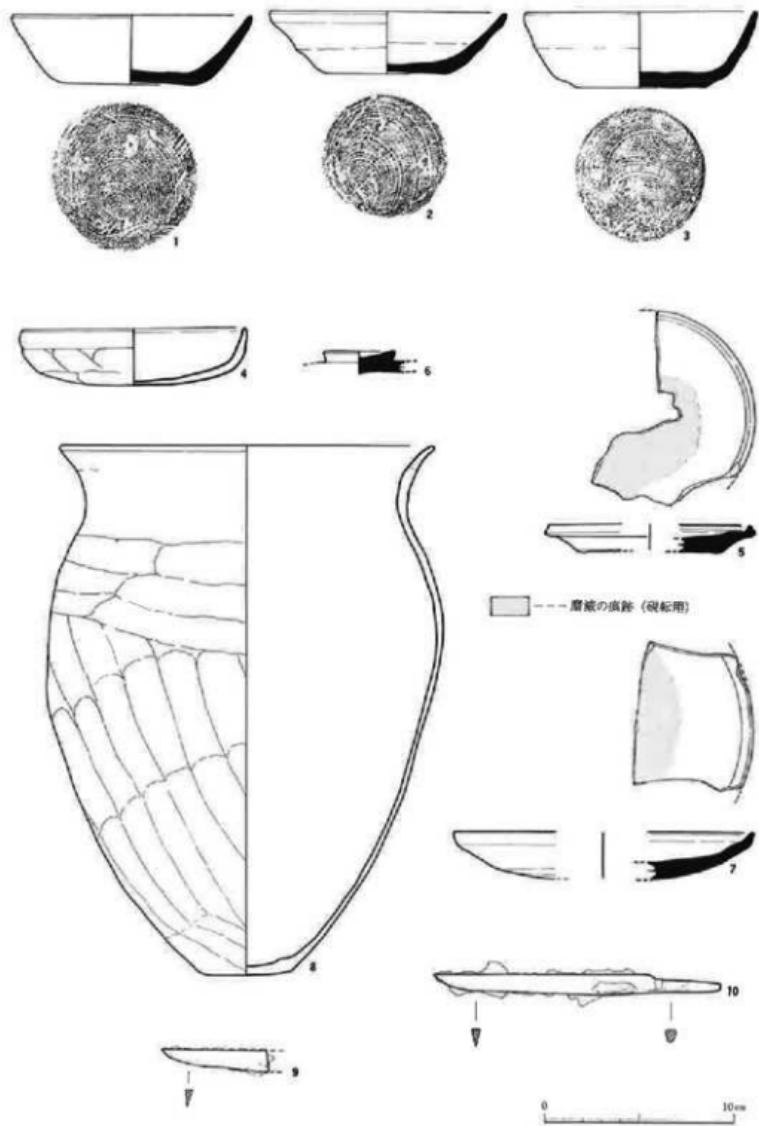
第53図 22号住居跡とカマド

表24 23号住居跡出土遺物観察表(1)

器種	法量(cm)	器形の特徴	整成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 瓢箪	器高 3.8 口径 12.8 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成型。 底部回転糸切り無調整。	白色粘土 を少量含む。	灰色	還元	覆土中
2 瓢箪	器高 3.3 口径 12.6 底径 6.4	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成型。 底部回転糸切り無調整。	白色粘土 を含む。	灰褐色	還元	覆土中
3 瓢箪	器高 4.0 口径 12.4 底径 7.0	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成型。 底部回転糸切り後、回転 ヘラ削り。	緻密	黒褐色	還元	覆土中



第54図 23号住居跡とカマド



第55図 23号住居跡の遺物

表25 23号住居跡出土遺物観察表(2)

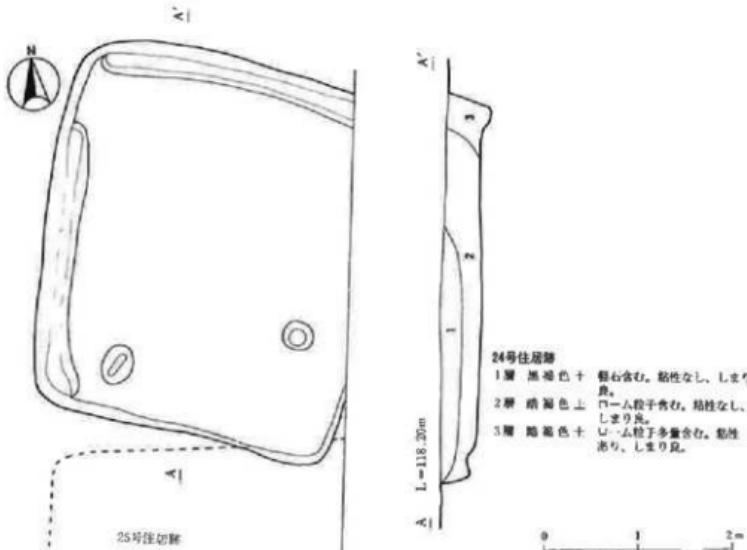
順	器種	法量(㎤)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
4	土器 杯	器高 3.0 口径 11.8 底径 -	平底ぎみの丸底。体部内 側して立ち上がり、口唇 部直立する。	外側底部及び体部へフリ リ。内面ナゲ。	白色胎土 を少量含む。	褐色	酸化	床着
5	須恵器 瓶	器高 口径 10.6	扁平。中腹に縫を有する。 つまみ部分は彎曲してい る。	レバロ成形。 天井部回転ヘラ削り。 内面磨削。	白色胎土 を少量含む。	灰色	還元	覆土中
6	須恵器 蓋	器高 (1.2) 口径 - 底径 -	環状のつまみの部分。	レバロ成形。	緻密	灰色	還元	覆土中
7	須恵器 板用研	器高 (2.5) 口径 15.8 底径 -	口縁部ゆるく折れ曲が る。	レバロ成形。 天井部回転ヘラ削り。 内面中央部磨減。	白色胎土 を少量含む。	灰色	還元	覆土中
8	土器 甕	器高 28.1 口径 19.8 底径 5.0	口縁部緩く「く」の字状 に外反する。	外面削上部横方向の中 ・下半部縦方向のヘラ削 り。内面ナゲ。	白色胎土 を少量含む。	褐色	酸化	床着
9	鉄製品 刀	残存長 5.7	刃先部のみ。					床着
10	鉄製品 刀	長さ 15.3	木質部分残る。裸聞。					覆土中

24号住居跡 (第56・57図、図版12-4、表26)

本跡は調査区南東側L-3、M-3グリッドで検出された。南側で25号住居跡と重複し、本跡の方が新しい。東側は調査区外となっている。主軸方向は不明である。規模は南北で3.8mで、やや南北に長い長方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは45cmである。

ピットは2基検出されているが、いずれも浅く主柱穴とは考えられない。周溝は北側と西側で検出されている。カマドは検出されていない。

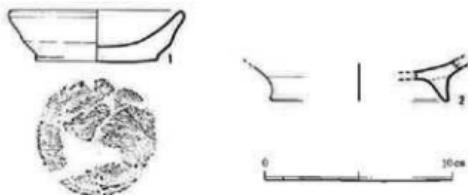
遺物は覆土中から少量出土している。



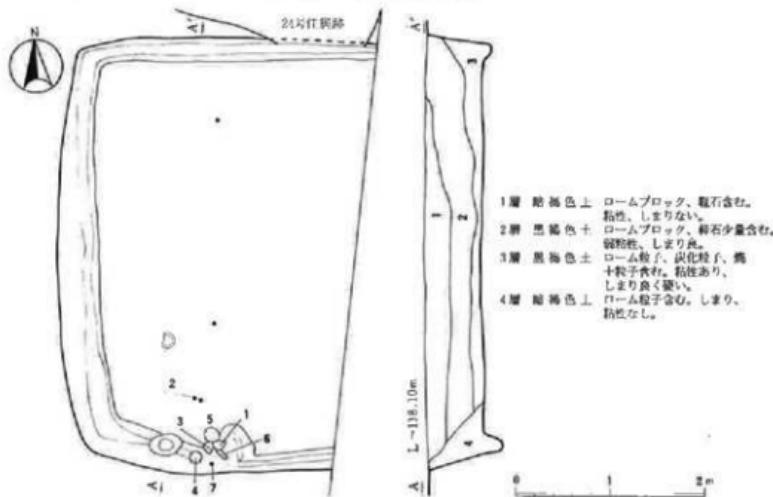
第56図 24号住居跡

表26 24号住居跡出土遺物観察表

器種	法量(cm)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 瓢 壺	器高 2.8 口径 9.1 底径 6.4	平底。小形。体部内側し て立ち上がり、口縁部外 反する。	マクラ成形。 外面底部向軸糸切り無潤 滑。	白色粘土 を含む。	褐色	酸化	覆土中
2 土 器 高台付碗	器高 (2.1) 口径 底径 5.2	高台部直立する。	高台取り付け後ナヅ。	白色粘土 を含む。	褐色	酸化	覆土中



第57図 24号住居跡の遺物



第58図 25号住居跡

25号住居跡（第58・59図、図版13-1・20、表27）

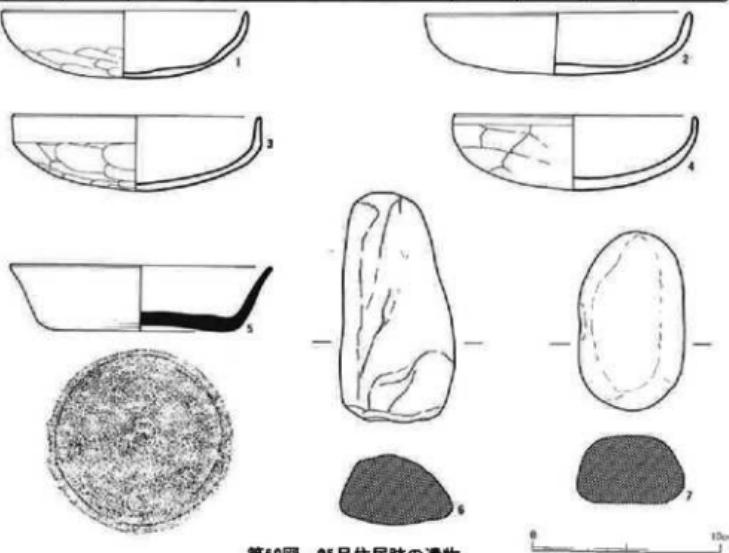
本跡は調査区南東側M-3グリッドで検出された。北側で24号住居跡と重複し、本跡の方が古い。東側は調査区外となっている。主軸方向は不明であるが、ほぼ東方向と思われる。規模は南北方向で4.5mで、方形を呈するものと思われる。確認面からの掘り込みは60cm。

周溝は調査区内では全周し、南側には浅いピット2基が検出されている。カマドは調査区外にあるものと思われる。

遺物は南側壁付近に杯類がまとまって出土している。

表27 25号住居跡出土遺物観察表

器 物	法 量(㌘)	器 形 の 特 徴	整・成 形 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	備 考
1. 土 瓶	器高 3.6 口径 13.0 底径 9.8	底部は丸底。体部は内側 にしら縁部はほぼ直立す る。	外面部はへら削り。 口縁部及び内面はナグ。	緻密	褐色	酸化	床着
2. 土 瓶	器高 3.7	底部は平底に近い丸底。 体部は縦や かくに内折する。口縁直下 底径 9.8	外面部はへら削り。 口縁部及び内面はナグ。	緻密	褐色	酸化	床着
3. 土 瓶	器高 4.0 口径 13.7 底径 9.8	底部は丸底。体部は縦や かくに内折する。口縁直下 底径 9.8	外面部はへら削り。 口縁部及び内面はナグ。	褐色に砂 粒含む。	褐色	酸化	床着
4. 土 瓶	器高 4.0 口径 12.8 底径 9.8	底部は丸底。体部は縦や かくに内折する。口縁直下 底径 9.8	外面部はへら削り。 口縁部及び内面はココナ チ。	細砂粒少 量含む。	褐色	酸化	覆土中
5. 須 瓶	器高 3.5 口径 13.8 底径 9.8	底部は平底。やや上げ底。 口先は丸底となる。体部は外反 して立つ。	ロクロ成形。底部は回転 へら起しの後、餘辺をへ ら削りする。	黒色粒子 を多く含む。	灰色	還元	床着
6. 石 板	12.2 6.0 厚さ 3.7	全体に良くなげかれている。三角錐状。直錐石か。 重量411g。		安山岩			床着
7. 石 板	9.5 5.6 厚さ 3.5	全体に良くなげかれている。荷円形。直錐石か。 重量308g。		安山岩			床着



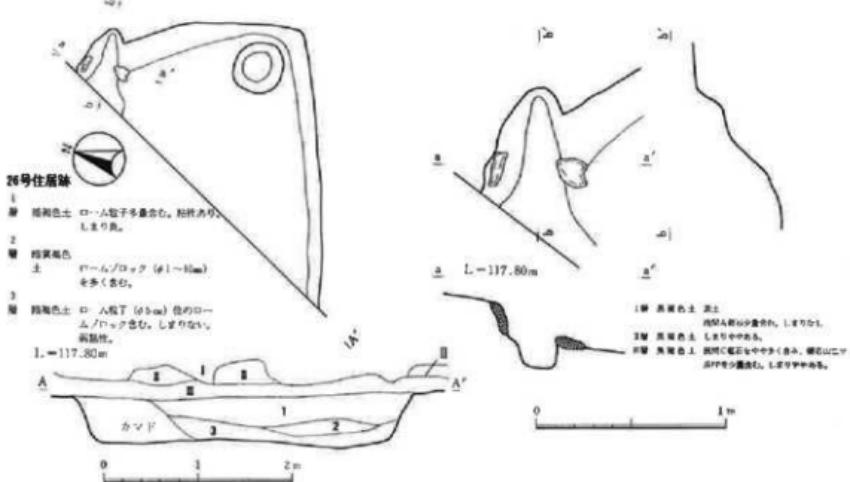
第59図 25号住居跡の遺物

26号住居跡（第60・61図、図版13-2・20、表28）

本跡は調査区南西側N-cグリッドで検出された。南東側の一部のみの検出で、他の調査区外となっている。主軸方向は不明であるが、ほぼ東方向と思われる。規模等も不明である。壁高は55cmを計る。

南東側コーナーには貯蔵穴と考えられるピットが検出されている。周溝はない。
カマド 東壁に位置する。煙道の壁外への掘り込みは20cmで、なだらかに立ち上がる。袖には石が置かれている。支脚は検出されなかった。

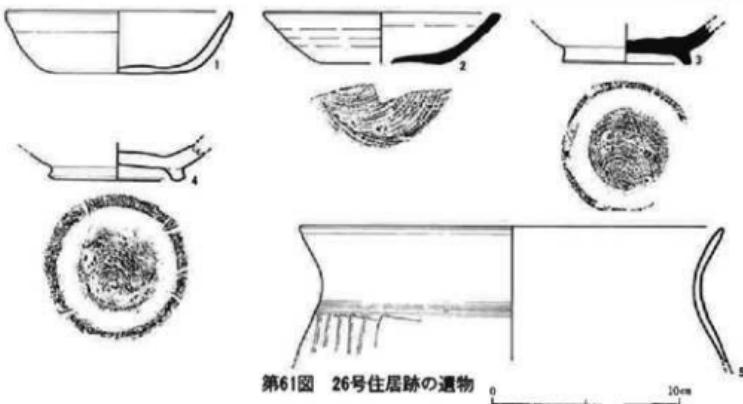
遺物は少量出土しているが覆土中のものが多い。



第60図 26号住居跡とカマド

表28 26号住居跡出土遺物観察表

器種	法寸(m)	器形の特徴	整・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 土坏	器高 3.3 口径11.8 底径 8.0	平底。体部直線的に外傾し、口縁部付近に弱い段を有する。	外面底部へ2削り。 内面ナメ。	砂粒・白色試物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
2 瓦坏	器高 2.7 口径12.4 底径 6.4	上行延ぎみの平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部凹輪系切り無調整。	白色試物を少量含む。	灰色	還元	覆土中
3 瓦 高台付脚	器高 (2.1) 口径 6.8	高台延短かく「へ」の字状に斜く、体部内側して立ち上がる。	ロクロ成形。 底部凹輪系切り後付高台、ナメ。	白色試物を少量含む。	灰色	還元	カマド内
4 瓦 高台付脚	器高 (2.0) 口径 6.6	高台延短かく「へ」の字状に斜く、体部内側して立ち上がる。	ロクロ成形。 底部凹輪系切り後付高台、ナメ。	白色試物を少量含む。	褐色	酸化	覆土中
5 土壙	器高 (7.1) 口径22.4	口縁部ややく「く」の字状に外反する。	外窓附上平部横方向への削り。	砂粒含む。	褐色	酸化	覆土中



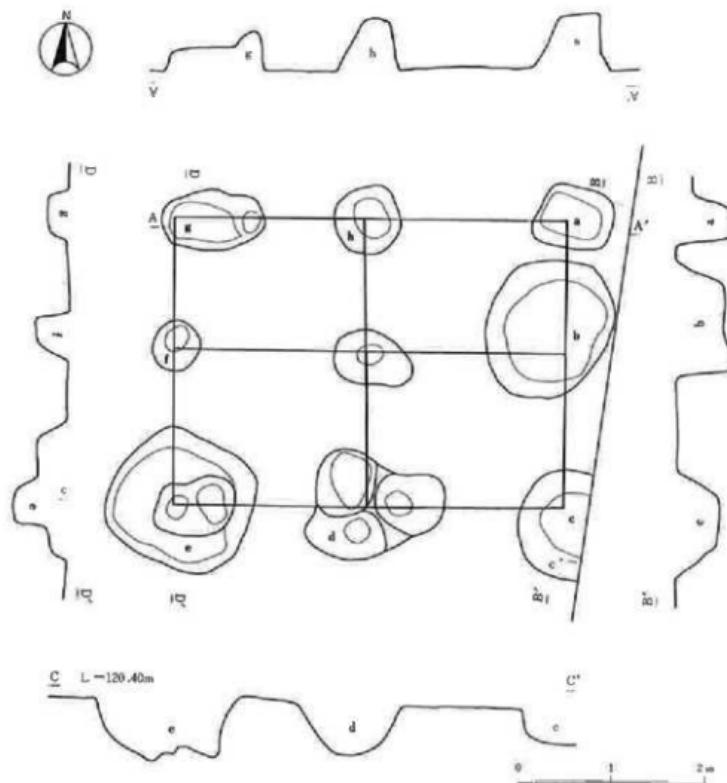
第61図 26号住居跡の遺物

2 挖立柱建物跡

本遺跡で検出された掘立柱建物跡は4棟である。調査区の中央から北側に分布し、1、2、4号掘立柱建物跡は主軸方向がほぼ同じである。しかし各柱穴の掘り込みは不整なものが多い。これらの建物跡の、住居跡群との関わりは不明である。

1号掘立柱建物跡（第62図、図版13-3）

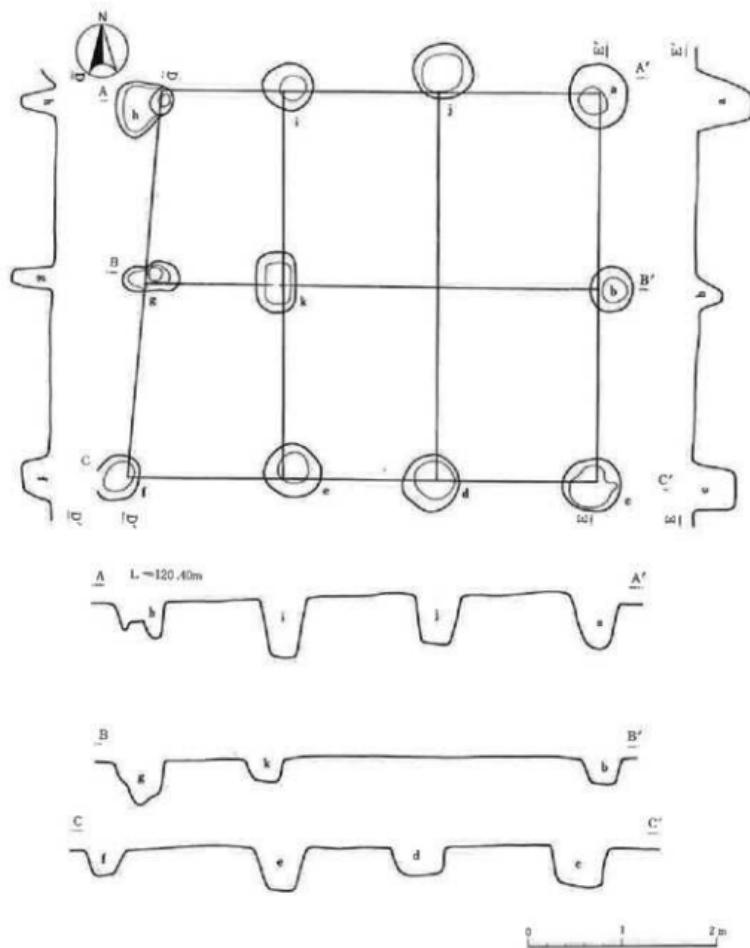
本跡は調査区北東側C・D-4グリッドで検出された。主軸方向はN-87°-Wである。東西4.2m、南北3mの2間×2間の総柱である。柱穴の深さはバラツキがあり、掘り方も不整なものが多い。覆土の観察からは柱痕は不明である。遺物は数基の柱穴から流れ込みと思われる上器の細片が出土している。



第62図 1号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡（第63図、図版14-1）

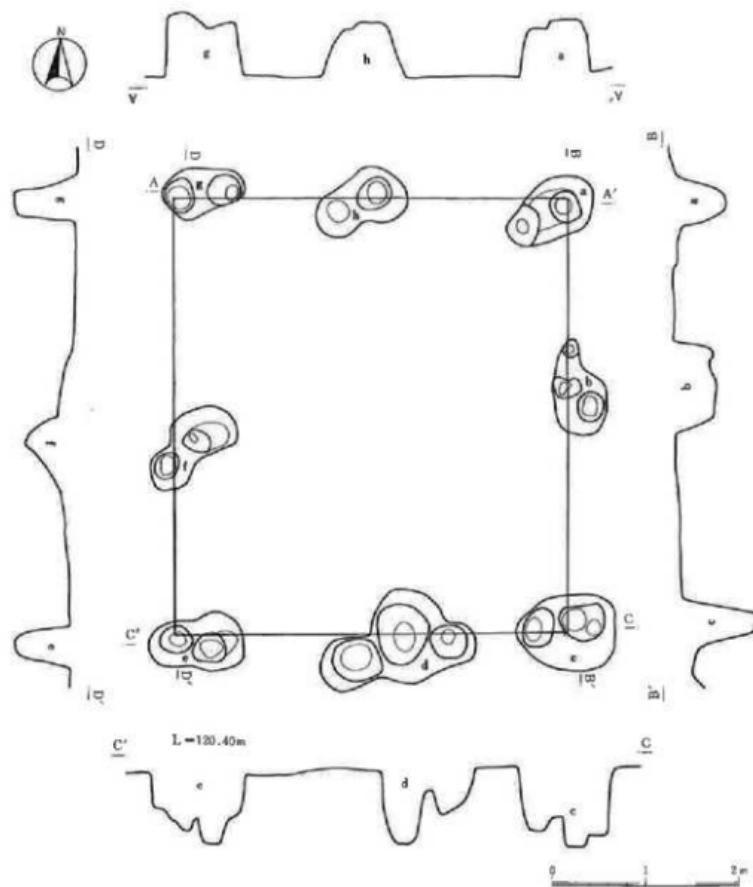
本跡は調査区北側D-2グリッドで検出された。主軸方向はN-87°-Wである。東西5m、南北4mの3間×2間である。柱穴は浅いものもあるが、掘り方はしっかりしているものが多い。柱痕は観察されなかった。遺物は流れ込みと思われる土器の細片が出土している。



第63図 2号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡（第64図、図版14-2）

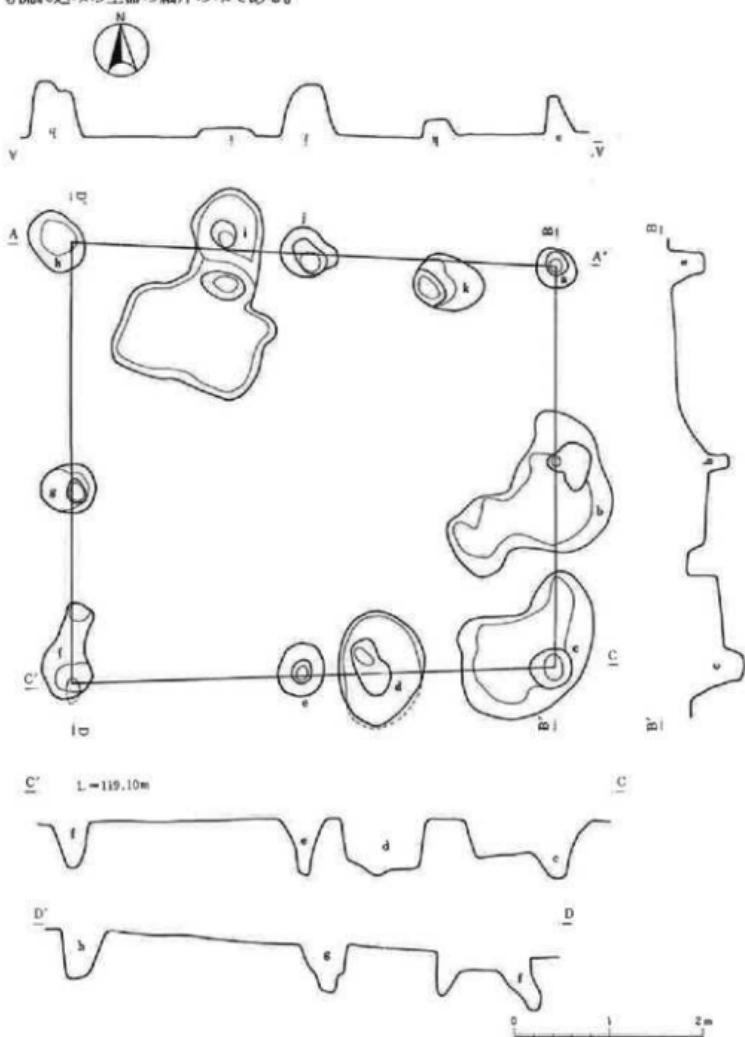
本跡は調査区北側D、E-3グリッドで検出された。主軸方向はN-5°-Wである。南北4.7m、東西4.3mの2間×2間で、建て替えを行っている。柱痕は観察されず、遺物も流れ込みのものである。



第64図 3号掘立柱建物跡

4号掘立柱建物跡（第65図、図版14-3）

本跡は調査区中央 I-2 グリッドで検出された。主軸方向は N-82°-W である。東西5.2m、南北4.7mの2間×2間である。柱穴の掘り方は不整なものが多い。柱痕は観察されず、遺物も流れ込みの土器の断片のみである。



第65図 4号掘立柱建物跡

3 井戸跡

井戸は4基検出されている。1号から4号は調査区中央に集まり、5号井戸のみ南側に離れて位置する。すべて完掘できなかったため、遺物は流れ込みのものと考えられる。

1号井戸跡（第66図、図版15-5）

本跡は調査区東側H-3グリッドで検出された。プランはほぼ円形を呈する。安全性を考え深さ1.4mまで掘り下げたが、ビンボールに依る観察によると、更に1m以上深くなる。掘り下げ部分の底径は40cmである。覆土は自然堆積を示し、遺物は殆ど出土していない。

2号井戸跡（第66図、図版15-6）

本跡は調査区中央H-2グリッドで検出された。東側2mには1号井戸跡がある。プランはほぼ円形を呈する。深さは1.5mまで掘り下げた。掘り下げ部分の底径は85cmである。覆土は自然堆積で、遺物は殆ど出土していない。

3号井戸跡（第67・68図、図版16-1、表29）

本跡は調査区中央I-2グリッドで検出された。プランはほぼ円形を呈する。深さは2.3mまで掘り下げた。径は160cm。覆土は自然堆積で、遺物は須恵器片等が少量出土している。本跡には上屋が構築されていた可能性が強い。4本柱で南北3.8m、東西3.3~3.5mである。

4号井戸跡（第66・68図、表29）

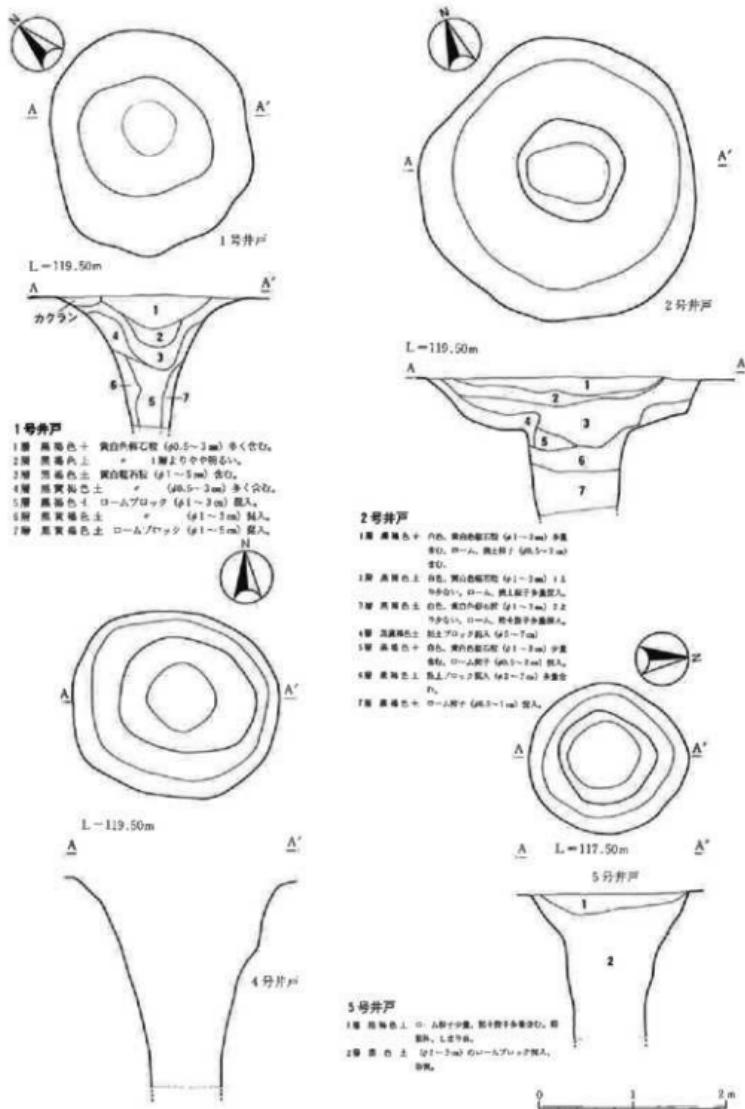
本跡は調査区西側H-1グリッドで検出された。プランはほぼ円形を呈する。深さは2.2mまで掘り下げた。掘り下げた底面の直径は75cmである。覆土は自然堆積で、遺物は少量出土している。

5号井戸跡（第66・68図、表29）

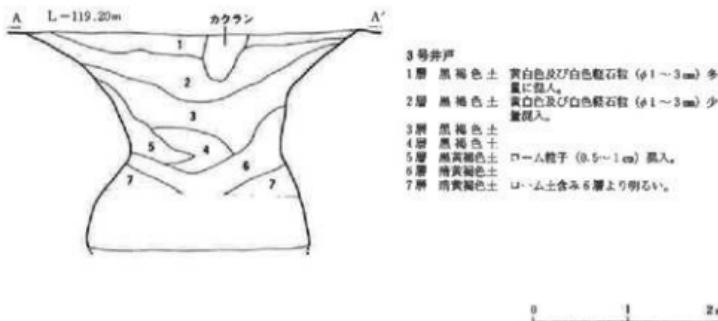
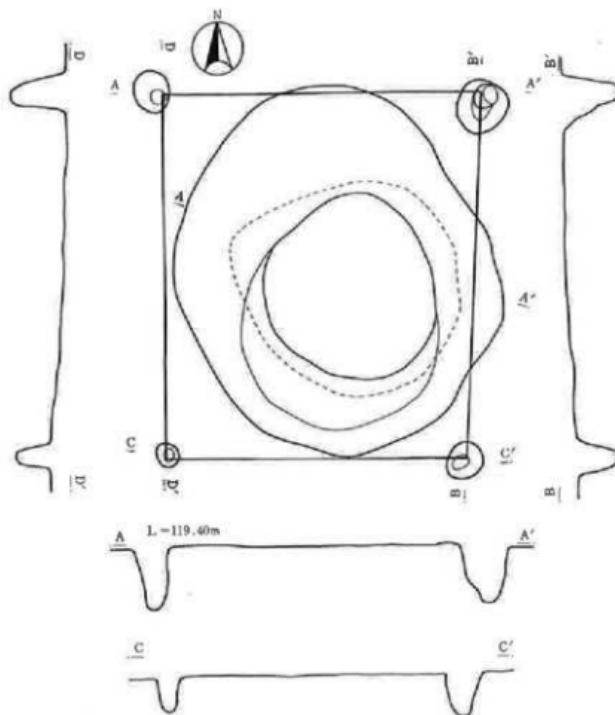
本跡は調査区南西側N-6グリッドで検出された。プランは円形を呈する。深さは1.5mまで掘り下げた。掘り下げた面の底径は75cmである。覆土は自然堆積で遺物は少量出土している。

表29 井戸跡出土遺物観察表

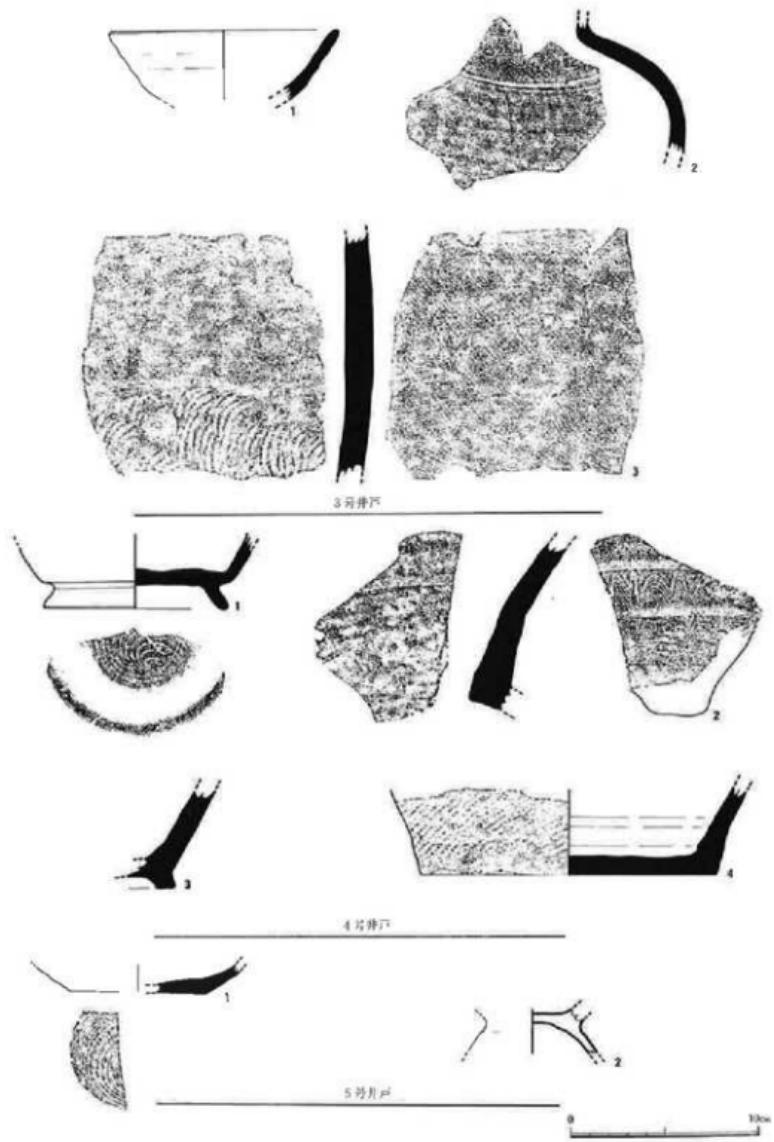
番号	器種	法量(?)	器形の特徴	壁・成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1号 井戸 1	須 窓 壺	高 度 (3.6) 口径 12.0 底径 —	体部内面凹みに浅く、上口 り、口縁部外傾する。	ロクロ成形。	白色粘土 を少量含む。	灰色	還元	覆土中
2号 井戸 2	須 窓 壺		短頸窓か。最大径は胴部 小径にくるものと思われる。	ロクロ成形。	白色粘土 を少量含む。	灰色	還元	覆土中
3号 井戸 3	須 窓 壺		大形窓の体部片。	外面部平行叩き目痕有す。 内面下部側心円状のあて 具根、上部チア調整。	白色粘土 を含む。	灰色	還元	覆土中
4号 井戸 1	須 窓 壺 高台付外 輪	高 度 (4.0) 口径 9.8 底径 —	高台窓「」の字状に開く。 体部内縫線的に外傾す る。	ロクロ成形。 底部凹部斜め切り後付高 台、ナフ。	白色粘土 を少量含む。	灰色	還元	覆土中
4号 井戸 2	須 窓 壺		口縁部片。くびれ部厚手。	外面部横状文。 内面ロクロ成形のナフ。	白色粘土 を含む。	灰色	還元	覆土中
4号 井戸 3	須 窓 壺		底部片。窓部窓細かく 「」の字状に開く。体 部内縫線に外傾する。	ロクロ成形。	白色粘土 を含む。	灰色	還元	覆土中
4号 井戸 4	須 窓 壺	高 度 (4.5) 口径 15.8 底径 —	鉢形上部の底窓片か。平 底か。体部内縫線的に 外傾する。	外面部平行叩き目。底窓は 丁寧なナフ。	白色粘土 を含む。	灰色	還元	覆土中
5号 井戸 1	須 窓 壺	高 度 (1.5) 口径 底径 5.4	平底。体部内縫線的に外傾 する。	ロクロ成形。 底部凹部斜め切り無調整。	白色粘土 を少量含む。	灰色	還元	覆土中
5号 井戸 2	子口 付 壺	高 度 (2.4)	体部の破片。胴部内窓し て開く。	外面部純粋している。 内面ナフ。	白色粘土 を含む。	褐色	酸化	覆土中



第66図 1・2・4・5号井戸跡



第67図 3号井戸跡



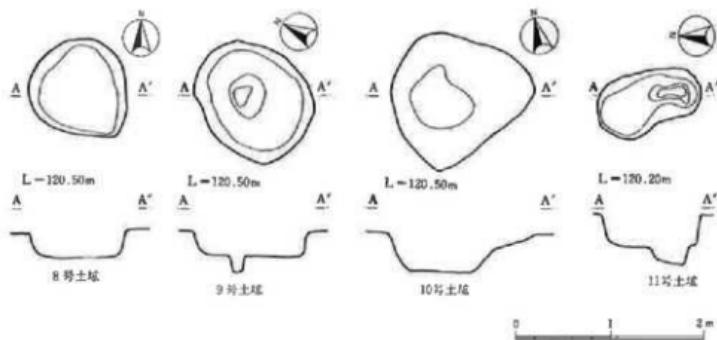
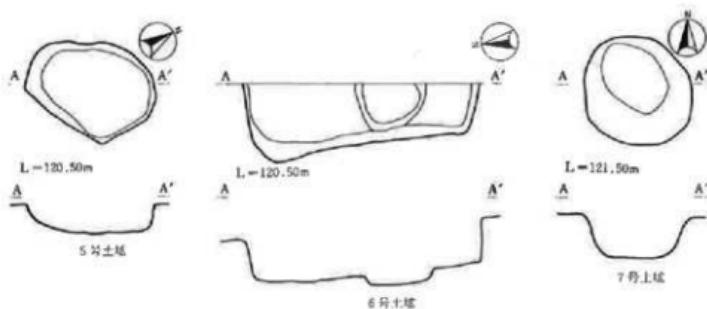
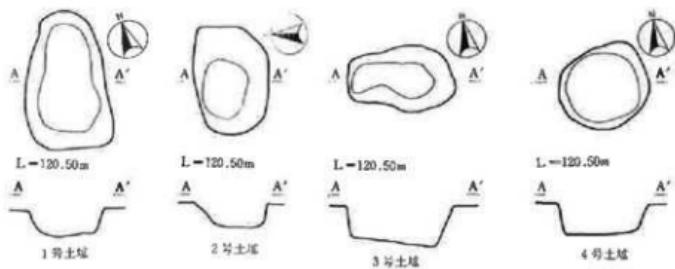
第68図 井戸の遺物

4 土 塚 (第69・70・71・72図、図版15-1~15-4、表30・31)

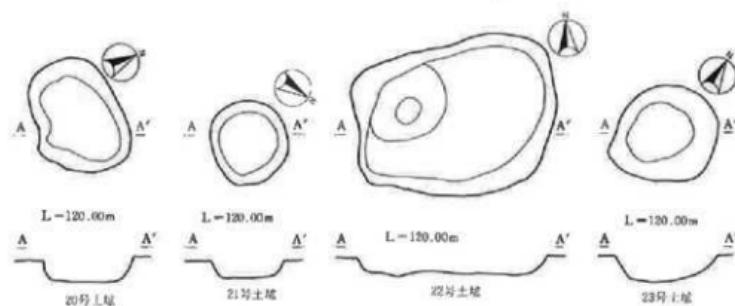
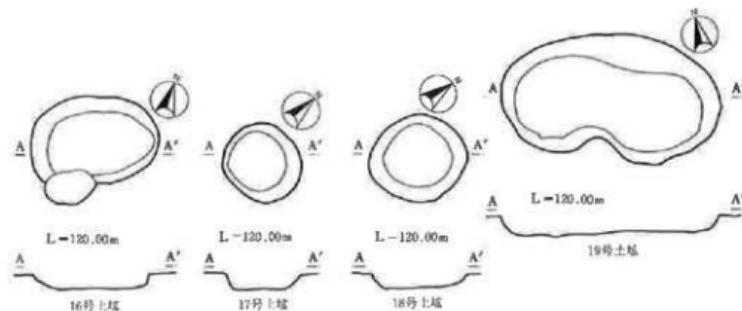
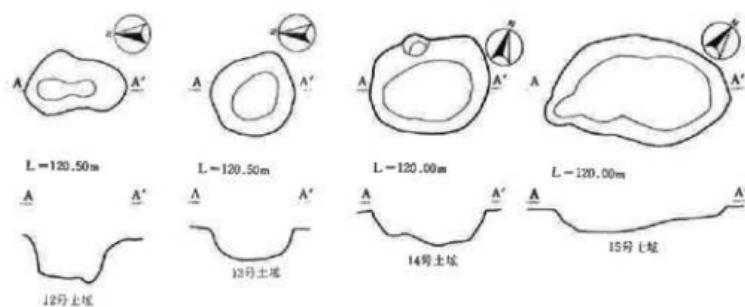
本遺跡で検出された土塚は33基である。いずれも歴史時代以前のものと考えられるが、遺物を出土しているものが少なく、また覆土中の出土であるため時代決定はできない。分布は調査区の北側に集まる。

表30 土塚一覧表

土塚番号	検出グリッド	主軸方向	平面形	規 標			備 考
				長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	
1	A 3	N-15°-E	椭円形	1.47	0.91	25	
2	B-3	N-65°-E	〃	1.14	0.79	24	
3	C 5	N-95°-E	〃	1.16	0.70	42	
4	C-3	N 55° W	円形	0.90	0.90	32	
5	C-3	N-63°-E	椭円形	1.40	1.03	26	
6	D-5	N 10°-E	不整形	2.25	不明	61	住居跡の可能性あり
7	D-5	N-29°-W	円形	1.26	1.11	44	
8	D-4	N-36°-W	不整形	1.15	1.05	26	
9	E-5	N 31° E	〃	1.34	1.12	43	
10	E-5	N-18°-E	〃	1.53	1.45	41	
11	E-3	N 16°-W	椭円形	1.15	0.65	52	
12	E-4	N-0°	瓢箪形	1.08	0.67	47	
13	E 4	N-56°-W	円形	0.94	0.88	33	
14	E-2	N 64° E	不整形	1.32	1.11	31	須恵器蓋出土
15	E-2	N-45°-E	椭円形	1.97	1.15	23	
16	E-2	N-67°-E	不整形	1.38	1.10	16	
17	E-2	N-49°-W	円形	0.85	0.80	17	
18	E 2	N-54°-W	〃	1.06	0.94	16	
19	E-2	N-69°-W	不整形	2.37	1.30	23	
20	E 1	N-69°-E	〃	1.30	0.90	23	
21	E-1	N 82° E	円形	0.91	0.88	17	
22	E-2	N-63°-E	不整形	2.35	1.75	19	須恵器甕・蓋出土
23	E-2	N 30° E	〃	1.22	1.05	27	
24	E-2	N-40°-W	〃	1.21	1.06	24	須恵器壺出土
25	E-2	N 80°-E	瓢箪形	1.40	1.06	30	
26	E-3	N-0°	〃	1.28	0.81	21	
27	E 2	N-74°-E	〃	1.11	0.65	36	土偶器・須恵器壺出土
28	F-2	N-15°-W	円形	0.78	0.71	9	
29	F-2	N-36°-E	不整形	1.07	0.72	19	
30	E-2, F-2	N-51°-W	椭円形	1.34	1.01	34	
31	F 2	N-78°-E	不整形	1.34	0.96	38	
32	F-2	N-38°-E	瓢箪形	1.44	0.86	40	
33	J 4	N-71°-E	椭円形	2.16	1.26	34	2号席状遺構よりも古い

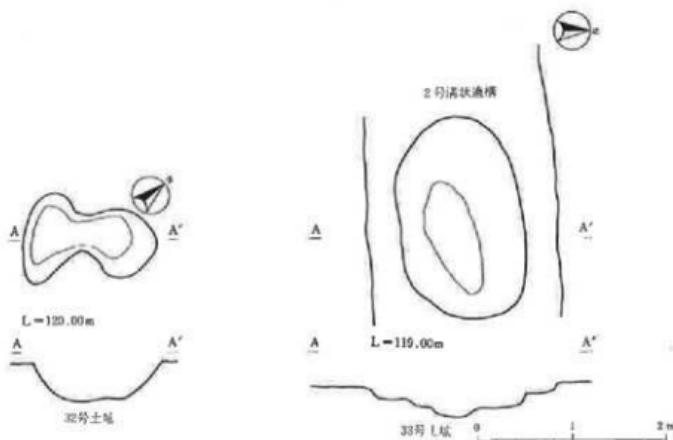
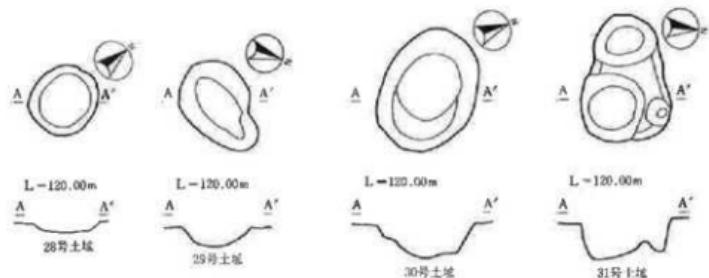
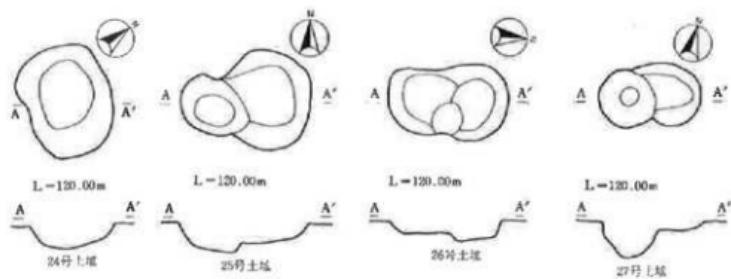


第69図 土 塚 (I)



0 1 2 m

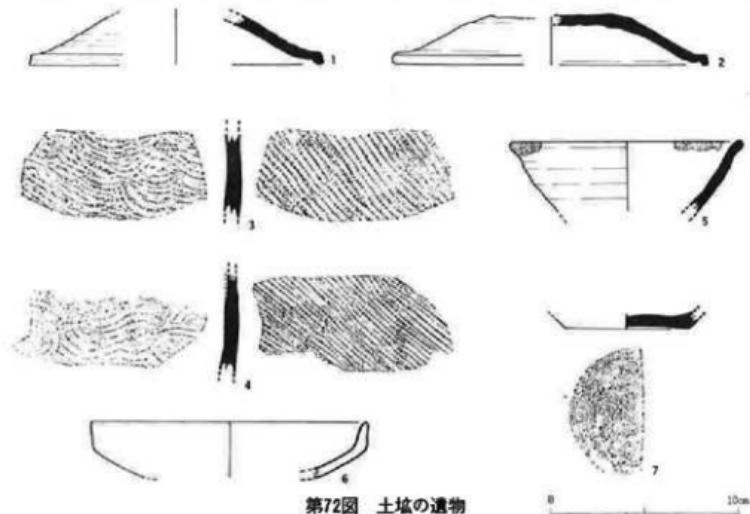
第70圖 土 壤 (2)



第71圖 土 壤 (3)

表31 土塙出土遺物觀察表

器種	法量(㎤)	器形の特徴	整成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 京 漢 蓋	器高 2.6 口径15.6 底径 一	破片。口縁部直ぎみに折れ曲がる。	ロクロ成形。	白色礫物を少量含む。	灰色	還元	14号土塙 覆土
2 須 漢 蓋	器高 2.6 口径16.7 底径 一	口縁部直ぎみに折れ曲がる。	ロクロ成形。 大井戸回転へつ割り。	白色・黑色礫物を含む。	灰色	還元	22号土塙 覆土
3 須 漢 裏	—	洞脚片。	外面平行凹き目。 内面同心円状のあて具眼。	白色礫物を少量含む。	灰色	還元	22号土塙 覆土
4 須 漢 裏	—	洞脚片。	外面平行凹き目。 内面同心円状のあて具眼。	白色礫物を少量含む。	灰色	還元	22号土塙 覆土
5 須 漢 环	器高 3.7 口径12.2 底径 一	体部内高して立ち上がり、口縁部外傾する。	ロクロ成形。 ロ離部す付着。	白色礫物を少量含む。	灰色	還元	24号土塙 覆土
6 土 席 环	器高 4.1 口径11.2 底径 一	平底ぎみの丸底。体部内高して立ち上がり、口縁部直立する。	外面底部へつ割り。 内面ナデ。	白色礫物を少量含む。	褐色	酸化	27号土塙 覆土
7 重 漢 环	器高 一 口径 一 底径 6.5	平底。体部直線的に外傾する。	ロクロ成形。 底部回転未切り無渦底。	砂利・白色礫物を少量含む。	灰褐色	還元	27号土塙 覆土



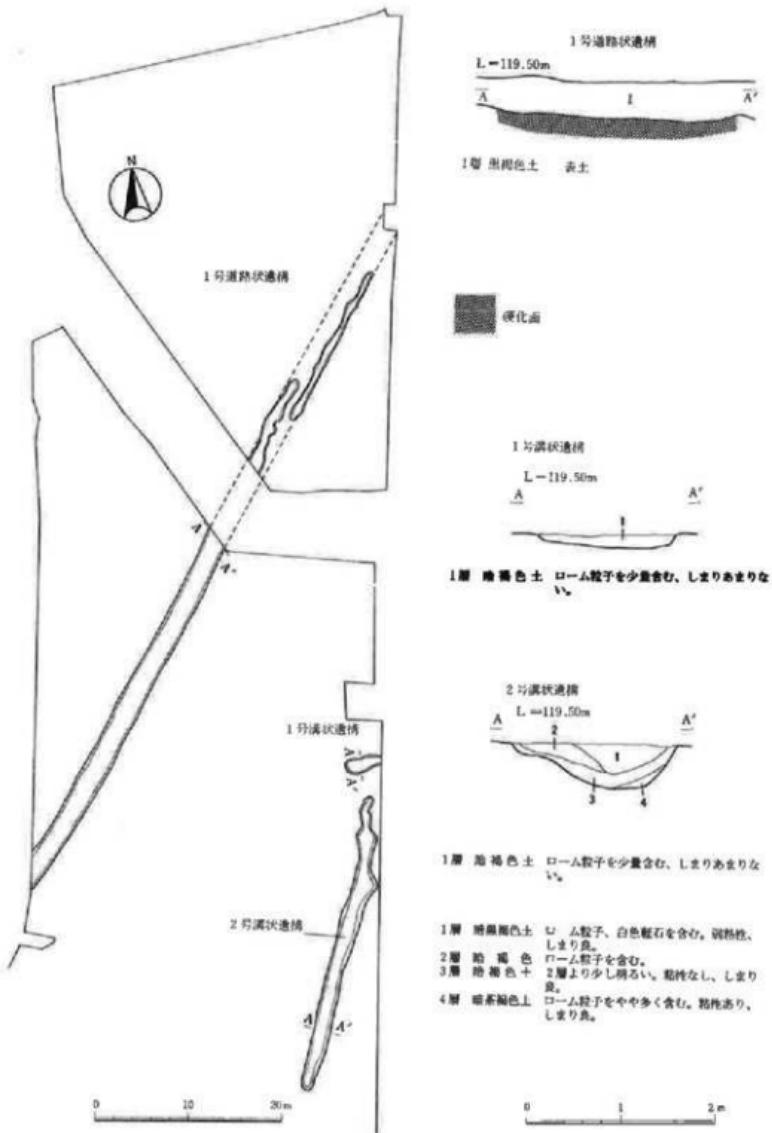
第72図 土塙の遺物

5 道路状遺構

道路は1条検出されている。近所の人の話によると昭和初期まで道として利用されていたと言ふ。

1号道路状遺構 (第73図、図版16-2・16-3)

調査区北東から南西方向に向かう。道巾は2.2m。北東側は表土層直下の検出のため不明瞭であり、硬化面を一部検出したが、南西側では硬化面が明瞭にとらえられた。



第73図 1号道路状造構、1・2号溝状造構

6 溝状遺構

溝状遺構は2条検出されている。いずれも調査区南東側で検出され、掘り込みは不整である。

1号溝状遺構（第73図）

調査区東側I-3グリッドで検出。東側へ延びていくものと思われる。巾1.5m、深さは15cmである。覆土は単層で遺物は出土していない。

2号溝状遺構（第73図、図版16-4）

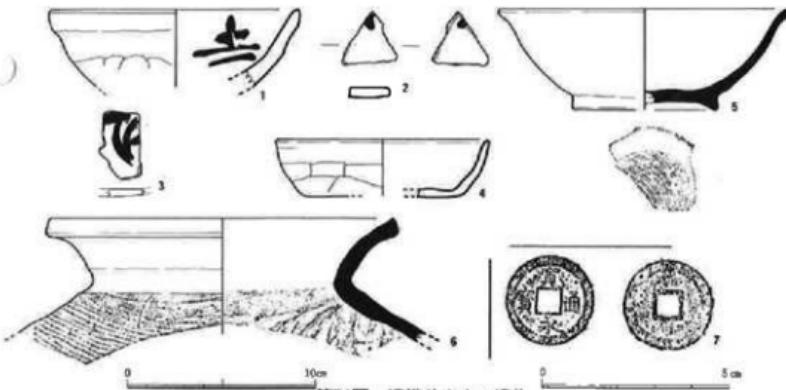
調査区東側で検出された。巾2m前後、長さ32m、深さは最大で50cm。

7 遺物外出土の遺物（第74図、図版21・22、表32）

本遺跡で検出された遺構外の遺物は少量で、その殆どが搅乱等からの出土であり、時期的にも住居跡と同時期のものが多い。

表32 遺構外出土遺物観察表

器種	法量(cm)	器形の特徴	整成形の特徴	胎土	色調	焼成	備考
1 土師杯	器高(4.1) 口徑13.0 底径—	体部内斂して立ち上がり、口縁部直立ぎみにあら。	外面体部下端へフ削り。	砂粒・白色粘物を含む。	茶褐色	酸化	内面体部正位 墨書き「寺」
2 土師杯		底部片。	外面へフ削り。 内面ナデ。	白色粘物を少量含む。	褐色	酸化	M-14グリッド 外面墨痕
3 土師杯		底部の破片。	外面底部へフ削り。 内面ナデ。	褐色	褐色	酸化	外面底部墨青「不明」表採
4 土師杯		平底。体部内斂して立ち上り。	外面底部及び体部下端へフ削り。 内面ナデ。	褐色	茶褐色	酸化	G-0グリッド
5 瓢箪	器高5.4 口徑15.5 底径7.6	高台頃かく「ハ」の字状に開く。体部内斂して立ち上り、口縁部外傾する。	ロクロ成型。底部回転糸切り後付高台、ナデ。	白色粘物を含む。	灰褐色	還元	J-3グリッド
6 須磨瓦	器高(6.1) 口徑18.2 底径—	口縁部強く「く」の字状に外反する。	ロクロ成型。外面周縁平行叩き目。内面あて具膜。	白色粘物を少量含む。	灰色	還元	M-0グリッド
7 古鏡	径2.4	寛永通宝					M-0グリッド



第74図 遺構外出土の遺物

8 墨書土器・線刻紡錘車について（図版21、表33）

出土した墨書土器は18点、線刻がある紡錘車は2点である。このうち同一土器に同一文字が書かれているものが5例ある。線刻紡錘車は本遺跡と近接する大久保遺跡（注1）で「大田部山岳子」と記されたものが出土している。

墨書土器・線刻紡錘車については平川南氏に御教示いただき、ここではそれを以下に一覧表とした。

表33 墨書土器・線刻紡錘車一覧表

墨書土器

No.	住居跡番号	遺物番号	器種・器形	墨書部位	積文
1	2号住	6	須恵壺	体部外面	不明
2	3号住	1	上帥壺	体部外面横位	「院」
				体部内面横位	「院」
3	3号住	3	土師壺	体部内面横位	「院」カ
4	3号住	8	須恵壺	体部内面正位	「院」
5	3号住	9	須恵壺	体部外面	不明
6	3号住	10	土師壺	体部内面	「院」
7	3号住	11	土師壺	体部外面	不明
8	4号住	6	土師壺	体部内面	不明
9	7号住	2	土師壺	体部外面横位	不明
10	12号住	2	土師壺	底部外面	「千」
11	14号住	3	須恵壺	底部外面	「車」
				底部内面	「車」
12	14号住	4	須恵壺	底部外面	不明
13	14号住	7	上帥内黒壺	体部内面	「千」
				底部外面	「千」
14	20号住	16	土師壺	底部外面	記号「ト」
				底部内面	同じ記号カ
15	20号住	17	土師壺	底部外面	「前酒」
				底部内面	「前酒」
16	グリッド	1	土師壺	体部内面正位	「寺」カ
17	グリッド	2	土師壺	底部内面	不明
				底部外面	不明
18	グリッド	3	土師壺	体部内面	判読不明

特徴 ○1つの土器に同じ文字を2ヶ所に記す

○内面に記すものが目立つ

○体部外面に文字を記す例は比較的少ない

線刻紡錘車

No.	住居跡番号	遺物番号	石の種類	線刻部位	積文
1	20号住	18	滑石	使用面上面	「下」
2	20号住	19	滑石	側面	「□□名代□□去勞女」 石。相。右。勞。 (※人名の連記の可能性あり)

注1. 平田貴正・折原洋一 「昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概要」群馬県教育委員会1985

9 銅印について（表34）

（1）荒子小学校校庭Ⅱ遺跡出土銅印の蛍光X線分析結果

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋 正春

1はじめに

標記の資料について非破壊的手法による材質分析を実施したので、ここにその結果を報告する。分析には、歴博に設置している大型試料用波長分散型蛍光X線分析装置並びに文化財用X線回析装置を使用したが、それらの詳細についてはここでは省略する。

なお銅印の印面のごく一部には赤色が認められたため、押印時の印肉素材の可能性をも併せて検討した。

2結果

蛍光X線分析により検出された元素は次のようなものである。

銅(Cu) ヒ素(As) 銀(Ag) 鉄(Fe) チタン(Ti) 鉛(Pb) ビスマス(Bi) アンチモン(Sb) 金(Au) カルシウム(Ca) ケイ素(Si) カリウム(K) アルミニウム(Al) イオウ(S)

それぞれの元素のピーク強度で言えば、銅は非常に強く、ヒ素は銅に次いで中程度に強く、銀、チタン、鉛、カルシウム、ケイ素、カリウムは弱く、ビスマス、アンチモン、アルミニウム、イオウは更に弱いものの確実に検出される。金はきわめて微弱ではあるが、一応確認できるものと考える。鉄は印面部の分析では銅に次いで大きなピークを示すものの、その他の部位では銀と同じ程の強度に低下している。

これらは、分析の方法上、資料のごく表面部分についての分析結果であり、また元素の存在量を精密に定量的に行うことはできないが、おおよそ銅印の素材については把握できるものと考える。すなわち、銅印はヒ素を若干量（恐らく10%をある程度下回る量であろう）含む青銅で、その中に不純物として銀、鉛、ビスマス、アンチモンなどを含んでいる。鉄やチタン、カルシウムなどは、銅印本体以外に土汚れなどからも検出されることが期待でき、従ってこれらの元素によって本体素材を特徴づけることは困難である。

印面に見られる赤色であるが、上記の元素内容から、まず朱（赤色硫化水銀）であることが否定される。また赤色部を中心としたX線回析データについて検討した結果、印肉顔料と想定される3種の赤色顔料即ち朱、べんがら（赤色酸化鉄）、鉛丹（四三酸化鉛）のいずれのピークも見い出しえなかった。顕微鏡による当該部の観察では、赤色顔料の付着と考えるよりはむしろ本体の腐食生成物と見なした方が自然な状況であった。以上のことから現時点に於いては、印面に認められる赤色物は一酸化銅(Cu^2O)と判断する。X線回析ピークとしては、これに該当するものが確認できないが、これは結晶性が悪いためと考えたい。なおこれらの事実関係については、機会を改めて再確認したいものと考えている。

(2) 群馬県内出土銅印

本遺跡から銅印が1点出土した。群馬県内で既に発見された古代の銅印は知られているだけでも7点で、本遺跡出土のものは8例目となる。また、本遺跡の出土状況は他例と比べ、所属時期、出土場所が明確であり、この点でこの印は本遺跡のみならず、平安時代前半の荒砥地域一帯の性格を特色づける遺物である可能性が考えられる。

印は木内武男氏に鑑定いただき、玉稿を賜った。

「蠶型の印面に直接逆字に彫った蠶型鋳造」による古銅印の一例である。

全体の形状、紐形など、またとくに印文の素朴なところに却て大和古印としての滋味掏すべきものがある。

なお、印面の方3.0cmは当時の1寸に相当し貞觀格の「私印は1寸5分を限りとなす」の條文により私印と認められる。印文は姓名のいづれか1字を意味しているものと考えられる。

群馬県内出土銅印については前沢和之氏に御教示いただき、ここではそれを以下に一覧表とした。

表34 群馬県内出土銅印一覧表

印文	出土場所	規模と形状	備考
『物部私印』	高崎市矢中村東遺跡 ^(注1)	印面3.7cm四方、全高4.2cm 苔鉢有孔	朱色の付着物残存。 平安時代初期
『池山長私印』	利根郡利根村大字高戸字小沢 ^(注2)	印面4.0cm四方 苔鉢頭鉢有孔	鉢が欠損 平安時代
『延喜式印』	藤岡市中栗須	印面4.3cm×4.2cm、 現高2.4cm 弧紐有孔	鉢孔が四角形 平安時代
『主玉人神』	安中市板鼻町板鼻社廻址 ^(注3)	印面5.2cm四方、全高5.2cm 苔鉢有孔	平安時代
『朝』	利根郡月夜野町蔽田遺跡 ^(注4)	印面2.6cm×2.55cm、 全高3.1cm 苔鉢有孔	朱色の付着物残存 平安時代
『百』	富岡市宇田字惠下原(探集)	印面2.4cm四方、全高2.6cm 苔鉢頭鉢有孔	平安時代
『酒』	前橋市總社町山王庵寺跡 ^(注5)	印面2.8cm四方、全高3.0cm 苔鉢有孔、鉢基部に2本の 玉縁	平安時代前期

注1.『矢中遺跡(矢中村東遺跡』高崎市教育委員会

注2. 富岡 鶴・水田 稔『利根村で発見された古代「銅印』』『群馬文化』1984

注3. 木内武男『印草』柏齋房 1983

注4.『蔽田遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985

注5.『山王庵寺跡第5次発掘調査報告書』前橋市教育委員会 1979

VI まとめ

本遺跡では住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土塙、溝状遺構、道路状遺構が検出された。この中で溝状遺構、道路状遺構は時代不明であるが、他の遺構は奈良・平安時代に包括されるものと思われる。ここでは住居跡出土の遺物を中心に集落の変遷をさぐってみる。

1 住居跡出土の土器について（第75・76・77図）

第Ⅰ期 21・25号住居跡

土師器壺・甕・須恵器壺が検出されている。土師器壺は丸底で、口縁部に弱い稜を持ち、直立して立ち上がるるものと、内湾して立ち上がり、そのまま直立するものが認められる。甕は器肉が薄く、口縁部が「く」の字状に強く外反する。須恵器壺は器高が低く、体部は直線的に外傾する。底部は回転ヘラ切り後、周縁部をヘラ削り調整する。

第Ⅱ期 6・7・9・10・12・17・23号住居跡

土師器壺・甕・須恵器壺・蓋・鏡等が検出されている。土師器壺は平底に近くなり、口縁部は外傾ぎみになる。甕は口縁部の外反はやや弱まり、最大径は胴上半部にある。須恵器壺は第Ⅰ期よりやや器高が高くなり、体部は直線的に外傾する。底部は回転糸切り後、周縁部を回転ヘラ削りするものと、無調整のものがある。蓋は偏平なつまみを持ち端部は屈曲する。他に円面鏡の破片が出土している。

第Ⅲ期 18・20・26号住居跡

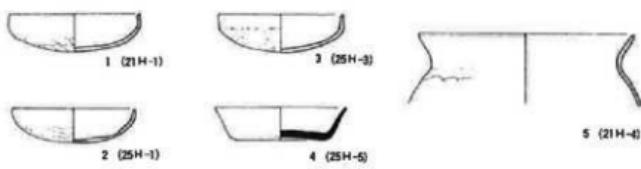
土師器壺・甕・須恵器壺・高台付椀等が検出されている。土師器壺はほぼ平底で器肉が薄く体部は直線的に外傾する。甕は口縁部が「コ」の字状になりつつある。又小形の台付甕と思われるものもあるが共に器肉は薄い。須恵器壺は体部が直線的に外傾するものと、内湾ぎみに立ち上がるものが認められる。底部は回転糸切り無調整である。椀は高台部が短かく「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切り後、高台を取り付け、周縁部を調整している。

第Ⅳ期 4・5・13・19号住居跡

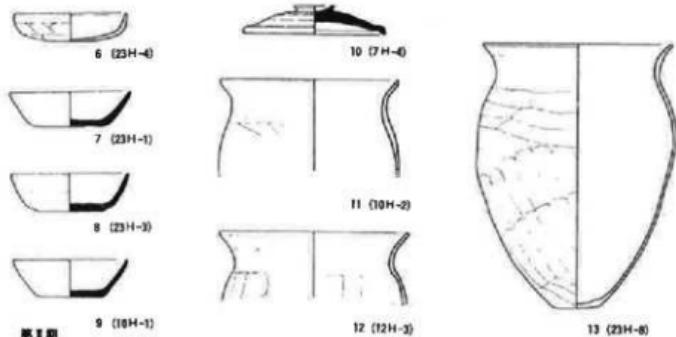
土師器壺・甕・須恵器壺・高台付椀・皿等が検出されている。土師器壺は平底で器肉がやや厚くなり、体部は直線的に外傾する。甕は「コ」の字状口縁である。須恵器壺は体部は直線的に外傾し、底部は回転糸切り無調整である。椀は高台付部は「ハ」の字状に開き、底部は回転糸切り後、高台を取り付け周縁部を調整している。皿は底部付近の器肉が厚い。

第Ⅴ期 3・8・11・14・15号住居跡

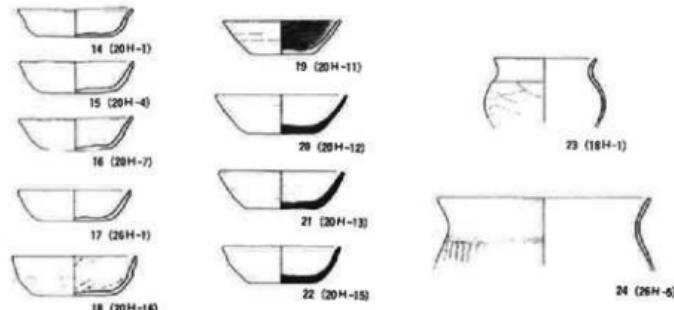
土師器壺・高台付碗・甕・瓶・須恵器壺・高台付椀・皿・灰釉陶器碗・皿等が検出されている。土師器壺は平底で器肉が厚くなる。体部は直線的に外傾する。高台付碗は内黒処理をほどこしたものが多く、高台部が「ハ」の字状に開くものと、直立ぎみに立ち、器高が高くなるものがある。甕は大形のものと小形のものがあり、口縁部は「コ」の字状を呈し、器肉厚くなる。須恵器壺は体部が直線的に外傾し、底部は回転糸切り無調整である。高台付椀は高台が太く短かく、高台取り付け後の調整は稚である。灰釉陶器碗は高台部は三日月状を呈し、刷毛塗りである。他に3号住居跡から銅印が出土している。



第一期



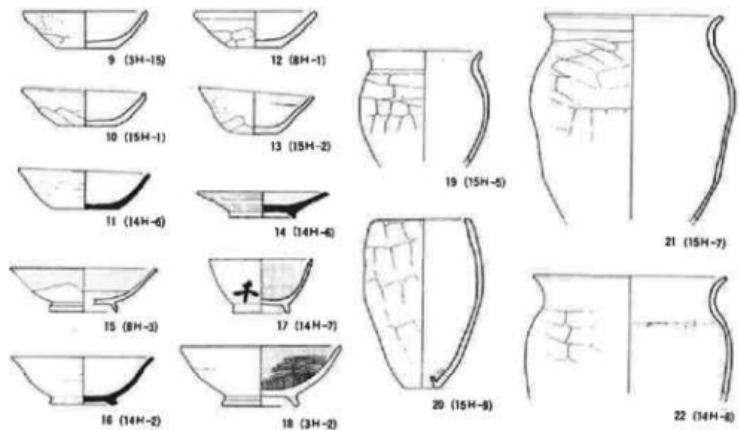
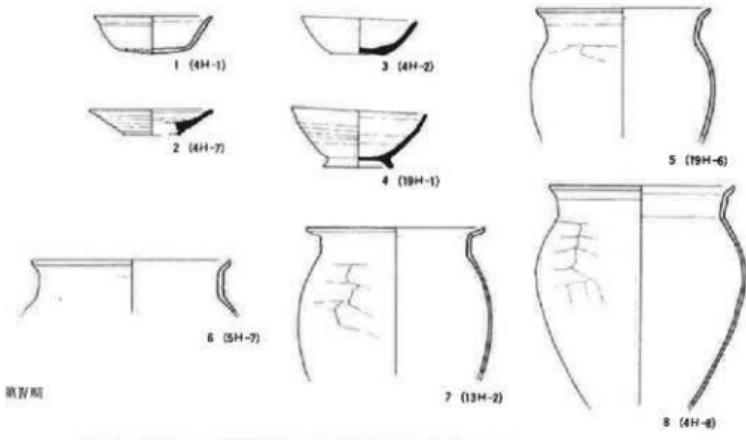
第二期



第三期

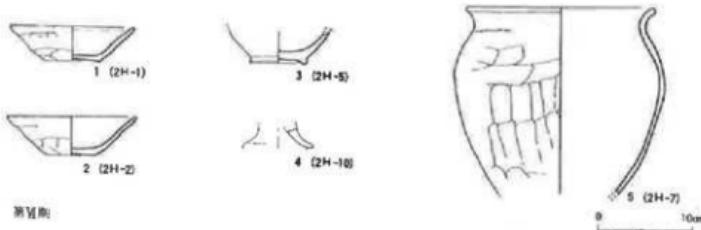
0 10cm

第75図 住居跡出土土器変遷図 (1)



0 10cm

第76図 住居跡出土土器変遷図 (2)



第77図 住居跡出土土器変遷図 (3)

第Ⅴ期 2号住居跡

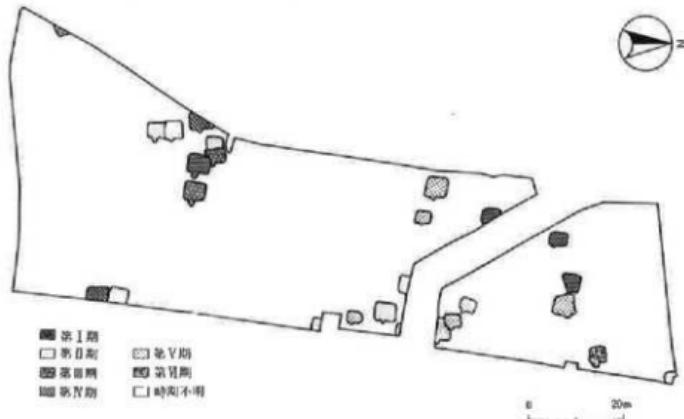
土師器壺・甕、須恵器壺等が検出されている。土師器壺は底部が「砂底状」を呈し、体部は直線的に外傾する。甕は器肉が厚く、口縁部は短く外反する。

以上概要したが、実年代は第V期の灰釉陶器壺が光ヶ丘1号窯式に比定でき、9世紀末葉前後と考えられる。他の時期であるが、土師器甕の漸移的変化から第I期を8世紀中葉から後半代に、第Ⅶ期を10世紀初頭から前半と考えたい。

2 集落の変遷について（第78図）

本遺跡の周辺には勢多郡衙と推定される上西原遺跡（注1）があり、他に大久保遺跡（注2）や中鶴谷遺跡（注3）など奈良時代から平安時代にかけての集落跡が調査されている。本遺跡検出の住居跡もこれらの集落の一端を担うものと考えられる。カマドが検出された住居跡のうち、3号住居跡のみが北側に位置し、他はすべて東側に位置する。

（注1）松田猛ほか「上西原・向原・谷津」郡馬県教育委員会 1986（注2）72P（注1）に同じ。（注3）柳久保遺跡群 計前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988

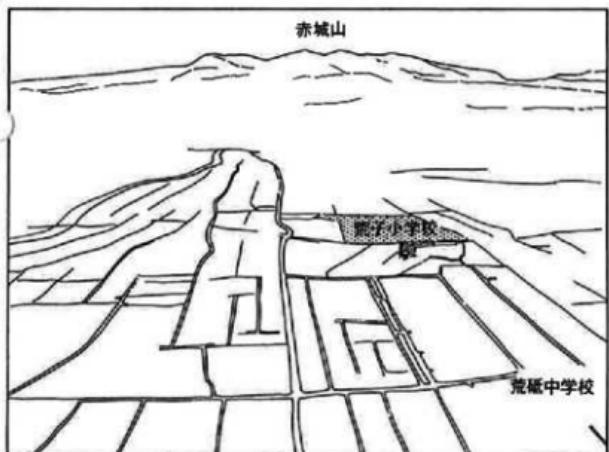


第78図 集落変遷図

写 真 図 版



遺跡遠景（赤城山を望む）



■ 荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡

図版 2



1. 荒子小学校校庭Ⅲ遺跡 空中撮影（左がⅢ遺跡、右が荒子小学校）



2. 荒子小学校校庭Ⅲ遺跡全景（北から望む）



1. 荒子小学校校庭Ⅲ遺跡北側（南から望む）



2. 荒子小学校校庭Ⅱ遺跡全景（南から望む）

図版 4



1. 1号住居跡



2. 2号住居跡



3. 2号住居跡カマド



1. 3号住居跡



2. 3号住居跡出土銅印(1)



3. 3号住居跡出土銅印(2)



4. 3号住居跡出土銅印(3)



5. 3号住居跡貯藏穴

図版 6



1. 4号住居跡



2. 5号住居跡



3. 6号住居跡



1. 右上 7号住居跡
左下 8号住居跡



2. 9号住居跡



3. 10号住居跡

图版 8



1. 11号住居跡



2. 12号住居跡



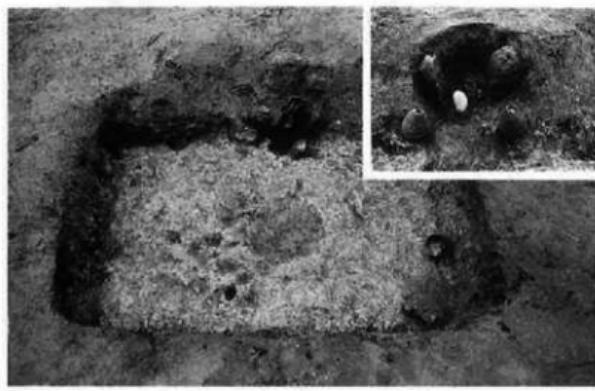
3. 13号住居跡



1. 14号住居跡

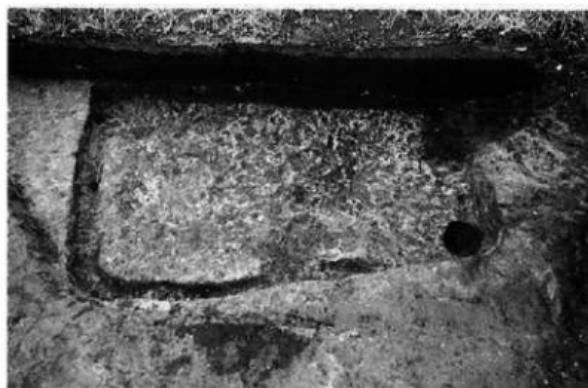


2. 15号住居跡(1)



3. 15号住居跡(2)

图版10



1. 16号住居跡



2. 左下 17号住居跡
左上 18号住居跡



3. 19号住居跡



1. 20号住居跡



2. 21号住居跡



3. 22号住居跡

図版12



1. 23号住居跡



2. 23号住居跡出土遺物(1)



3. 23号住居跡出土遺物(2)



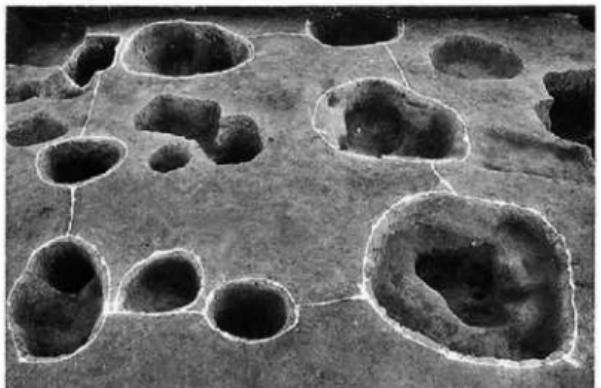
4. 24号住居跡



1. 25号住居跡



2. 26号住居跡



1号据立柱建物跡

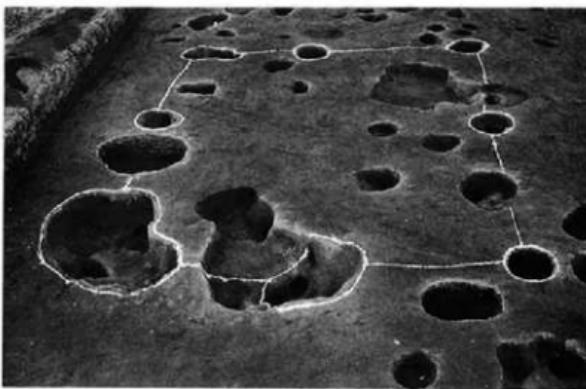
図版14



1. 2号掘立柱建物跡



2. 3号掘立柱建物跡



3. 4号掘立柱建物跡



1. 14号土塙



2. 22号土塙



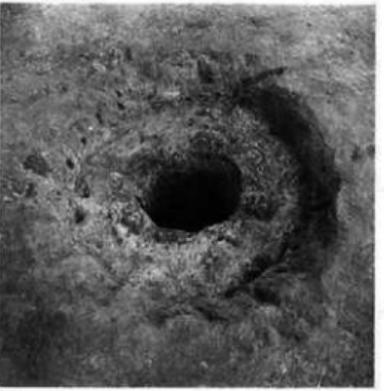
3. 24号土塙



4. 27号土塙



5. 1号井戸



6. 2号井戸

図版16



1. 3号井戸



2. 1号道路状造構北側



3. 1号道路状造構南側



4. 2号溝状造構



2 H-1



2 H-2



2 H-3



2 H-4



2 H-5



2 H-7



2 H-8



2 H-9



3 H-1



3 H-21



3 H-3



3 H-10



3 H-12



3 H-13



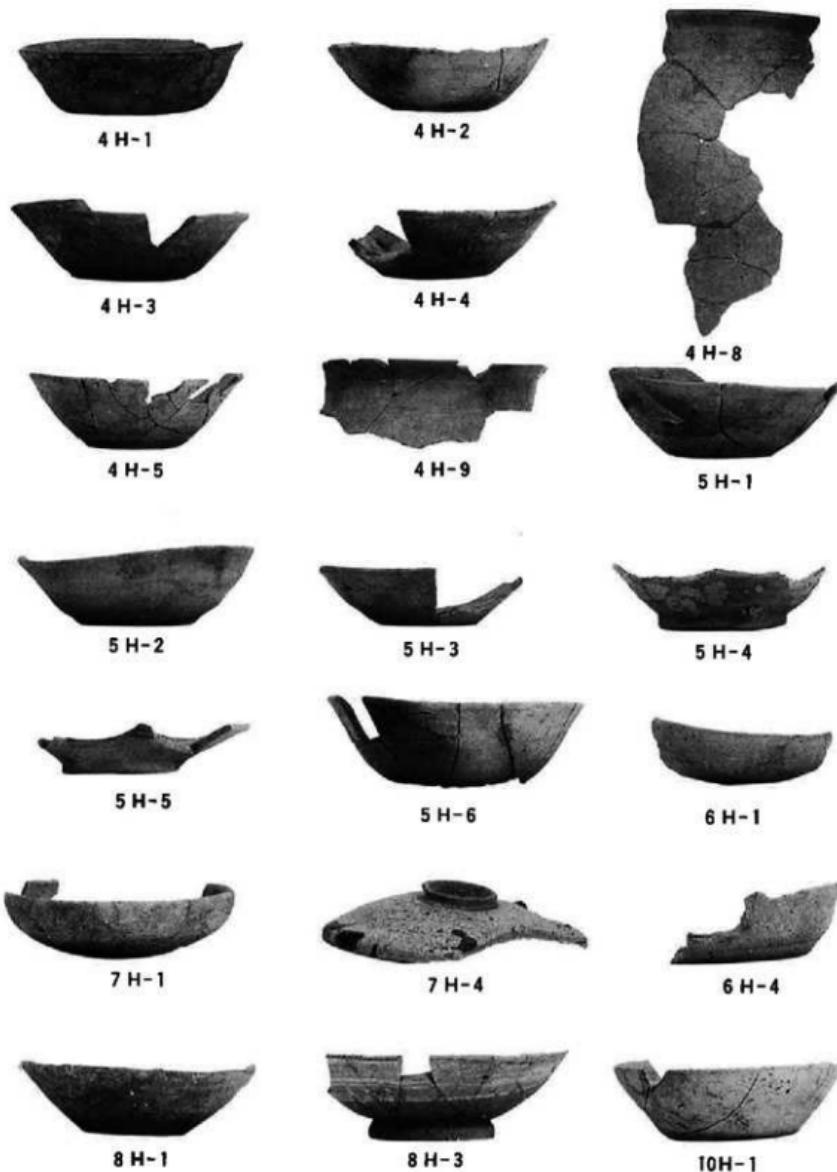
3 H-14



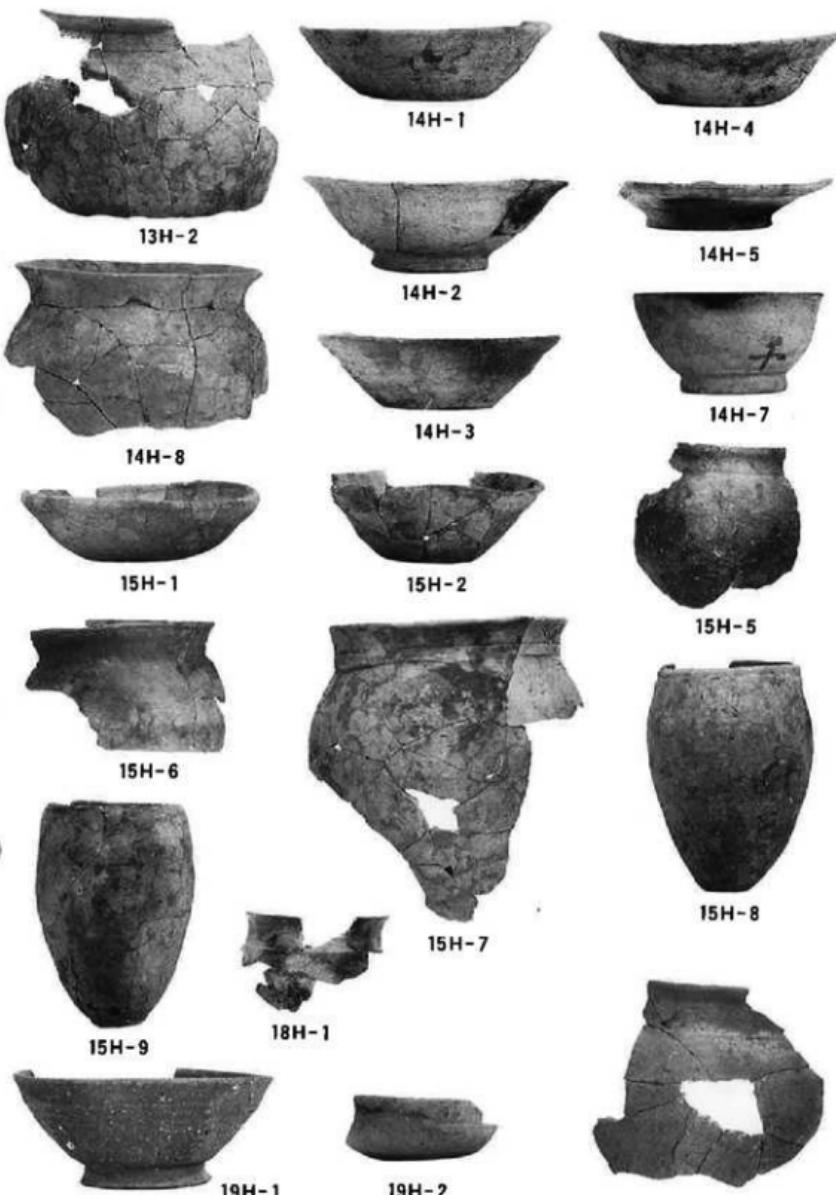
3 H-16

2・3号住居跡出土遺物

図版18

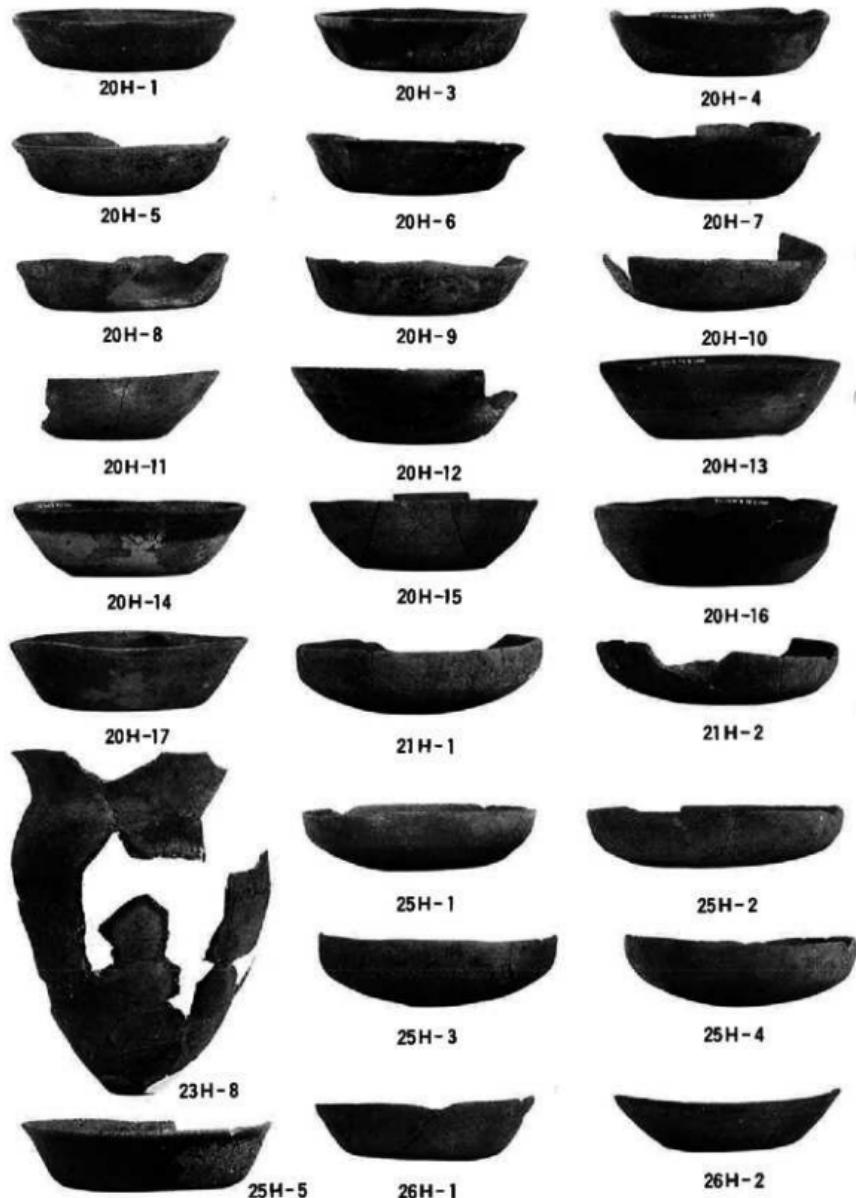


4・5・6・7・8・10号住居跡出土遺物



13・14・15・18・19号住居跡出土遺物

図版20



20・21・23・25・26号住居跡出土遺物



3 H-7 (内面)



3 H-7 (外面)



3 H-8 (外面)



14H-3 (外面)



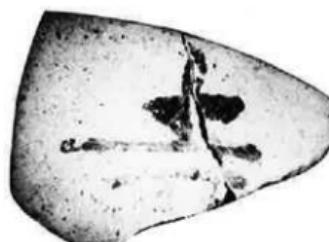
20H-16 (内面)



20H-16 (外面)

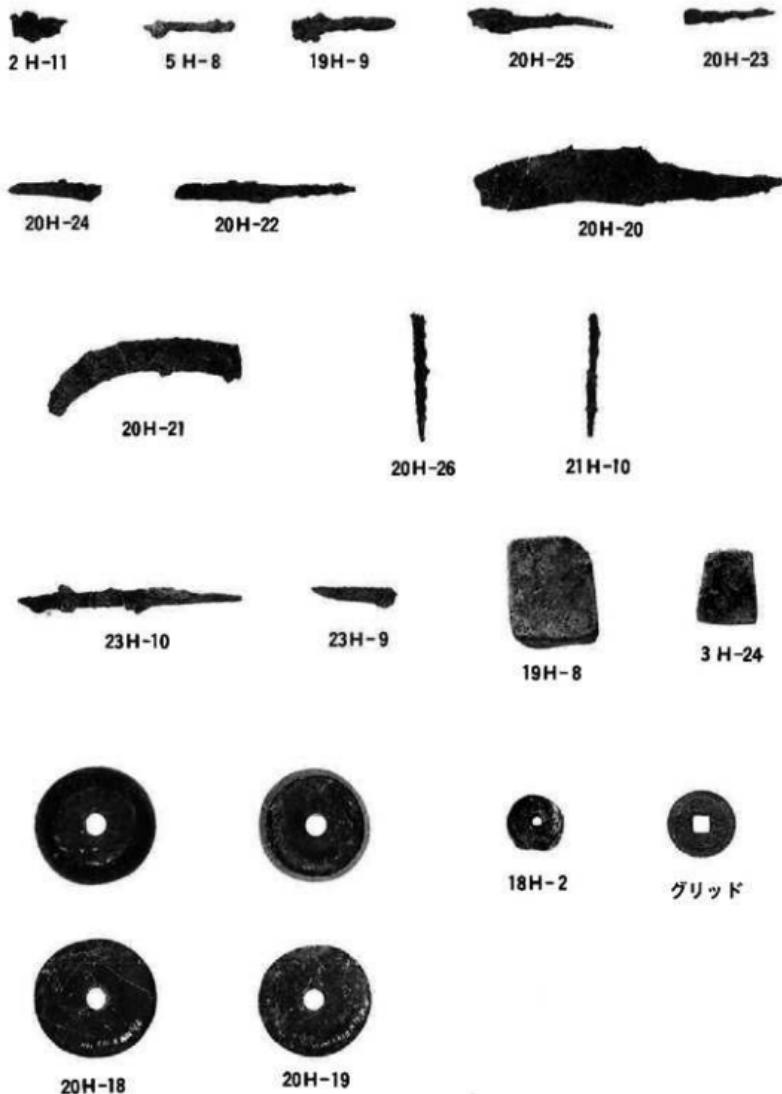


20H-17(外面)



グリッド(外面)

図版22



鉄・石製品・古銭



前橋市三俣町二丁目10-3

前橋市教育委員会文化財保護課

荒子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡

印 刷 平成2年3月20日

発 行 平成2年3月20日

編 集 山武考古学研究所

発 行 前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印 刷 所 朝文文化総合企画
TEL 0476-24-1563

C

O

O

O

1
2